

の一隊が、果して、賊軍の圍を衝いて、出られたか、何うか、といふ事を、探つて来る必要があるのだ。夫に就て、汝を、密偵の役に當てやう、と思ふが、何うぢや、行つて見るか」

坂田は、斯う言ふ冒險的の事は、元來が、嗜なのであるから、大きに喜んで、

「有難う御座います。無論、勤めて見たく、考へます」

「夫ぢや、行つて見るか」

「ハイ」

「良矣、然らば汝に夫を命ずる。雖然、之は隨分、危険な職務で、生て還るなどいふ考へを有てば、出來ぬ事だが、それは、覺悟の上だらうな」

「勿論、其の覺悟で御座います」

乃て、愈よ、坂田が、城を拔出す、といふ事になつて、夜の暗きを幸ひに、段山の方面へ、脱出して來た、所を薩軍の哨兵が、怪しい奴と認たから、ドーンと一發、哀れ坂田は、急所を撃れて、其所に墜れた。此の使も、遂に空しなつて了つた。

城内にも、忽ち此の事が、知れたから、兒玉は、更に兵士の中から、手近に使つて居た。熊野五藏といふ者を、續いて出城させたが、之も途中で、薩軍の爲めに押へられて、斬られて了つた。密偵を使つて、奥少佐の成行を知るといふ事は、遂に、徒勞に屬して了つた。

斯ういふ悪い事は、幾ら隠さうとしても、直ぐ知れるもので、忽ちに城内へ、此の話しが知れ渡つたので、士氣は彌よ衰へて、今は如何とも、手の付けやうが失なつた。夫に付ては、谷司令官も、非常な苦心で、頻りに、方法を換へては獎勵をし、士氣を、惹立てる事を努めた。雖然、思つた程に、其の効がなかつた。

於是、兒玉參謀は、亦々考へを替へて、斯ういふ時には、何でも、樂をさせて置いちゃ可かぬ。戦闘を、飽まで

も續けて、餘事を考へさせない、といふ事が、一番である。休戦して居る事は、士氣を損するの甚はだしきものであるといふ考へより、十一日は、晨且から、戦闘を開始した。法華岳より、花岡山の賊壘を目蒐けて、盛んに、砲撃を開始して、同時に突撃をやる。薩軍も、之に應戦して、非常な激闘が始まつた。

處が、意外にも、此の一戦が、奇捷を奏して、流石、頑強な薩軍も、退却を始めて、遂に、花岡山を捨て、二本木の方面へ向つて、退いたから、之に依つて、幾分か、衰へて居た士氣を、恢復する事も出來て、一同の喜びは、非常であつた。

然るに、尙他の方面も、同時に、同じやうな戦闘が、起きて來て、谷司令官は、傳令使の牧伍長を從へ、各方面を走廻り、自ら、彈丸の飛來る中を冒して、城兵を激勵しつゝ、先づ、病院から始めて、本妙寺、段山の臺場も、難なく巡視を畢り、一の橋の砲壘に立つて、頻りに、指揮を仕て居ると、ビュツと飛んで來た、一發の彈丸は、豈夫、狙撃の彈丸ではなく、流弾であつたらうが、谷の咽喉へ當つたので、呀と叫んで墜れた。從いて居た者の狼狽は、一通りてなかつた。直ぐに、擔架で、病院へ運び込む、といふやうな騒ぎで、折角、花岡山の賊を追拂つて、先づ宜しと安心した効もなく、此の不幸に逢つたのだ。兒玉、樺山等の參謀も、此の事を聞き傳へて、息も喘ぎ、病院へ、見舞にやつて來た。

撃たれた場所が、咽喉であるから、素人見には、非常に重患のやうに思はれて、密と、別室へ主治醫を招んで、兒玉、樺山から、見込を訊いて見ると、意外にも、醫者の言ふ所に依れば、心配はない。存外に、輕傷であるといふので、幾分の安心は仕た。けれども、若し之が、城兵に知れ渡れば、無論、其の士氣にも關するから、參謀等の苦心は非常であつた。

病院と言ふても、今日のやうな、立派な野戦病院とは異つて、まだ其時分の、鎮臺の病院といふものは、甚だ幼稚なものであつた。殊に、永い間の籠城に、傷病兵も多く、夫に對する、一切の設備といふものが、充分に、行届いて居ないから、病院の混雑は、一通りでなかつた。

谷は、司令官であるから、出來得るだけの手當は、するやうなものゝ、迎も、今日の陸軍病院で見るやうな、蒼澤な眞似は、能なかつたのである。谷は、今病床に横たはつて、獨情々考ふらく。

「如何にも、残念な次第だ。彌籠城が覺束ない、となれば、又夫だけの覺悟も、方法もあるし、無理にも、尙一週間を、保つ事が出來たなれば、思ふに、此の熊本城は、將に、我が本隊の爲めに、救ひ出される筈である。斯る場合に、我輩が、此の重傷を負うて、病院の寢臺に、空しく横たはつて居る、といふのは、何といふ、武運の拙い事であらうか」

と、流石に、谷ほどの武士も、幾分は、愚痴に陥て、歎聲を洩らす事は、度々であつた。

折柄、見舞に來た兒玉、樺山は、均しく、枕頭の椅子に掛つた。

「如何ですか、御容態は」

「ヤア……」

と、答へたぎりだ。負傷が、咽喉であるから、醫師より、發言する事を、差止められて居るので、充分に、談話を交へる事は出來ない。二人の話に對しても、只頷くばかりであつた。併し、二人は、主治醫から、傷の経過を、聞いて居るから、幾分の安心を有つて、

「幸福に、閣下の傷は、軽いといふことで御座いますから、餘り、お力を、お落しにならぬ方が宜らうと思ひます」

「ウム、傷が小さいのは、自分にも判つて居るから、然う力は落さんが、只此の事を聞いて、城兵が、力を落しはせまいかと、夫ばかりが、心配ぢやよ」

「イヤ、實は、夫に就て、御相談を申し上げたいのです。幾分か、城兵の取にも、入つて居る様子でありますし、又閣下のお姿が、見えませぬので、餘程、心配を仕て居る、將校などもありますから、全然、秘密にするよりは、幾分か、閣下の御容態を、洩らした方が宜らう、と心得ますが、思召しは、如何でありますか」

「サア、夫は吾輩の考へから言ふと、幾分か洩らす、などいふのでなく、明白に、吾輩の負傷の容態を、一同へ、知らしてやつた方が、却つて宜らう、と思ふ」

樺山は首を振つた。

「然ういふ事を仕たら、益、士氣が衰へて、取返しが付きますまい」

「其様事はあるまい。それに此上、士氣の衰へやうも、ないのぢやから、却つて、吾輩の負傷を、明白に告げた方が敵愾心を起して、宜いかも知れんよ」

兒玉は膝を拍つて、

「そりや、或は然うかも知れん。隠して置いても、孰れ知れる負傷ぢやから、寧ろ打明けて、乗るか反るかで、城兵の今後を、試みた方が宜らう。こりや、閣下の御意見通りに、した方が宜らう」

樺山も、強て夫を争ふて、秘密に仕やう、といふ考へもない。本人の谷と、參謀の兒玉が、言ふのだから、拒む必要はない。夫が宜らう、といふ事になつて、茲に彌籠、一同に向つて、兒玉から、其旨を、明白に知らせた。所が、

谷の見込み通り、之を聞いた城兵や將校は、却つて、非常に發憤して、司令官までが、負傷をせられる、といふに至つては、飽までも我々は、奮闘仕なければならぬ、といふ意氣込で、夫より僅かに半日ばかりではあつたが、城兵の

戦ひ振りは、頗る猛烈を極めた。

然るに、十二日の午前掛けて、頻りに、城外の薩軍が殖えて、包圍して來る調子といふものが、何となく、不思議でならない。之には一同も、非常に心を惱まして居た。折柄の幕僚會議で、各將校の心配は、矢張、包圍軍の

勢力が、刻々に増して来る、といふの一事に集つて、動もすると、話頭は夫に付いて開かれた。兒玉は、靜かに、一同を制して、

「包圍軍の勢力が、時々刻々に、増して来た、といふのは、我輩に言はせると、頗る喜ぶべき事であらう、と思ふ。何故なれば、夫は恰かに、官軍の本隊が、近く一兩日中に、此の熊本へ、攻め込んで来るに違ひない。夫が爲めに賊軍は、俄に其全力を注いで、攻めて来たのぢやらう。諸君は、夫を何と見られるか知らぬが、吾輩は、今に至つて賊軍の強襲して来るのは、城兵の爲めに、却つて、幸福であらうと、考へる、恐らく、此觀察は違ふまい、と思ふ」

この意見には、餘り反對はなく、幾分か、將校の氣も、安んじたやうであつた。有鑒は、兒玉丈けあつて、巧い所へ、考へを付けたものだ。

話頭一轉、谷司令官が、負傷した晩に、片山屋敷の川縁へ、暗を破つて、一艘の小船を、漕ぎ着けて来たものがある。暗い所に躲れて、見張を仕て居た城兵三人が、均しく駈け付けて来て、

「コレツ」

「へエ」

「何だ、汝は」

「何卒、御勘辨を願ひます」

「何が、御勘辨だ、今時分に、小船へ乗つて、城内の状況を窺ふとは、怪しからぬ奴だ。何だ汝は……」

「へエ、わ、わ、私は、此の在の百姓で、御座います」

「百姓が、何仕に來たんだ。稻や麥は、城内にはないぞ」

「イヤ君、詮議をするのは、無益な話しだから、兎に角、引括つて、隊長へ所へ引渡してしまへ。何でも、怪しい奴に

違ひない」

「夫も、然うだな」

震ひ顫のいて居る百姓を、繩撻げにして、自分達の隊へ、引張つて来た。

「エ、隊長へ、申上げます」

「ウム、何だ」

「斯様々々云々で御座いまして、怪しい奴を、引捕へて参りました」

「ウム然うか、之へ出せ」

繩付の儘、百姓だけ隊長の前へ引据られた。

「見れば、正に百姓だが、何て汝は、今時分、船で城へ漕ぎ付たのか」

「へエ、どうも誠に、相済みません。實は、西郷様の方から頼まれました、鎮臺の大將、谷さんといふお方が、怪我をしたといふが、何れほどの怪我であつたか、夫を探つて來い、といふ御沙汰で御座いまして、行かないと言へば、斬られて了ひますから、據ろなく、参りましたので御座います。夫に、骨折賃は、歸つてから、一兩貫ふ事になつて居るので御座いますから、其の一兩は、差上ても宜う御座いますから、何卒、命ばかりは、御勘辨を願ひます」

「ハツハ、一兩貫つたつて、爲様がない。莫迦な事を、言ふもんぢやない。夫だけの事で、漕ぎ着けたのか」

「左様で御座います」

「良矣、命だけは、助けてやる」

「有難う御座います」

「併し、直に出す譯には、可かぬぞ」

「へエ、然うすると、何ういふ事になりますか」
「暫時、此の城内へ留て置くから、心配なしに居るが宜い」
今更に、放して呉れさうもないから、度胸を据て、城内に留まる事になつた。此の百姓から聞いて、城外の薩軍の状態の、一斑が判つて、近日の中に、大激戦の起る、といふ事は、既に、此の時に、覺悟を仕たのである。

一一一

十二日の午後に至つて、城外の薩軍は、彌其の攻撃の鋒を、激しくして來た。於是、城内に於ても、充分に準備を整へ、飯田丸の臺場より、大砲撃を加へたので、薩軍の損害は著しく、意外の奇功を奏した。兒玉、樺山等は、高い所から、望遠鏡を取つて、其の戦況を見て、頗る喜んで居た。其内に、薩軍の狼狽は、益々甚だしく、小荷駄方とも覺しい、一部隊は、水前寺の方面へ向つて、どん／＼退却を始めた。本妙寺の石垣の下に、積上げてある、彈藥箱の如きも、其儘にして、盛に退却して行くから、何の爲めであるか、といふ事は、殆んど疑問の中に、其日は送られた。

さて、明けて十三日になると、再び四方から、盛返して來た薩軍の兵士は、彌振うて、人數も著しい増加。此の状態から察するに、薩軍は、慥かに此の一日を以て、大決戦を爲す覺悟であらうと、兒玉、樺山等は、早くも洞察して、極力、各方面の守備を嚴にして、充分に準備を整へた。

各方面の巡視を畢つて、兒玉參謀が、城内の一番高い處から、双眼鏡を執つて、各方面を見渡すと、遙かに、日向崎の賊壘に、只た一人、日本刀を腰に帶して、身輕な扮装をした人が、之れも双眼鏡を執つて、城内を遠見しながら悠然として、控へて居る。其の武者振が、如何にも立派で、悠揚として迫らない所は、慥かに、一廉の武士であるから、兒玉は、頗りに容姿を見ては、心竊かに感心して居た。後になつて、其人は、例の村田新入であつた、といふ事

が判つて、爾來と、兒玉は、隙を打つた、といふ事である。

何しろ、城外に攻寄つて來た、薩軍の状況から考へるに、一大決戦を開いて、一擧に、此城を、屠つて了はう、といふの覺悟である、といふ事は、最早掩ふべからざる處で、只城内の諸將から見ると、其の決戦に依つて、此の城の死活の定るのが早いか、それとも、官軍の本隊が到着するのが、此の決戦より早いか、孰れにせよ、城の運命は、茲目睫の間に、迫つて來たのである。

於是、第二の突圍隊を編成して、少佐林準之助が、其の指揮官となり、參謀は、中尉黒澤順之が、之に當る事になつて、ひそかに、其機會を待受けた。十三日は空しく過ぎて、十四日の晨明、四方の砲聲は、漸く激甚くなつて、城内からも、之に對する應砲を發する。近來になき、激しき砲撃戦は、茲に開かれた、雖然、本隊の來援は、更にない、午前は過ぎて、三時頃まで、此の砲戦は、打續いて居た、最早、彼は四時であらうか、春の日脚も、漸く暮色を帯びて來た時、長祿橋の方面に當つて、一隊の軍勢が、隊伍整々として、山崎の練兵場附近へ、押寄せて來た、今また丘い所に在つて、双眼鏡を放さず、迥かに之を見て居た。樺山參謀長は、思はず、聲を張上げて、

「ヤア、官軍ぢや。到頭、來居つたぞ」

一同にワツと、鬨の聲を揚げる。夫から夫へと、之が傳はつて、其當時の城内の騒ぎ、といふものは、一通てなかつた。樺山の見た通り、やがて來たのは、中佐山川浩の率ゐた一隊で、今や川尻口の賊軍を破つて、漸う、駈け付け來たのである、部下に従ふ兵は、教導團の選抜隊であつて、其の時分の教導團は、非常なものであつた。其後になつて、此教導團は廢したが、教導團出身の軍人は、非常に評判の良かったものである。

「安んず、先頭隊を率ゐて、目賀多中尉が、下馬橋の左まで來て、大音張上げた。

「安んず、安んず、賊は皆やつつけたぞ」

之が聞ゆると同時に、城内から、ワツツといふ鬨の聲が起る。山川中佐は、馳で、馬から降りて、下馬橋より城内

に入り、出迎ひに出た、樺山見玉等の参謀と、一々手を握つて、
 『ヤア、永い間、御苦勞でした』
 『イヤ、早速有難う』
 『随分、辛かつたらう』
 『ウム、今までの籠城は、骨が折れたよ』
 『然うぢやらう。皆察しては居たが、何しろ、西郷大将の率ゐた、薩軍であるから、之まで来る、といふのは、容易でなかつた。谷司令官閣下は何うなすつた』
 『負傷をせられて、今、病院に入つて居られる』
 『然うか、兎に角、お見舞をしやう』
 山川中佐は、一同に案内されて、病院へ来た。谷の手を握つて、其の輕傷であつた事を喜んで、渠一語、是一語、互ひに、戦鬪の話に移した。
 二月中旬に、籠城を始めて、四月中旬に至つて、辛うじて、内外の連絡が通じ、永い間の籠城の苦心も、茲に於いて、其の甲斐があつたといふものだ。

乃木隊の苦戦

前へにも、詳しく説いた通り、私學校の生徒が暴發した、といふ報知が来た時分には、無論、西郷大将は、之に關係の無いものとして、政府では、見て居たのだ。夫が、段々の報告に依つて、關係のある、といふ事になつて来て、最後には、單に普通の關係でなく、西郷自ら、全軍を指揮して、上京するとの事であるから、於是、政府も、打捨て置く事は能ない。一度、勅使を下向せしめて、鎮撫を爲様と計つたが、夫も終に無駄となつて、愈々、征討軍を發する、といふ事になつたのである。
 先づ、二個師團の兵を發する、といふ事に決し、第一旅團長は、陸軍少將野津鎮雄、参謀は中佐岡本兵四郎、第二旅團は、三好重臣(少將)が、旅團長となつて、参謀には、大佐野津道貫が、従く事になつた。
 出兵の準備も整ふて、二月二十日に、神戸を發し、海路を取つて、下之關に向つたのである。下之關に着くと、廣島へ赴任して居た三浦(梧樓)少將が、訪ねて来て、九州の状況を報告したので、此時までも野津は、西郷の自ら立つて、此の暴舉に、與するやうな事はないもの、と信じて居たが、茲に至つて、愈々西郷が、暴舉の首魁になつて居る、といふ事が、判明したので、思はず、太息を吐いた。
 三浦は、膝を進めて、

「今言ふ通りの次第で、西郷大將も、彌々立たといふ事ぢやから、戦争としては、無論、物にはなるまいと思ふが、何しろ、對手が、西郷大將であつて見れば、君に於ても、萬事、やり辛い點もあらう、と思ふて、實に、お察しをするよ」

野津は、暫時、首を垂れ、腕を組んで、考へて居たが、

「ヤア、實は、然ういふ事になると、己も實際困る。何しろ、西郷先生を對手、といふのぢや、自然、腕も鈍るからな。然し、如何に西郷先生でも、逆徒の名を甘んずる、といふのは、假令、怎いふ事情が、有るにもせよ、惜むべき事だと、己は實に、歎かはしう思ふ」

三浦は、長州藩の出身であるから、野津ほど情實の關係はなからうが、併し、同じ軍將の一人として、西郷を觀る目からは、野津と同じ様な感も、多少はあるのだ。

「君の心事は、お察しするが、マア事茲に至つては、致方がない。假令西郷大將といへど、朝敵と成つた以上は、詮方がないさ」

野津も、軽く頷いて、

「大きに然うぢや。此上は、其覺悟を以て、乗込まなけりやなるまいよ」

野津は、前名を、七左衛門と言ふて、膽勇、衆に勝れ、膂力の、非常に強かつた人だ。此戦役を経て、明治十三年に病死したが、年は漸う四十四であつた。子供の時分から、却々、薩藩でも評判の男で、文久年間に、英吉利の軍艦が、鹿児島灣へ攻め込んで來た時分には、年も、未だ若かつたが、沖の小島の砲臺を受持つて、却々、奮闘したものである。其弟が、道貫である。陸軍部内では、此兄弟を、大野津、小野津と言ふて、二人共に、評判の男であつた。砂取村に、滞陣中の歌がある。

都には花にうかれて遊ぶらし

我住む山は猿飛ぶなり
強いうちにも、優しい所が、あるではないか。兎に角、兄弟揃ふて、陸軍部内で、彼れ丈けに知られたのは、全く珍らしいことだ。

一一

野津の旅團が、馬關を發する時に、三好の率ゆる第二旅團が、漸く到着した。二十二日には、此の二個旅團が、筑前の博多へ、同時に到着したのだから、随分機敏にやつたには、違ひない。

博多は、舊黒田藩の城下で、河一つ隔て、福岡と相對して居る。

第一旅團は博多に、第二旅團は福岡に、暫時滞陣する事になつた。當時の福岡縣令、渡邊清が、兩少將に面會をした、といふので、乃て二人は揃うて、待つて居る所へ、渡邊縣令が訪ねて來た。

「這回は、遠路を御世征、誠に、御苦勞に存じます」

野津は之に應じて、

「ヤア渡邊君。今度は、御迷惑ぢやよ」

「イヤ、何う致して、自分共よりは、貴君等こそ、戦役に臨むのであるから、非常な御苦勞であらう、と思ふ」

彼は話をして居る中に、三好少將は、席を進んで、

「時に渡邊君、何か相談が有る、と云ふが、夫は何ぢやね」

「イヤ、他でもないが、賊軍が第一に、目蒐居るのが熊本城で、第二が、此博多である、といふことぢやが、こりや無論、夫に違ひなからう。九州で事を起す者が、熊本城を取つて、博多を押えれば、夫て天下の事は成のぢやから、無論、此の博多へ、近い中に、押て來るに違ない。夫に就ては、貴君等の率ゐて居る、軍隊の中より、一部の兵を

裂いて、是非、此博多に、留置いて貰ひたい、と思つて、夫て實は相談に來たのぢや。御都合は何うぢやらうか」
三好は、野津の顔を見て居て、容易に口を開かない。野津も、不味い顔して、目を翳して居たが、渡邊は、益々膝を進めて、

「何うてせうかな。是非、之だけは、御承知を願ひたいが」

再三迫るので、終に野津は、

「そりや、折角ぢやが、可かん」

「出來んのですか」

「ウム」

「併し、熊本城も大切であらうが、此博多も、大切な場所である。夫を、只可かんといふ一言で、斥けるのは、些冷

酷であらう、と思ふが」

野津は、少しく顔の色を變へて、

「莫迦な事を、言はつしやい。熊本城は、今、賊軍が奪りに來る所ぢや。之を先に防ぐ、といふのは、當然な話ぢやないか」

「併し、夫も然うですが、此の博多も、大切ですから」

野津は、空嘯いて、ニヤリ／＼笑つて居る。渡邊は、三好の方へ、膝を向け直した。

「貴君の考へは、何うぢや」

三好は、野津の方へ向直つて、

「野津君、何うぢやね」

「ウム、渡邊の話しか」

「然うさ」

「そりや、可かんさ」

「己も、可かんと思ふが、渡邊が、斯ういふのぢやから、確と、返答してやらんきやなるまい」

「そりや、大きに然うぢや。併し、別に答への爲やうも、ないからな。我々は、熊本城を救ふ爲に、來たのぢや。要するに、賊軍を征討する、といふのが目的で、縣令の首の、一ツや二ツ飛んだ所が、天下の大勢には、關係がないからな」

稟として、野津が言放つた、此の一言には、有鑿の渡邊も、二の句が續げず、其儘に、縣廳へ歸つて來た。當時の渡邊の器量の悪さは、一通りてなかつた。

三二

野津、三好の率ゆる、二個旅團の兵は、博多を出發して、熊本城を救ふ爲めに、二手に分れて、肥後路に向つた。夫までに、追々、詳細の報告が來て、意外に薩軍の勢力の、盛んなる事が、知れて來たので、政府に於ても、由々敷一大事と、見て取つた。詰まり、西郷を除いての薩軍なるものには、然まで、恐怖の念も、懷いて居なかつたけれど、一人西郷大將が、之を率ゆると、いふに至つて、政府が怖れたのである。

今更、言ふまでもなく、當時の西郷が、天下に重きを爲して居た事は、非常なもので、殊に、九州に於ける、西郷の勢力は、政府の威令の届かざる所も、西郷の爲めには、動いたものである。

夫は、政府の當局者に於ても、能く知つて居るから、眞に西郷が立たとなれば、其の恐怖心を強くしたのも、無理はない次第で、薩軍も又、數の上でこそ、一萬内外であるが、慄悍驕勇の將卒も少からず、多く接戦に依つて勝敗を決するといふ、其時分の兵としては、必ずしも、悔る事が出來なかつたのである。於て、是、陸軍卿の山縣有朋は、監

軍の職を奉じて、急行、馬關に來り、有栖川征討總督の宮殿下の、御進發を待受ける事になつた。此時に、三浦梧樓は、第三旅團長に任ぜられて、前の二個旅團を逐ふて、進む事になつた。彼是する中に、宮殿下は、海路を博多へ、御着に相成つて、福岡の勝立寺を、本營といふ事にして、此處に官軍全隊の總轄を、遊ばされる事になり、山縣監軍は、其の下に付いて、畫策申上げる、といふ事になつたのである。福博の地は、大阪馬關の要衝を扼して、海上運輸の便が宜い上に、陸は久留米佐賀を受けて、遠く熊本を抑へるに、此上もない策源地である。

這回の一戦は、宮熊本城の運命に依つて、決するのであるから、自然、博多を以て、本營の地とせられたのは、其の當を得たものである。此の時に、小倉分營に對して、出兵の命令が下つたのであつた。

前にも述べた通り、第十四聯隊を率ゐた乃木少佐が、非常な苦戦を爲しつゝ、熊本に向つたのは、即ち其の際であつた。乃木隊が、植木街道に、非常なる苦戦を極めた狀況の一半は、前に述べたが、猶其後の戦況を、述べる事にしよう。

其當時の聯隊は、甚だ少數の者であつて、加ふるに、之が幾隊にも別れて進んだ、といふ事は、薩軍をして、充分に、奇捷を制せしむる、原因となつたのである。

本街道には、第三大隊長少佐吉松秀枝が率ゐたる一隊、右翼の木葉山上には、少尉宇佐川一正が率ゐたる一隊、而して、乃木少佐は、自ら敗殘の兵を率ゐて、左翼の山腹に、迂回して來る敵を防ぐ、といふやうな手順になつて、茲に十數回の苦戦を極めて、能く防戦の目的は達して居たが、それも、長くは續かないのだ。殊に、熊本城へ乗込むのが、目的であるから、尙更、此處に長く居ることは、好まないものである。只斯うして、旅團兵の到着を待つといふのは、止むを得ず、左様なつたので、而かも、戦鬪は時々刻々、苦戦に陥るばかりで、旅團の到着は、何時の事やら、豫め知る事も出来ない、といふ状態に、陥つて了つたのである。

乃木隊が、斯ういふ風に、途中で、苦戦して居ることは、糧臺の方で、少しも知らなかつた。併し、之れが爲めに、乃木隊が、はやく入城しなかつたのは、後になつて考へれば、或は、籠城の上には、利益であつたかも知れない。何故といへば、この一聯隊が、無事に入城して、それだけ、人數が殖えたら、糧食の不足に苦むの餘り、無謀の戦鬪を初めて、大切な城は、薩軍の手に入つたかも知れなかつた。この點から考へると、乃木隊の、途中で苦戦して居たのは、却つて、全體の上からいふと、或は、幸福であつたかも知れないのだ。

四

備、本街道に奮闘を續けた、吉松少佐は、彌、防戦が覺束なくなつたので、急に、乃木隊に對して、援兵の請求を爲すべく、使を立てた。此本街道の、吉松少佐の兵が、頑強に能く、敵を防いで呉れなければ、乃木、宇佐川の兵は、到底、敵に當る事は出來ないのである。然るに、吉松よりは救ひを求めて來る、といふやうな譯であるから、之には、流石の乃木も、一驚を喫して、本街道へ單身乗出して來た。吉松も、乃木が自ら來りし、と聞いて、すぐに之を迎へた。

「戦鬪は、大分難かしさうぢやな」

「イヤ、此状態では、逆も覺束ない。退却の他はなからう、と思ふ。何うしても、少し手傳つて貰はんきやなるまい」

乃木は、太い鼻を吐いて、

「そりや、弱つたの。吾輩の方には、逆も、分つべき兵はないのだ」

といふて、吉松の顔を睨と見る。吉松も、乃木の顔を睨めて、暫時は、言葉がなかつた。良久あつて、乃木は、

「良矣、吾輩が、此の方面を引受けてやらう。君、吾輩と替はれ」

「エツ、兵の分つべきものがない、といふのに、代れといふのは……」

『イヤ、己はもう、前に一度、死んで居るべき筈なのぢやから、君に代つて、吾輩が此處で、斬死をするまで、やつて見やう、と思ふから、君は、吾輩の方を受持に、廻つて呉れ』
吉松は、満面に朱を注いだ。

『そりや、怪しからぬ。吾輩は、到底此處の守りに、應ぜられぬから、それで退却する、といふて、相談してのぢやない。然し、本街道で、敵の正面に立つて居るが故に、之では、敵を防ぐに、餘りに力が薄いから、援兵の要求をしたのであつて、死ぬまで踏留まつて戦ふ、といふ事は、吾輩といへども、決して辭せん所である。最早宜しい、此相談はせん。各自、現在まで定た通りの受持に依つて、死守する事にしやう』
乃木が、代つて死ぬ、といふた一言は、吉松を、餘程刺撃したものと見えて、強て乃木を送り返し、自らは、非常なる覺悟を以て、奮戦をする事になつた。

彼是する中に、夜になると、豫て放つて置いた、間諜が走せ歸つて、敵の大兵が、今此處へ押寄せ、といふ報告である。吉松は、僅かに部下の渡邊中尉外二十人の、決死隊を撰抜して、道端の松林の中に伏せ、若し敵が来たならば、突撃して、一泡吹かす計畫であつた。

其内に、ワーワツといふ鬨の聲と共に、押寄せ来る雲霞の如き敵兵、それを對手に、一採み二採み採んで、最早時こそ宜ければ、かねての合圖をしたから、渡邊中尉以下の決死隊は、俄に敵の側面から、切つて入る。不意の突撃に、敵兵は浮足立て、一時は亂れんとしたが、流石に鍛へ上げた薩軍は、僅かに敗兵の足を留めて、盛返しが付いたので、之が爲めに、吉松隊は總崩れとなつた。折柄の大雨は、盆を覆すが如く、其困難は一通りでなかつたが、辛うじて、稻佐へ着いて、ホツと一息、吐いた間もなく、俄に敵兵が、間道より進んで、横合より突撃を試みた。吉松の隊も之れに應じて、實に凄じい接戦となつた。所謂、白刃相迫り、赤手相搏つ、といふやうな光景で、此の時の接戦ほど、激しい事は、餘り多くなかつたのである。

乃木、宇佐川の隊も、本隊が崩れたから、却しく退却して、稻佐に來た。折柄の此の接戦である。再び吉松の隊を助けて、敵味方、入り亂れての戦ひとなつた。數日の奮戦苦闘に、乃木の馬は、既に疲れて動かさず、見兼ねて吉松が、自分の馬を譲つて、乃木に與へた。乃木は、其の馬に跨つて、更に敵陣へ乗込み、奮闘を續けたが、此馬も終に、敵陣に中つて斃れ、乃木は已に、敵の包圍の中に陥つて、既に斯うよと見えた處へ、僅かに、大橋といふ伍長が飛付けて、三四の敵を打倒し、乃木を救ひ出した、といふほどの苦戦であつた。

恰度、折宜く、此處へ駆け付けて來た、少尉候補生の摺澤靜夫が之を見て、大橋伍長の奮闘を賞し、乃木少佐を救ふて、川床といふ處まで、逃延びて來て、此處で、敗兵を集めて、一息吐いた。
此の戦ひで、吉松少佐は、隣れ重傷を負ふて、夜の曉方に、死んで了つた。

五

此戦争の大勢は、偏に、熊本城の陥落に依つて決する、といふ考へがある爲に、薩軍は、殆んど其の全力を盡して、攻め立たが、籠城して居る鎮臺兵が、能く之を防いで、却々陥落に至らなかつたのである。

彼是して居る中に、四月の上旬となつた。官軍の本隊は、海路を取つて、續々と、此の方面へ、其の力を集注して來た。第一旅團、及び第二旅團は、前回にも述べた通りで、之に加ふるに、第三旅團、第四旅團を以てしたから、都合四個旅團になつた譯だ。第三旅團長は三浦梧樓(少將)、參謀は高島綱之助(大佐)、第二旅團長は山田顯義(少將)參謀は山地元治(少佐)、孰れも薩長出身の名將の器ばかりで、全軍、川尻街道に向つて、其の主力を注ぐ事に決した。右翼は、球磨川の堤に添ふて、河南の敵を、牽制する任に當り、中央隊は、萩原の東數ヶ町に跨つて、塙壁を築き、更に左折して、古麓の薩軍に對抗すべく、左翼は、宮地村の西方より、片野川村に連らなり、宮原の分遣隊と、連絡を取つた。全軍の根據は八代に据ゑ、山地參謀は、宮原に在つて、専ら敵の逆襲を、防禦する策を、講ずる事に

なつた。實に、正々堂々の陣を張つて、一舉に、熊本城を包圍して居る薩軍を、殲滅するの勢ひであつた。之に對する、薩軍は何うか、といふに、此の方面に向つては、別分晋介、邊見十郎太、淵邊高照、永山彌一郎等の名將が、二千餘人の兵を率ゐて、其の根據地を小川村に定め、左翼は、球磨川の南に添ふて、遙拜山に砲臺を築き、大砲を備へ、其山麓より、高田村豊原村の堤に添ひ、長蛇の陣を張つて、中央隊の古麓を扼し、壘壁を、櫻の番場に築き、背後の山上に、砲臺を据ゑて、一隊の兵は、龜峰より宮地、川床の山嶺に跨り、右翼は、南種山より、井取越の險要を扼して、宮原の官軍を壓迫する、といふ計畫になつて居た。若し、形容して言へば、矯々たる武士、猛きこと虎の如く、堂々たる名將、奇策を弄す、とても言ふのだらう。薩軍の意氣、頗る熾にして、その陣を構ゆることも、極めて巧に、毫も、官軍に對して、遜色がなかつた。雖然、殘念な事には、順逆の道を誤り、賊徒の汚名を、取つて居るだけに、戰爭の結果も、豫め測る事が出来るのだ。

殊に、官軍は、後詰の兵に苦しまないけれど、薩軍は、之に付いて、全く缺けて居た。のみならず、兵器が、甚だ不良であつた、といふやうな關係から、意氣の壯なる割合には、此の方面の働きも、自分の見込通りには、行かなかつたのである。

淵邊高照といふ人は、前名を直右衛門と謂ふて、陸軍少佐を勤めたほどで、曾ては、北條縣の知事も仕たことがある。極めて磊落不羈な人物であつて、容易に、人に許さなかつたが、獨り西郷大將にだけは、能く服して居た。征韓論が破れて、西郷の歸國したことを聞くと、其儘國に歸つて了つた。それと知らずに、友人が、淵邊の宅へ尋ねて行くと、寢床が敷いてあつた、といふ位に、平生は、何事にも、無頓着の人であつた。惜い哉、都之城の一戦に、討死を遂げた。

黒田清隆は、參軍として、此方面の官軍を、監督をして居たのである。四月八日に、伊東海軍少將、高島陸軍大佐の二人を伴うて、木原山といふのに昇つて、遙に、熊本城の方面を見て居ると、忽然として、一隊の軍兵、其の數は、餘り多くないやうだが、山田少將の率ゐて居る、旅團兵の哨兵線に向つて、進んで來るから、たしかに敵に違ひがない。併し、敵にしては、砲聲も起らず、吶喚も聞えぬから、或は味方かも知れぬが、味方としては、其方面に就て疑ひがある。三將共に、頗る疑問を懷いて、下山して來た。所へ、山田少將からの使者が來て、黒田參軍に拜謁したい、といふので、黒田は直に、其の使者に、會ふ事になつた。

「汝が、山田旅團長からの使者か」

「ハイ、左様で御座います」

「何だ」

「只今、熊本鎮臺より、奥大尉の率ゐました一隊の兵士が、敵の圍みを破つて我旅團へ、到着致しましたから、此事を、直様申上げて置くやうに、と云ふ命令で、罷り出でまして御座います」

「ハ、ア、然うか。木原山から見えた、怪しの軍兵は、夫であつたか。良矣、其方の用事が済んだら、奥大尉に、此方へ來るやうにと、山田旅團長へ、傳へて呉れ」

「ハイ」

山田の使者は、元來し道へ引返し、黒田は、伊東、高島の二人を顧みて、

「何うも、不思議ぢやと思ふたが、味方の兵が、敵の包圍を破つて、出て來たのだ、と云ふ事ぢや」

高島は、限りなき喜びの色を現はして、

「今、承はりますれば、奥大尉が率ゐて來た、と云ふ事ですが、奥は、佐賀の暴徒の時分にも、城兵を率ゐて、敵の包圍を脱けた男で、然ういふ事は、彼奴却々うまい、と見えますな」

「然つさ、さうかも知れぬよ」
 暫くすると、奥大尉はやつて来た。續いて後から、山田少将も来た。此山田が、維新前には、市之允といった人であるが、後に司法大臣になつて、故人になつた。元來、法律は其の長所でない。戦争をさせたら、實に上手な人であつた、と云ふ。以前は、毛利の家臣で、長州出身の軍將の中では、最も、實戦に巧妙な人であつた、と聞く。夫が全然、商業達の法律で、一生を終つた、と云ふも、實に奇な譯である。
 奥大尉から、段々、城内の様子を話すと、一同も、詳しく聞き取つた。黒田は、並居る將校を顧みて、
 「奥大尉の話に依ると、城内は、餘程、彈藥兵糧等の爲めに、切迫して居るやうであるから、何でも、明日の一戦には、敵の一方を打破つて、城内へ、連絡を通ずる事を、心掛けなければならぬ、と思ふ。此の方面の賊軍は、名代の驍將が、集まつて居るから、諸君は、其覺悟を以て當つて貰ひたい」
 一同は、只領いたのみで、すぐに地圖を開いて、段々軍議に掛つたが、戰略上、何うしても、御船の敵を打破るのが順序で、且は、一番容易といふ、豫算が立つて、先づ、御船の敵を破る、と云ふ事になつた。
 此見込を付けられた、御船街道を守つて居たのが、永山彌一郎の率ゐた、一隊の薩軍であつた。永山は、始め萬齋と稱して、島津家にお茶坊主を勤めて居たのだが、極めて豪傑風の男で、且策略にも、却々長じて居た。未だ少佐として、陸軍に勤めて居た時分に、北海道の屯田兵の長官になつた事がある。征韓論が起つて、西郷が、愈々辭職する、といふやうな騒ぎになつた時には、恰度、東京に出て居たのである。

七

同じ薩州出身で、西郷を、崇拜して居る軍人は、皆、西郷に應じて、征韓論を唱へたけれども、此永山丈は、始めから黙して居て、更に賛否を表さなかつた。多くの中には、西郷の弟、從道や、黒田清隆のやうに、公然、反對し

た人もあつたが、大抵のものは、理非をいはずに、西郷に、同意したのである。
 今日の間議に、征韓論が破れたならば、愈々朝廷を退かう、といふ決心を以て、西郷が、内閣へ出た時、其跡で、永山ばかりは、今日まで賛否を言はぬから、その意見を、先づ確めやう、といふ事になつて、大勢で、押掛けて行つて、ワイ／＼言ふて、永山に迫つたが、只腕を拱て、眼を閉ぢて、考へたきりて、更に、答へをしなない。
 「永山どん、貴公、何うする意ぢや」
 「ウム」
 「ウムばかりぢや判らん。全體、何う決する意ぢや。西郷先生は、已に辭職の覺悟を有て居られる。若し、先生、辭職をせられたらば、貴公は、何うする」
 「そりや、先生は辭職をせられても、俺どんは、辭職する譯にや往かぬ」
 「何と、貴公一人、之を招むといふのか」
 「ウム」
 「そりや、何ういふ理由ぢや」
 「俺、西郷先生の家臣ぢやない、朝廷の家臣ぢやからな」
 了得の一同も、此斷乎とした答へには、返す言葉もなく、其場を去つて了ふたが、薩では散々、永山を罵詈雑笑した、といふ事である。
 然るに、西郷が職を辭して、愈々國へ歸つた後に、自分は只一人、辭表を朝廷へ捧げて、悠々と、國へ歸つて来た。此の前後の、永山の態度といふものは、實に、順序を得たやりかたであつた、と、心ある人は、皆感服したのである。總てが、斯ういふ調子であるから、附和雷同して込も、人と共に事をする、といふ事は、決してしなかつた。愈々戦争を起すに就ても、始め村田、邊見の二人から、段々、永山を説いたけれども、永山は、

「御免蒙る」といふ一言で、他の事は言はぬから、猛烈な性質を有つて居る、邊見の如きは、非常に激して、日本刀の柄を敲いて、争さうだけれど、永山は只悠然として、

「御免蒙むる」の一言であつた。已に棒事も、出来しやうといふ様な、場合になつたのを、村田が、漸くに邊見を宥めて、立歸つて来た程である。西郷は、之を聞いて、太息を吐いて、

「俺どんな力を以て、永山一人を、遂に起す事が能んか」といふて、歎息をした、傍に之を聞いて居た、例の桐野利秋が、直に馬に乗つて、永山の宅へ駆け付けて、到頭、膝詰の談判をして、永山を連れて来た。その時に西郷は、徐に席を立て、今や席に着かうとする、永山の手を執つて喜んだ、といふ事であるが、此の一事を以ても、永山の如何に、薩軍中で、重きを爲して居たか、といふ事が、想像出来るだらう、と思ふ。

猶ほ少しく、維新前後の永山について、一二の逸話を述べて置かう。

戊辰の役、奥州棚倉の戦鬪に負傷して、横濱病院へ送られて治療中に、左の腋の下に撃ち込まれた、銃丸を抜き出すについて、荒療治を爲ねばならぬ、といふので、眠薬を喫がせることになつた。然るに、永山は、絶對に拒んで、正氣の儘、銃丸を抜き取らせたとである。されば、桐野の如き人でも、永山の大胆と敏捷なるには、何時も、感嘆して居た、といふことだ。

十年の役、鹿兒島を發する時、西郷は、特に永山を以て、第三番の大隊長にしたが、一人として、異議を唱ふるものはなかつた。永山が、郷黨の間に、重んぜられたことが、解るだらう。

川尻方面の戦鬪

奥大尉の報告に依れば、熊本城中の糧食は、已に、缺乏を告げつゝあつて、非常の節約をしても、猶、數日の防禦を、保つに過ぬ、といふのであつた。之が爲に、戦鬪に参加するものは、黍とか、粟とか、いふやうな物から、出來た飯を二度、其他に、米の粥は、一度給せられるばかりであつた。而已ならず、藥品の如きは、全然、缺乏を告げて居る、といふ。之等の情報を、聞いたので、何うしても、御船方面の兵を討破つて、籠城軍を、救ふ必要は、頗る其急に、迫つて居るのである。

山田少將が、當時、部下の諸隊に下した、軍令を讀めば、其一斑が判る。何ういふ風に、書いてあつたといふと、我軍、崎陽ヲ發セシ以來、數日ノ戦鬪ヲ經テ、宇土驛ニ、進入スルヲ得タリ。夫レ、本日、奥大尉、城兵一大隊ヲ率テ、生死ヲ顧ミス、賊ノ重圍ヲ衝破シテ至ル、實ニ、非常ノ擧ナリ。亦聽ク、城中、糧米ニ乏シク、或ハ軍馬ヲ屠ツテ、傷者ニ給セリト、其艱辛、想フヘキナリ。專將ニ、不日、大進撃ノ令アラントス。其際ハ、各隊、能ク前旨ヲ體察シ、一層奮戰、萬死ヲ冒シ、以テ、速カニ、勦滅ノ功ヲ奏セヨ。功ヲ建テ、名ヲ顯スハ、實ニ此擧ニ在リ、顯切ニ、之ヲ望ム。

亦、黒田參軍の發した諭告は、熊本城中ノ危急、聽ク所ノ如クナレバ、連絡ヲ取ルコトヲ、一日モ緩クスヘカラス。軍議ハ已ニ決セリ、毎時、申稟ヲ要セス、須ラズ、便宜、事ニ從フヘシ。

此二通の諭告文を、讀んで見ても、熊本城を救ふ事の、甚だ急に差迫つて居た、といふ事は、想像するに、餘りあるであらう。

當時の薩軍は、其勢力を、川尻、御船の方面に、集めて居たのであるから、此方面にさへ、美事に打破る事が出来れば、即ち、熊本城の方は、自然に、解けて行け譯になるのであるから、官軍が、殆んど其の全力を、此の方面へ注いだといふのも、無理でない。殊に、御船街道つ向つて、加へた攻撃といふものは、容易なものではなかつた。夫に對抗したのが、永山彌一郎の一軍である。熊本協同隊の、最も奮闘をしたのも、亦此方面であつた。

薩、戦鬪は開始されて、時々刻々に、激しくなつて来る。薩軍は、實に能く、死力を盡して、奮闘したけれど、悲しい事には、全軍の連絡が、思ふやうに、取れて居なかつたのと、要するに、烏合の衆、殊に、武器の精銳を缺いて居たといふやうな、缺點があつた爲に、今や、御船の永山隊は、殆ど孤立の位置に立つて、極めて、苦戦をするやうになつた。併し、永山は、中々の名將であり、實戦も巧な人であつたから、能く寡を以て、衆に對し、其苦戦の状態の儘で、長い時間を、防戦に努めた。雖然、大體に於て、敗戦といふ事は、最早、掩べからざるまでになつた。

此際に、一の美談がある。戦鬪の續くに従つて、味方の兵力が、漸々弱くなるのは、死傷の爲めに減じた兵を、填補する事が出来ないから、夫れだけ、勢力は減ずる事になる。之れを憂ひて、永山部下の諸將が、荐りに、各方面へ人を走らせて、新兵の徵募をした。迷惑を被つたのは、其附近の人民であつて、強て就役を促される。夫を拒めば、命が危いといふので、據なく、皆此命に従つたが、果は其煩に堪へずして、二三の者が、永山を、陣中に訪ふて、此事を訴へると、永山は、其人々に向つて、

「然う言ふ事のあつたのは、俺どんは、少しも知らなんだ。誠に、氣の毒に思ふ。今後は、然ういふ事のないやうに爲るから、決して、心配するな。安心して、其業務を働いたら宜らう」
ふかく慰めて、此連中を返した隙で、彼の募兵といふ事を、禁止して了つた。然るに、左右の者は、永山に向つて、

「事、茲に及んでは、最早、致方がありません。一時、退却をしたら、如何で御座いませう」
永山は、首を掉つて、

「俺どんな、戦ひに臨んでから、未だ會て、退却をした事はない」
頭として、其説を容れなかつた。部下の兵は、死傷の數を増し、募兵は減ずる。夫て退却をせぬ、といふのであるから、永山の心は、已に、此御船街道の露と消える、覺悟であつたに違ひない。

果、哉、最早、防戦の力が盡きた、といふ事になつて、全軍殆んど總敗北、其中に、永山は、只一人踏止まつて、奮闘をして、身に、數ヶ所の重傷を負ふた。力既に竭たと見るや、傍の民家へ入り、酒樽に腰を掛て、切腹して、遂に相果て了つた。永山の如きは、多く得難き勇將である。

俠勇桐野利秋

一

官軍の本隊が、八代口に上陸した、といふ事が、四方に傳播すると、諸道の官軍は、頗る其勢ひを、増したのに引替て、薩軍の落膽は、一通りてなかつた。

此八代口方面の薩軍を、率ゐて居たのが、桐野利秋である。

元來、此戦争は、西郷を、大將と仰いで居る奮闘であり、亦西郷の身上の事が、原因になつたには、違ひないが、併し、此戦争を、閉くに至つた経過は、桐野が、其半の責を、負ふて居るのである。従つて、桐野の人物に就ては、少しく、詳細に説明をして置きたい。

島津中興の勇將に、義弘といふ人があつた。之は、有名な關ヶ原の役に、石田三成の身方をして、孤軍奮闘、關東勢を懷ました人である。其の子に、忠恒といふのがあつて、後に、權中納言家久となつた。忠恒の家老に、平田太郎左衛門増宗といふ人があつた。

平田は、義弘の兄、義久の愛臣で、義弘より家を譲られた、といふ關係になつて居るから、何うしても、平田の勢力の有る順序になつて居るのである。其點に就ては、義弘も、忠恒も、等しく憂ひて、何かの機會に依つて、平田を逐ぎやう、といふ事を、始終心掛けて居た。

平田も、莫迦な男でないから、義弘親子に、睨まれて居る事は、悟つて居た。依つて、種々考へた末、義久の孫を以て、島津家の相續をさせて、忠恒を退けやう、といふ事を、竊に計つた。義弘父子も、何日か、此計畫のある事を知つたけれども、兄義久に對する、遠慮がある爲に、何分、手を下さず事が出来なかつた。

夫は何故か、といふに、第一には、永い間、重職に就て居た平田の事であるから、其身方が、非常に多い。平田一人を押へても、其身方が騒ぎ出すと、跡の治め方が、面倒になる。夫れに付いては、流石の義弘も、非常に、胸を痛めて居たのだ。

然るに、義弘の家臣に、押川強兵衛といふ人があつて、義弘に對しては、非常な忠臣である。義弘も亦、之を信ずる事が厚く、常に左右に置いて、何事も、相談するやうにして居た。頃日、主人義弘の顔色が例ならず、極めて、快活な人であるのに、動もすると、思案に耽つたり、人知れず、歎息をする、といふやうな事があるのを見て、忠義に凝つた押川は、或日、左右に人なきを見て、

「恐れながら、頃日の御氣色を、窺ひまするに、何か、物思ひに、お耽り遊ばすやうにも、心得ますが、何かお胸を、お痛めになる事件の御座りまするか」

義弘は、太息を吐いて、

「百萬の敵に圍まれても、毛筋一ツ動かさぬ義弘も、一家一身の事には、胸を痛める」

「ハッ、恐れ入つたる御一言、何事にござりすまるか、お明しを願ひたい。思慮淺く、分別も尠き者で御座りまするが、縁あつて、主従と相成りました以上、君の御爲なれば、惜しからぬ此の命を捧げても、御前の御奉公、相勤めたく、考へまする」

此健氣の一言を聽いて、義弘は、霎時、黙して居たが、今は包み兼ねて、
「實は、斯ういふ次第……」

と、平田の一條を物語つた。聽いて見れば押川も、眼に餘る事があつて、常に平田を、睨んで居たのであるから、原來、其事であるか、と、其日は、何氣なく、御前を退つて來た。此押川が、非常なる覺悟を以て、義弘の憂ひを除くといふ事になるのである。

一一

「ハッ、桐野殿が、見えました」

押川は、徐に回顧つて、

「桐野どんか」

「ハイ」

「可か、此室へ通せ」

高城郡種脇の郷といふ所に任んで居る、桐野九郎左衛門、關東の方でいふと、郷士といふやうなものであつて、家柄も相當で、却々の人物として、郷黨の間には、知れ渡つて居たのである。

其の九郎左衛門が、突然訪ねて來たのだ。押川とは、素より、親交の間柄で、互に隔意なく、種々の雑談に、時を移して居ると、桐野は、頻りに押川の容姿を見て居たが、

押川どん、貴下の顔色な、何ぎやしたもんか

押川も、愕として、

「俺どんな、顔色は、何ぎやなつて居るか」

「甚か悪い色ぢやが、心配事でも、有るのかな」

と押川は、種々に言葉を濁らして、話を他へ誘ふとするが、桐野は、眞情を單めて、頻りに訊ねるので、押川も、

今は、隠すも詮ない事と考へて、

「實は、斯様な譯である」

と、例の平田増宗一條に就て、義弘公の仰られた事から、自分の決心の次第を、物語ると、桐野は、膝を打つて、

「貴下なればこそ、夫だけの覺悟が、出来るのぢや。殿様も良か家來を持たれて、定めし、お喜びであらう。が併し

是しきの事に、貴下が、手を下さすまでの事は、無か思ふ。是は俺どんに、任せて置なはれ」

「俺どんに任せ、といふて、何ぎや爲る意志か」

「そりや、俺どんな考へがあるに由つて、まあ任せなはれ」

「何ぎや爲るのか、その理由な判らんきや、任す事も出来んよ」

「結局、平田が居らん事になりや、可か思ふが、どうぢや」

「そりや然うとも。平田が、居らん事になれや可か」

「夫ぢやから、俺に任せろ、といふのぢや」

「ふーむ」

暫時、考へて居た押川は、

「貴下に任せる。可かやうに、しなされ」

「随かに、俺どんな引受け申した」

其日の事は、夫で終つた。

話頭一轉、平田増宗は、或日の事、自分の領地になつて居る、入來の郷といふ所に來て、何しろ、自分の領地であるから、兩三日は、其處に停まる事になつた。今日は天氣もよく、氣晴らしに、獵をしようといふので、鐵砲を、家來に擔げさせ。入來の郷を出て、今や、種脇の郷へ來掛つた、刹那に、迥か先方の離れた藪蔭に、ドンと一發の銃聲、

呀ツと、聲を揚げると共に、平田は、其處へ墮れた。

「原來、狼藉者ツ」

と、隨從ふ家來四五人、バラ／＼ツと、其敷蔭を目蒐て、駈付て來たが、一人の大小を差した、武士らしき風體の者が、鐵砲を引提げて、彼方へ駈けて行く。迥かに、道が離れて居たので、遂に、押へる事が、能なかつた。引返して來て、主人の平田を、引起して介抱したが、急所の痛手に、早絆切れて、介抱の效は、無かつたのである。取敢ず、入來の郷へ、引返して來て、早々、藩廳へ届を出すやら、親戚知己へ、報知をするやら、その騒ぎは尋常でない。一方では、逃去つた例の武士の笠印に、見覚えがあり、正に彼は、樋脇の郷の、桐野九郎左衛門に相違がない、といふ事になつて、取敢へず、之を引立て來やう、といふ相談が纏まつて、十數名の者が、ワイ／＼言ふて、押掛けて來た。

二二

桐野の家では、妻が今、機織の臺に掛つて、荐りにチヨンバタ／＼と機を織つて居る。

所へ、ガヤ／＼と、門前に人が、騒がしく押寄せて來たので、機織る手を休めて、障子を開く、途端に、一人の武士が、ぬツと入つて來た。

「桐野どんな、お宅に居られるかな」

「ハイ、先程出まして、未だ、歸つて参りませぬが、何ぞ、御用で御座いますか」

「イヤ、最前歸りやはつた事は、確然と、見届けて居る。そりや貴女は、此處に居つて、知らなかつたかも知れんが招んで下はれ」

「イエ、眞實、未だ歸つて参らないのですから、お取次のしようが、御座いません」

「イヤ、歸つて居る、といふのに、和女そぎや剛情張るなら、已むを得ぬから、是から踏込んで押へるが、何うぢや」

「踏ん込め／＼」

といふ騒ぎに、桐野の妻は、益沈着て、

「貴下方が、男子の力を以つて、踏込みなさるなら、そりや御自由ぢやが、瘦せても枯れても、樋脇の郷の、桐野の家で御座いますから、若し、踏込んで見た曉に、九郎左衛門が、居らなしたら、其時は、何となさるか。其の返事を、確と承はりませう」

「ウム、そりや……」

「さ、其事を、御極めになつてから、踏込んだら好う御座いませう。強ちに、踏込むのが悪い、とは申さんに依つて家捜しなりと、爲さるが宜い。夫れだけ、極めて下さい」

如何にも、其舉動が、沈着いて居て、言語も劃然として居る。一同も、辟易して、名にし負ふ、樋脇の郷の郷士として知られた、桐野の事であるから、萬一、居らなかつた時には、取返しが付かぬ、といふので、一時、引揚げて仕舞つた。

後を見送つて、ニツコリ笑つた妻は、奥へ來て、座敷にある、長持の蓋に手を掛け、徐かに明けて見ると、中には

九郎左衛門が、霹靂雷の如く、グー、グーツと、甚い射て寝て居た。

入違ひに、押川が訪ねて來て、桐野の手を執つて、

「イヤ、貴下の這回の働きは、何とも、御禮の言ひ様もないが、是で、君公の御身に恙なく、島津のお家、萬々歳ぢや、未求く、此一事は、俺どんな忘れ申さぬ」

「其の御挨拶では、痛み入る。ホンの、御領分内に住んで居る、郷士の一分を、果したまでぢや」

押川は、膝を進めて、
「夫いに就て、貴下のやつたといふ事は、皆認めて居るやうぢやから、一時、此の噂の鎮まるまで、此處を、立去つて下らんか」

「サア、強ひて立去る、必要もなと思ふけど、俺どんな押へられて、貴下や、君公に障りがあつては、宜うないから、此處は一時、貴下の言ふ通り、立去る事にしよう」

「何處へ行く、といふ、目的があるか」

「山一つ越えて、肥後へ入れば、球磨郡に、遠縁の者があるから、夫れへ暫時、潜む事にしよう」

「夫いぢや、何うか、然うして貰ひたい」

押川が、包金を出した。桐野は、再三辭退するのを、強ひて之を持たせた。其夜の中に、九郎左衛門は、行方を、

暗まして仕舞つた。行先は押川との問答にあつた通り、肥後國球磨郡に、落着いたのである。其時に、中村與右衛門と姓名を改めた。然るに、平田の産れた爲に、島津家は安泰となつて、義弘親子も、押川より、始終の始末を聞いて居たものか、二年経て、義弘の迎ひが來た。桐野は、之れが爲めに、再び薩摩へ、歸る事になつたのである。

此時から、島津家の家臣に算へられて、無役で、永代二十石を與へられる、といふ事になつた。此の中村與右衛門から十代目が、即ち俊傑桐野利秋になるのである。

四

前回到述べた、中村與右衛門から、九代目の與右衛門が、鹿兒島の市外、實方といふ所に住んで居た。夫婦の間に四人の子供を擧げたが、長男は、與左衛門と言ふて、之は夭折をして死した。夫から十一年の間、子供がなくて、十一年目に、次男が生れた。之が半次郎といふて、後に、利秋となる男子だ。三男が、半左衛門といふて、山内家へ養

子に行つて、陸軍へ、出る事になつたが、之も十年の戦争で討死をした。四人目が女で、之は、伊藤才藏といふ人の妻になつた。此の伊藤といふのが、西郷隆盛を、島津齊彬に、推擧した人であるが、矢張り、十年の役に、死んで了つた。

次男 半次郎は、天保九年に、生れたのであるから、明治十年には、恰度、四十歳であつた。

實方といふ處は、鹿兒島から東北に當つて、一里ばかり離れた、吉野原の入口にあるので、詰まり、城下外れの場末である。此の方面を、後に總稱して、吉野村といふた。

何處の藩にも、有つた事だが、此の鹿兒島藩は、殊に甚かつた。武士に、上下の階級が在つて、詰まり、中村の家などは、極めて低い武士で、本格の藩士として、取扱はれて居なかつたのである。殊に、吉野村や、實方方面は、極貧乏な武士が、多く住んで居た。夫は詰まり、本格の武士でないから、従つて知行が少い。衣食にも窮する、といふ譯で、貧乏武士が、自然、其處へ一廓をなした、といふのも無理のない譯で、多くは、紙漉をしたり、或は甘藷や、雜穀の類を植付けて、生活の足にして居たものである。

されば、此の土地の武士を指して、城下に住んで居る上級の武士が、「吉野唐芋紙漉武士」といふて、侮蔑した言葉で、以つて、常に迎へたものである。夫が又、島津家改革の時に、家臣の刪俸を行つたから、桐野家も、平田一條に付いて、與へられた石を削れられて、僅かに、四石扶持といふ事になつた。之ぢや、多數の子女を有つて、一家の立行く譯がない。生活の度が、卑くなるから、内職が、賤しくもなるのだ。自然、一藩に、輕蔑も受るやうに、なつて來た。

父は、多く江戸詰で、其不在中は、長男の與左衛門が、萬事を、取仕切つて、やつて居たのである。半次郎の悪戯と云ふのが、又一通りでなく、近所の苦情は、毎も絶えた事がない位で、年は幼いが、其の悪戯の激しさは、多く大人を、對手にする悪戯で、其の取捌きには、兄の與左衛門も、屢々困る事があつた。

貧乏には、消光して居るが、與左衛門も、却々、心掛の良人入で、父の志意を、能く察して、衣食の上に、非常な節約は加へて居るが、武士一通りの備へだけは、して置かなければならぬ、といふので、火薬の如きも始終、貯蔵して居たものである。時々、半次郎が、其の火薬を掴み出しては、悪戯をする。小兒の火悪戯であるから、與左衛門も誠に危険事に思ふて、

「半次郎」

「ハイ」

「汝、大概な悪戯なら、俺も、此言は言はぬが、火悪戯だけは、可かんよ」

「ハイ」

「殊に、火薬などの悪戯は、子供らしうなうて、萬一の間違が出来ると可かん。決して、以來火薬を、持出す事はならぬぞ。欲しい時は、此の兄に言ふて、許しを受けてから、持つて行きなさい」

其の日は、夫れで済んだが、どうも、戒めが利かぬやうであるから、與左衛門も、火薬は一切、鎧櫃の中に收めて大きな錠前を卸して了つた。

其後、五六日経つと、遊びに出かけた半次郎が、大分時を移して、歸つて來ない。最早、夜も晩くなつたから、其儘、家族は、皆寝て了つた。木萱も眠る、といふ丑満の頃、兄の與左衛門が、眼を覺して、厠に行かうと思ふて、何の氣もなく、不圖、傍に寝て居る、半次郎を見ると驚いた。恰度、化物のやうな顔で、眉毛は、残らず焼けて、頭も毛も半ば焼けて了つて、顔から肩、手の邊などが、甚い火傷をして居る。爾來、火薬を持出したな、と思つて、密かに鎧櫃を極めて見ると、錠が、捻切つてある。中の火薬は、大半失なつて居た。

打懲して呉れやうと、一度は激した與左衛門も、胸を撫つて、其儘に寝て了つた。翌朝、夙く起きて、與左衛門は、食事の準備をする。他の者も、夫々に起きて、顔を洗ひ、食膳に向ふ事になつた。

貧乏こそして居るが、一家團樂の樂みは、亦別なものである。

與左衛門の傾向に、坐つて居るのが半次郎、其顔は、前回に言ふた通り、眉毛もなければ、頭の毛なども、半は無い。定めて、之だけの火傷であるから、痛みもするだらう、休へるにも、辛からう、と思ふが、本人の半次郎は、一向、澄ましたもので、平生の通りの態度で、食事をして居る。

其の容姿を、情々見て居た、兄の與左衛門が、心の中で、倍も偉い奴ぢや。何うして、恚ういふ強情な小兒が、生たものか、熟々、感心をして居る中に、皆食事も済んだ。

「半次郎」

「ハイ」

「那方の座敷にある、鎧櫃を持つて來い」

「ハイ」

平氣な顔をして、半次郎は、鎧櫃を運んだ。

「兄上、持つて參りました」

與左衛門が見れば、昨夜見た通り、錠は、捻切つてある。

「其蓋を、開けろ」

「ハイ」

半次郎は、徐に蓋を開けた。與左衛門は、

「其中に、何が入つて居るか、汝、知つて居るか」

鎧櫃の縁に、手を掛けて、中を覗き込んだ半次郎は、澄ました顔で、

「火薬のやうな物が、入つて居るやうでござす」

「何れほど、入つて居るか」

「少しばかり」

「少しといふ事はない。澤山、入つて居る筈ぢや」

「デモ、少ししてごわす」

酒蛙々々として、少しも怖れずに答へる。其の容姿を見て、彌、兄の與左衛門は、恐ろしい青年である、といふ感じも起て來た。

「前へ坐れ」

「ハイ」

「汝は、此中の火薬を、持出したに、違ひなからう」

半次郎は、黙つて居る。與左衛門は、稍言葉を勵まして、

「持出したンぢやらう」

「ハイ」

「ハイといふのは、持出した、といふ譯か」

「然うてごわす」

「然うてごわすぢやない。何故、然ういふ事をする。不都合な奴だ。汝の顔を見なさい、眉氣も、焦げて了へば、頭の毛も半ばない。何といふ汝は、向ふ見ずな事をするのぢや。第一、汝の身體といふものは、父母から授けられた、大切な身體ぢやないか。幼くしては、父母に孝を盡し、長じては、主君の爲め、主家の爲めに、忠勤を抽んで、之が武士の掟ぢや。聖人の言遺した言葉にも、身體髮膚、之を父母に享く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり、とあるぢやないか。何として、父母に申譯をするか、己れの遊びの爲めに、不具同様な姿になつて、不孝、此上もない

奴だぞ。汝は、不孝の子ぢや」
了得に、半次郎は、兩の手を膝に仕いて、頭を下げたきり、答がない。與左衛門は、財布の中から、錢二百文を取

出して、紙の上に乗せて、半次郎の前へ突出した。

「留守を預かつた兄として、餘りに不取締りて、江戸に詰て居られる、父上に對して、申譯がない。さ、此の錢を、汝に與へるから、汝は、之れを旅費にして、江戸まで行つた、父上に、親しくお目に掛つて、お詫をして歸つて來

い。父上より、お許しのお書付が出たら、夫れを持つて、歸つて來なさい。再家へ入れてやる、サア、直に行け」

「何とも今更、申譯もごわへん。自分の作つた、罪でごわすから、父上へのお詫は、兄上に、御苦勞は掛けん意で、ごわす。夫ぢや、之から直に、行つて參ります。他に何か、御用はありませぬか」

「エツ行く」

「ハイ」

與左衛門も、此の返詞には驚いた。只ツた二百文ばかりの端錢で、江戸まで、行けるものでもなし、縦令、旅費は充分に、あるにしてからが、此の十三や十四の小僧が、行くといふ事も出來まい。斯うして、困らしたらば、我慢の角も折れ、強情の心も直つて、詫をするだらうと、先を思ふて、與左衛門は、戒める意で、言ひ渡すと、案外にも、半次郎は、平然として、行つて來るといふ。今更、行くとも言はず、さればとて、行つて來い、と出したならば、此向ふ見ずが、又何事を仕出來すか、と、有繋は、骨肉の情として、與左衛門も、今更に、詰まらぬ事を言出した、と、後悔齋を噛めど、取返しが付かぬ。何と此の場の、納まりをしたものであらうか、と、苦しんで居る門口に、人の來た氣配があるから、ホツと息を吐た。

折好く、訪ねて来たのが、與左衛門等の爲には、外祖父に當る、別府四郎兵衛といふ人であつた。此人は、弓術の達人で、大藩の島津家に於て、其右に出る者が無い、といふ位に、弓術に於ては、名譽の人であつた。蜜に、弓術ばかりでなく、兵學の上にも精通して、腕力も、非常に強く、頗る評判の人物であつたが、喬木は、風に折られるの譬で、心狭き藩士の猜みから、讒言をされ、後には、兵道を弄びて、天狗を集めたる罪科といふ、奇麗な罪條で、徳之島へ、流罪の申し渡しを受けた程の特色ある人物である。此人の養子になつたのが、晋介であつて、桐野と晋介が、從弟同志といふ關係は、夫からであつた。

「ヤア、與左衛門どん」

「之は伯父様、能く、御入來ごわした」

「オ、半次郎……ヤア、何といふ、汝は、顔して居るのか」

「マア伯父様、聽いて下はれ」

「ウム、何したのだ、何ぎやした怪我か」

「イヤ、半次郎の悪戯には、實に困つて居るでござす。昨日、斯様々々の次第で、此燒傷をしたのでござす」

四郎兵衛は、莞爾笑つて、

「然うか、ヤア此小僧、却々氣の強か奴ぢやから、其位な事はあるぢやらう。マア叱言は大概にして、許してやつたら、どうぢや」

伯父様が、然ういふ事を仰せるから、半次郎が、我儘をいふて、更に兄の言ふ事も用ゐるのでござすよ」

「然う、理窟を言ふぢや可かぬ。兄の言ふ事を、用ゐん事は無い、貴方が、錢二百文を與へて、江戸へ行きなはれ、

といふたら、直行くといふたぢやごわへんか。其通り、又、從順な所もあるものぢやからな、アツハ、ハ、ハ、ハ、

半次郎は、意外の處に、味方が出て来たので、大に喜んだ。

「伯父様、俺が悪か思ふて、居るのでござすから、何卒、兄上に、お詫なして下はれ」

「ウム宜しく、與左衛門には、俺から、能く申譯をしてやる」

と言ひながら、與左衛門の方へ、向直つて、

「さて、與左衛門」

「ハイ」

「半次郎の身に就て、俺りや、少し相談があるが、其相談に、乗つて呉ぬか」

「そりや、何ういふ事てござすか」

「他ぢやないが、今日から此半次郎を、俺が、引受けたく思ふが、汝許さぬか」

「エツ、半次郎を引受ける、といふのは、そりや、何ぎや事てござすか」

「此小僧、仕込やうに依れば、慥かに物にならう、と思ふから、俺が之から引取つて、仕立て見よう、と思ふ。許しなざるか」

「そりや、父母の在さん時は、貴下が、大切なお方ぢや。其貴下からの、お話しとあれば、決して、異存はごわへん。

宜かやうに、して下はれ」

「ウム、早速の承諾で辱じけない。半次郎は、俺が所へ来るか、何うぢや」

半次郎は、雀躍するばかりに喜んで、

「何卒、然ういふ事に、願ひたうござす」

「良矣、ぢや引取らう。併し、俺な嚴格で、夫だけは、前以て斷つて置くぞ」

此相談の結果として、四郎兵衛の許へ引取られて、教育される事になつた。之が、半次郎の十三歳の秋の話してある。

然るに、誠に不幸な事には、父の與左衛門も亦、罪を得て、徳之島へ流され、引續いて、假の父とも思ふた四郎兵衛も、同じやうに、流罪の憂目を見る事になつた。夫が十七歳の春で、越えて十八歳の夏、兄の與左衛門は、病氣の爲に、夭折をした。

打續く不幸に、大體な者なれば、氣も屈し、心も挫けるのであるが、強情我慢に育つた半次郎は、却々、之しきの事に、畏縮をするやうな事はなく、必死に働いて、弟や、妹の事を初め、一家の處理を付けて居た、と云ふのは、實に感服すべき事である。

併し、蔭になると、多くの人は、吉野唐芋紙漉武士など、輕蔑んで居る。又は、往來などを歩く時分に、遠くの方から、目引袖引きして、那所に通る半次郎は、流罪人の子である、といふやうな事を噂される。その時の辛さは、又一通りではないが、口惜さを味と堪へて、獨自らの心を養ふて、他日の大成を、期して居たので有つた。

斯ういふ中で育つた、半次郎は、其日々々の事に、追はれる爲に、寺小屋入といふ事もならず、又武術の修行も、普通にする事が出来ない。併し、之から先、世の中に立つ武士としては、技倆だけは、磨いて置かなければならぬ、といふ考へは、堅く持つて居た。晝間、思ふさま、働いて居るから、夜になると疲れる。其疲れや、眠いのを堪へて、附近の山に入つて、竊に技倆を磨いた。其やりかたは、何ういふのか、といふと、蛤刀に削き上た、櫛の木劍を携へて、立樹を對手に、修行をしたのである。大きな木の幹から、枝が出て居る。其枝と、幹の股を望んで、木劍を振振り、氣合を入れ、鋭ツと打つ。ポキツと音がすると、多くは木劍を放つたり、或は、木劍が折れたりするが、立樹には、何の障りもない。夫が、鍛錬を積むと、恐ろしいもので、終には、鋭ツといつて、打下すと、ざくツと、木の股を、双物で削いだやうに、切る事が出来るやうになつた。

後年になつて、中村流の一手打、といへば、驍猛虎の如き浪士でさへ、皆、怖毛を顛はして、怖れたといふことである。

七

年齢も、漸々成つて来て、最早、二十歳といふ聲を聞いては、骨格も確かに、肉も固まり、何處へ出ても、一人前の武士の、通用をするやうになつて来た。殊に、強情で、忍耐が強いので、果は、此吉野一廓の武士のうちでは、中村流の忍耐といふ事を、言ふやうになつた。用事の爲めに、城下へ出る事があると、上級の武士が、先方から来る。普通の吉野武士なれば、道傍へ身體を避けて、其武士を、通らせるのだが、中村に於ては、決して、夫がなかつた。態と、往來の眞中に立塞がつて、彼を言へば、直に肩をいからせ、腕を扼して、喧嘩を吹き掛ける、といふやうな譯で、毎も、唐芋黨の爲めに、氣を吐いて、幾度かあつた喧嘩や、衝突にも、必ず、勝を制して、歸つて来るので、驍名は、彌高くなり、士格の爲めに、苦しめられる、輕輩の一團は、常に、此の中村を首領の如く、仰ぐやうになつて来た。或日、鹿兒島から西の方に當る、上之園といふ所へ、用があつてやつて来ると、迥か先方から、一人の武士が、やつて来た。近付くまに、中村が之を見ると、風采の堂々とした、筋骨の逞しい、一廉の武士である。喧嘩好きの桐野は、心密かに喜んで、往來の眞中に突立つて居ると、其武士も足を停めて、中村の容姿を、チツト見て居る。右の方の目が盲れて、獨眼であつた。

『小僧、退け』

『貴下、退きなはれ』

『イヤ、汝退け』

『退かぬ』

『汝、吉野唐芋の仲間ぢやないか』

『然うてごわす』

「からいもの分際として、上級の者に對して、無禮な奴だ」

「夫ぎや無禮なら、腕づくて來なはれ」

身體を斜にして、最早喧嘩腰だ。了得に、餘りの無暴に驚いて、獨眼の武士は、苦笑ひをして、中村の顔を見詰て居る。中村は、拳を握つて、殆んど、其武士に飛掛る、といふやうな、氣勢を示しながら、

「コレ、汝は馬鹿か豪傑か。馬鹿なら助けてやる、豪傑なら勘辨がならん、何方か返詞せい」

有鑿に氣を吞まれて、其の武士も、只、中村の顔を、見詰めるばかりであつた。中村は、稍言葉を鎮めて、

「貴下は、同じ上級の武士でも、少し、異ふ所があるやうに思ふから、俺どんな考へを、鳥渡話して置かうと思ふ。お聯き下はれ」

「ウム、何ういふ事か、言ふて見なはれ」

「俺どんな、無學で、天下の事な分らぬが、併し思ふに、今日の太平は、長く續かぬものと思へる。孰れ一度は、我が島津藩の力を以て、天下を治める、時節が来るものと、常に思ふて居るが、苟くも、志しあるものが、猥りに生命を捨つるは、惜むべき事ぢや。同じ島津家の、粟を食ふて居るものが、徒らに、上級の者であるとか、輕輩であるとかいふて、相争ふのは、甚だ面白くない事と考へるが、そりや貴下、何ぎや思ふか」

「ウム」

「往昔の人も、四海の中は皆兄弟なりといふて居るではないか。我々は、敢て無法に、貴下等に抵抗するものぢやないが、貴下等の組が、俺どん等を、辱かしめるから、俺どん等は、一合取つても、武士は武士であるに依つて、サア來いといふて、腕を突張る譯ぢやが、今日の天下が、他日亂れて、島津家が、其の事に關與はる、といふやうな場合には、一人と雖、不用な人間は無か思ふ。貴下が、普通の武士でな故に、俺どんと、今争ひが出來んが、俺し、貴下が、普通の武士であつたらば、俺どんと、此處で、斬り合をする。さうなれば、必ず一人は死するものぢや」

や。秘の争ひに死んで、夫がお家の辱め、天下の辱めになるか。此の事は、上級の武士から、懼んで下はらん事は、輕輩の我々には、憤みやうはなか思ふ。貴下、そいを、何ぎや思ひなはるか」

粗野朴訥な言葉を以て、諄々として、説いて来る。其の様子が、見るからに、未だ年齢の若い、一青年ではあるが、怖るべきは、此の青年の未來であると、彼の獨眼の武士も、非常に感じて言葉なく、暫時は、中村の顔を見て居たが、何思ひけん、臆て、穿いて居た下駄を脱いで、大地に兩の手を突いた。

「ヤア、こりや俺どんな悪か。貴下は、何誰てごわした」

中村も、恭しく大地に手を突いた。

「之は、御挨拶で痛み入る。俺どんな、中村半次郎と申すものでごわす」

「エツ：：汝が、與左衛門どんな一子、半次郎どんでごわすか」

「ハア」

「ヤア道理こそ、普通の者でなか思ふた。今後は、御互に、惡意に交際事にしよう」

餘りに、其の武士が、感慇な挨拶に、中村は、感に打たれて、

「シテ汝は、何誰人てごわすか」

「岩見半兵衛てごわすよ」

「オ、先生は、岩見どんでごわしたか」

思はず二人が、手を取つて莞爾笑つた。所謂、肝膽相照らす、といふのは、此の刹那にあるだらう、と思ふ。此の岩見は、藩士のうちでも、有名な豪傑であつたが、一青年の中村に、之まで言はれて、腹を立てずに屈したといふ、其處に、強い武士の、又美しい點はあるのだ。此の一事から、中村の名は、彌々、上級藩士の間にも、知れ渡るやうになつた。

近年になつて、頻りに、精神修養といふ事が、各方面で唱へられたが、全體、精神修養といふやうな事は、理窟で固める事の、出来ないものであつて、理窟で固めた、精神修養ほど、怪しいものはないのである。又人から教へ導かれて、始めて修養し得た精神ほど、危険なものはない。精神の修養といふ事は、どうしても、自ら修めなければならぬのであつて、人に教へられて、始めて修め得べきものではないのである。

然れば、昔の人は、皆其點に就て、夫れくんに、苦心をしたものだ。一例を挙げれば幕末の偉人、勝安房の如き、又山岡鐵舟の如き、藝も、躬行實踐の上から、得て來た精神修養で、他人の説に聞いて學んだ、精神修養と云ふが如き、薄ッペラなものではなかつた。従つて、勝が、彼の難局に處して、少しも騒がず、泰然として、四邊の状況に動かされなかつた、と云ふ事は、當に、精神修養の眞髓を、得て居たからである。又山岡が、武藝の上から、自分より、より以上の武者に對して、毎も勝味になつて居た、と云ふのも、矢張、此の修養上から、得て來た精神の働きてあつた、と思ふ。然れば、精神修養といふ事は、人生に於て、缺くべからざる事であるが、併しながら、理窟詰から來た、薄ッペラな精神修養は、平に、御免を被りたいものである。

桐野は、其點に就いて、優れた資格を持つて居つた。故に、極年の若い時分から、其の膽力の沈着して居たのも、尋常ではなかつた。

第一に、此世の中に、怪異と云ふものが無い、と云ふ信念を持つて居て、何事に向つても、其の意を以て、向つたのである。

第二に、既に、怪異を認めないのであるから、人間社會に、怖るべきものは、斷じてない、と云ふ確信を、持つて居た。既に、怖るべき者が無いから、如何なる事と雖、企て、及ばざる事は無い、と云ふ自信が強く、前に云ふた通り

り、桐野は、極めて貧苦であつた爲に、學問をする事は、出来なかつたが、夫れを、修養は、自らの工夫で、積んだのである。夫れが、桐野の一生を支配して、彼の立派な、人物を作り上げたのであつた。

鹿兒島の東に、稻荷川といふ川があつて、其水源になつてゐる山は、現今は、禿山になつて了つたが、昔は、樹木の極めて多い、所謂森林が、鬱蒼として、雲霧暗き山であつた。稻荷川の流れに添うて、川上深く、進んで行くと、山狭く水深き所に、神龍窟といふのがあつた。茲には、非常に年を経た、河童が棲んで居て、不思議の神力を以つて人間を、常に惱ました、と云ふ流説があつて、城下の人は、皆怖れて、稻荷川に遊んでも、「神龍窟には行くな、行けば必ず、歸る事が出来ない。」と云ふて、誰も、之を怖れてゐたのである。

或日、同じやうな年輩の者が集つて、浮世話に、時を移してゐたので、何時しか、神龍窟の話になつた。座中の一人は、頻りに、其の怪異を説いて、河童の化物の、怖るべき事を、盛んに吹聴して居ると、之を聞いて居た桐野は、「そぎや、莫迦な事が、あるか」

『イヤ、莫迦な事といふが、汝慥かに居るぞ』

『何が、居るのか』

『河童の化物ぢや』

『ナニ、河童の化物……そぎや物がつて堪まるか。河童の屁といふ事は、昔から言ふぢやなか、アツハツハ、』

『然として、笑ひ崩れた、桐野の態度が、如何にも小癩に障つた。』

『汝は、河童の化物はない、といふが、世間一般では、あるといふてるのぢや』

『世間の奴な、何を見ても、河童の化物に見え居るんぢやらう。それや、縱令、河童が居るとしても、此世の中に、人間ほど、強い者は無いのぢやから、河童の化物が、人間を惱ますなどいふ事は、俺どんな、信ずる事は出来んワ』

「ウム、汝なかく、強か事をいふな」
「俺どんな、別に強か事は言はぬが、河童よりは強か」
「こりや面白い。夫ぢや汝、神龍窟へ行けるぢやらうな」
「行けへいへば、何時でも行くさ」
「夫ぢや、行つて見ろ」
「可か」

中には、温順い人もあつて、頻りに、仲裁もしたけれど、騎虎の勢ひ、何でも行くと云ふのと、何でも行けと言ふのと、其折合が、付かないから、到頭行く事になつた。

「夫ぢや汝、何日行くか」

「さア、化物を見に行く事ぢやから、夜晩くなつた方が、可か思ふ」

「ナニ、夜晩く……」

「ウム、其方が、凄か事ぢやらう、と思ふからな」

飽までも、馬鹿にした一言に、一同は、

「夫ぢや汝、今宵行き居つて、何か其の跡に、印を遺して来い。其印が無か時は、汝偽はりを言ふた事として、我々の仲間て、處分をするが、何うか」

「可矣、そりや覺悟の上ぢや。夫ぢや明日の朝、汝等は、見に行き居つたら可か」

乃て其晩は、一同散じてしまふた。翌朝になつて、三々伍々隊を組んで、怖々ながら、稻荷川の上流、神龍窟へ行つて見ると驚いた。大きな立木の皮を、削り取つて、筆太に、

中村半次郎来る者也

九

と認めてあつた。之を見て、一同は、開いた口が、塞がらなかつた。

神龍窟の事が、評判になると、さア中村は、何處へ行つても、話の材料になつて、褒める者もあれば、貶す者もある、といふやうな譯で、當分は、中村の話して、持ち切りであつた。然るに、誰言ふとなく、

「神龍窟の事などは、昔から只、言ひ遺した丈の話して、中村でなくても、他に幾らも、夜晩く、行つたものもあるのぢやから、今、中村が行つて来たから、といふて、俄に中村を、剛膽の者として、尊敬には及ばぬ。併し、霧島山の事は別で、こりや如何に、中村の向ふ見ずといへども、行く事はなるまい」

と、いふやうな話しが、到る處で、頻りに出る。何日か之が、本人の耳に入つた。性來、負嫌ひで、忍耐の強い中村が、如何にも、癢に障つたので、十四五人の者が、集會した席上で、中村から、此の話しを仕出して、稻荷川といへど又霧島山と雖、行けぬといふ事はない、といふ事を、荐りに言ふので、遂に又、霧島山へ、中村が行く、といふ事になつた。これは土地も離れて居るし、相當な者を附けて、見張をさせる、といふ事になつた。其見張の役に、選ばれたのが、宮内孫八といふ人で、日を期して、中村と相携へて、鹿兒島を立つて、ドン／＼急いで、霧島山へやつて来た。

日本全國の噴火山も多いが、別て、此の霧島山は、恐ろしい山で、其頂上へ昇るものは、殆んど、命賭けて行かなければならぬやうに、言傳へられてあつたのだ。

中村は、然ういふ風説を知つて居るのか、夫ともに知らぬのか、一向平氣で、ドシ／＼昇つて行く、宮内も、跡から尾いて、八合目邊までやつて来ると、俄かに、雲が起き、山鳴りがして、何となく、物凄くなつて来る。四邊を見ようとするれば、雲に鎖されて、殆んど、一寸先も判らぬ、といふ位。大體なものなれば、怖れを懐いて、堪忍も出来

ないであらうが、中村は、少しも屈せずして、益々進んで行く、今更に、宮内は、逃出す譯にもならず、飛んでもない役を、引受けたと思つて、怖々ながら、跡から躡いて来た。
其内に、頂きへ着いた。大きな湖水があつて、其處まで、乗込んで来たものは、今までに、多くないのである。颯と吹き来る、一陣の山風と共に、今まで行手を遮つて居た雲や、霧は、跡形もなく、晴々とした天氣になつた。不圖湖水の向方河岸を見ると、白い大きなものが、ムクムク動いて居る。何う見ても、一個の怪物であるから、イヤ驚いたのは宮内だ。

『オイ中村、俺は何うも、腹が痛うてならぬから、先に、御免被るぞ』

『ウム、夫や汝の宜かやうにしる。併し、汝が歸り居つては、俺、どんな、之から先の事を、見極めるものが無か』

『ヤア、其様事は、まア宜い。此處まで来れば、夫で充分ぢやから、俺が、慥かに、他日の證人になる』

其内に、宮内は、元來し道へ、引返した。跡に、中村只一人、宮内の行く姿を見送つて、

『アハ、、、宮内の奴、怖くなつたか、逃居つた』

彼方河岸に見えた、白い怪物は、不思議にも、段々と、中村の方へ向つて、進んで来る様子であるから、偕こそ怪物、待つまでの事はない。此方から進んで、引捕へてやらうと、剛毅不撓の中村は、疾風の如く、駆けて行く。其間が、十間ばかりになると、中村は、足を停めて、

『こりや、何ぢや汝は』

大喝すると、怪物は、大地へピタリと坐つた。

『貴下は、何ぢや』

『ヤツ、汝は、人間ぢやな』

『俺、どんな、正に人間でござい』

『アツハ、、、世の中の怪物は、皆斯様ものぢや』

段々、話して見ると、夫は、加治木郷といふ所の行者であつて、此山へ、修行する爲めに、上つて居たが、最早、此日、修行の日が絶れたから、之から下山しよう、とする所であつた、といふ事が分つた。乃で中村は、此行者と打連れて、無事に下山すると、麓の茶屋に待受けて居た、宮内は、之を見て、二度吃驚。

『ヤア、中村どん、無事か』

『ウム』

『怪物は、何うしましたな』

『其怪物は、此處に一緒に居る。世の中に、怪物といふ者は、皆、温順か者ぢやよ』

『ふふーむ』

熟く見れば、怪物でも何でもない、矢張普通の人間であつた。宮内は、心密かに、中村は普通の青年でない、といふ事を、情々感心をした。

一〇

其頃の鹿兒島で、頻りに流行たのが、ヒエモントリといふ事であつた。之は字に書くと、冷物取であつて、土地では之を誑つて、ヒエモントリと、唱へて居た。

何ういふ事か、といふに、刑場に曝された、罪人の死骸を、試験りをする事である。死罪になつたものがある、と聞くと、各郷中の、腕自慢な奴が集まつて来て、腕力競争で、奪ひ取つて、然うして、各々、腕試しをするのであつた。

藩士の間が、前にも言ふた通り、幾組にも、階級が別れてゐて、更に之が、東と西の二ツに、大別をされてゐた。

下方は、詰まり上級の武士が多く、従つて、其範圍も廣く、人數も多い。けれども、上方と稱する、東の方は、城下はづれの、所謂場末に住んで居る、輕格の士が、多かつた爲めに、常に東の組は、西の組の方から、輕蔑されて、いつも恥辱を與へられて、引込むやうな事になる。試斬りに就いても多くは西組の方へ、持つて行かれる、といふ様な傾きがあつた。西組の者が、常に喧嘩でもして、人を辱かす時分には、

「汝は、上武士の様なもンぢや」

と、いふた位で、つまり、武士の中でも、穢多扱ひをされたのであつた。之に就て、東組の憤慨は、一通りでないけれども、人間の階級が、著しく立てられてゐた、時代の事として、其辱かしめをさへ、忍ばなければならなかつたのである。

併し、もし、腕力が勝れてゐて、相手を打倒して、死骸を取つて來る事は、自由になつてゐたので、自然、夫も及ばなかつたから、益々輕蔑される、といふ様な、場合になつてゐたのだ。

中村は、常に、此事に就て憤慨して居た。いつも冷物取の事に就て、西組の爲めに、勝手な態度をされる、といふことが、口惜くつてならぬ。年も若く、血氣も盛んで、殊には、腕自慢の若い連中が、三人集まれば、必ず此の話しをしては、無念の齒噛みをして居た。

「オイ残念ぢやな、今日は亦、餓斬られる奴がある、と云ふが、東組な、何時まで経つても、冷物取は、出來んのかな」

中村が、之を聞き答めて、

「東組な、冷物取の出來ん、といふ事な、極つたのでござすかな」

「莫迦云へ、そぎや事が、極るものか。只、取れぬものは、仕方無か」

「取つて來なはつたら、何うか」

「それや、取れぬのぢやよ。力が及ばぬから、取れぬのぢや」

「及ばぬ、と云ふ事は無か。西組も人間なら、東組も人間でござす、そいが取れぬ事は、な、か思ふ」

「口では、然ふ言けけれど、實際は、取れぬのぢやから、しようがな」

「そりや、貴下等が、卑屈だから、然う云ふ事になるんぢや」

「卑屈とは、何か」

「卑屈ぢやから、卑屈といふのぢや。取つて、取れぬ事は無か」

「夫ぢや、汝、取つてこい」

「可矣、サア俺どん取つて來やう、待つて居れ、最早始まるかな」

「最早、始まつて居るぢやろ」

「可矣」

自ら進んで、此の横紙破りの事を、しようといふのだ。中村も、行き掛り上、何うしても、やらなければならぬ破目に陥つた。

如何に、斬られた者と雖も、藩廳が、公然に許して、試し斬りをさせる譯はない。只、若い武士の膽力を練らせる爲め、亦二ツには、腕前を上達させる爲めに、黙認して居たのであつた。然れば、此冷物取は、多く夜中に行はれたので、白晝には、決して行はれなかつたものだ。

中村は、夜に入るのを待受けて、例の刑場へ、乘込んで來ると、もう、四五人の若武士が集まつて、ガヤ／＼言ふて居る。之を見ると、中村はズツと進んで來た。二三人の若武士を、左右に突退けて、今や、其所に横たはつて居る死骸を見るや、一足踏込んで、抜き討にサツと斬る。餘りの不意に、一同が驚ろいて見ると、東組の中村とは、夜目にも、夫と知れた。

「汝ツ」

と、一人が組付いて来るのを、向ふへ押倒す。續いて三四人、均しく掛つて来るのを、右に投げ、左りに突退けて、奮闘はしたが、終に衆寡敵せず、折重なつて押へ付けられ、刀は奪はれて、踏むやら蹴るやら、叩くやらされた。けれども、中村は、少しも屈せず、打たれれば打たれるほど、押へられれば押へられるほど、勿返つて奮闘する。如何にも、其の元氣の旺盛にして、氣力の盛んなものには、打つて居る方で、遂に感服して、果は、振上げた拳の力もゆるんで、倒れて居る中村を、扶け起すやうな事になつた。東組の方にも、斯ういふ立派を奴が居るか、といふので、始めて、評判に違はざる人間、といふ事を認められ、此時から、西組の方の冷物取の、仲間入をさせられる事になつた。之から中村は、上級の武士の間に、交際の端が開けたのである。彼是する中に、段々年月が経つ。薩摩第一の智者と言はれた、小松帯刀が、中村の爲人を知つて、非常に力を入れ久光公に推挙して、御庭方に引上げる事にした。吉野唐芋紙漉武士と、蔑まれて居た、中村としては、無上な榮達である。其の當時として、殆んど例のない事であつた。其内に、文久二年の暮になつて、島津久光が、藩主茂久に代つて、京都へ上る事になつて、中村は改めて、其の供廻りの中に、加へられた。其の際に、西郷吉之助が、流罪から許されて来て、久光のお供をする事になつたのが、西郷と中村とが、相識る事を得たはじめてである。

一一

久光の上洛は、天下の耳目を聳動した。幕末の歴史として、文久年間が、一番複雑な、出来事が多かつたので、従つて、久光の上洛といふ事は、諸侯が皆、注意して居たのである。當時の京都は、殆んど、長州藩に依つて、左右されて居た。其状況に就ては、已に詳説してあるから、今は茲に、

説く事を仕ないが、兎に角、久光が上洛すると同時に、有名な伏見の寺田屋事件といふのが起つて、之が爲に、島津家の勇士が、枕を並べて、五人も六人も死んだ、といふやうな活劇が、演ぜられた。西郷は、上洛の途中に於て、久光公の御意に背いた、といふ爲めに、罪を得て、三度流罪になつて、此時は既に、居なかつたのである。寺田屋の事件に、引續いて起つたのが、勅使の關東へ下向する、といふ一事で、此勅使下向のあつた爲めに、徳川は遂に、攘夷のお受けをいたしたのである。安政の條約に依つて、外國貿易を許す、といふ事に定つたものを、攘夷の御請をする、といふ事は、甚だ矛盾した事ではあるが、併し、朝廷の御汰沙ではあるし、旁、時代の氣勢に押されて已むなく、幕府に於ても、攘夷のお受けを仕たのである。而已ならず、將軍家茂は、夫が爲めに上洛する、といふ事のお受けまでも、する事になつたのだ。其の件に就ては、島津は勿論、毛利も、共に全力を注いで、事を茲に運んだのであつた。

久光が、朝廷の御感に入つて、

『汝は、往古の兒島高德に、能く似たる、忠節の士である』

といふお言葉を賜はつて、三郎の名を、頂いたのは此時である。

久光が、斯くの如く、朝廷へ、巧に取入つた、といふ事に就ては、毛利は、甚だ平かならぬものがあつた。何故ならば、其前から、毛利は、京都へ入込んで、荐りに、朝廷に於ける勢力を、纏める事に苦心して、夫が爲に、京都に於ける、毛利の勢力は、偉大なものであつた。所へ、後走に久光が、乗込んで来て、之までの働きを仕た。其の關係から、薩藩が、多少の活躍を爲すべき、地歩を得た、といふ事は、自然、薩藩との軋轢は、當然の結果であつた。に不快の念を懷いた、といふのは、無理のない事である。自然、薩藩との軋轢は、當然の結果であつた。併しながら、地勢の關係から言ふても、今までの状況から見ても、薩藩が、長州藩を凌ぐ、といふのは至難しい。殊に、毛利は、大殿の敬親と、世嗣定廣とが、代る／＼、江戸と京都に、詰て居たから、事を終つて、直に薩藩

へ歸る久光とは、自ら其の勢力の、強弱に於ても、異ふ所があつた。
 夫に、桂小五郎が、政務座役といふ役になつて、京都の受持であつたから、桂の働きは、又一段と美事なもので、殆んど、朝廷の内外の勢力といふものは、毛利藩が、握つて了つたのである。
 薩藩の側から見ると、之が甚だ不快であつて、遂に、毛利を、仇敵の如く見る、といふやうになつたのは、自然の勢ひで、どうも、已む事を得なかつた。併しながら、其毛利と代つて、京都の權勢を握る、といふ事は、薩藩の獨力としては、難かしかつたのである。依つて、共に毛利に對抗すべき、伴侶を覓めた。意外にも、純然たる佐幕黨の會津藩が、是に應じて、茲で、會薩聯合が、成立つたのである。
 勤王を標榜して居る、薩藩と、佐幕を主義として居る、會津藩と、化合の出来るのは、道理の上から見れば、萬々ないのだが、當時の事情は、遂に此の二藩をして、聯合をなさしめた。其の結果として、文久三年八月十八日の政變となつて、毛利大膳太夫は、禁裡守護職を罷免され、三條中納言實美以下七卿は、官位を剝奪される、といふやうな騒動があつた。

雖然、毛利が、此の處置に甘んずる、といふ理由はない。超えて元治元年の七月になつて、國老國司信濃、益田右衛門督、福原越後の三人が、久坂玄瑞以下四百餘名の藩士を率ゐて、哀訴歎願を口實として、京都へ乗込んで來た。爲めに、諸藩の兵と衝突して、遂に之が、有名な九門の戦ひとなつた。毛利は散々に、敗北を遂げ、再び京都に於て浮かぶ瀬のない、といふまでに、一大痛棒を、與へられたのであつた。
 此間に於て、中村半次郎も、多少の活動は仕たが、併し、時代の大勢を動かす、といふやうな事はなく、只總に、鍛へ上げた技倆と、膽力を以て、諸藩士の間、に、多少の名を知られた、といふ位に過ぎなかつた。

京都に於ては、斯くの如く、衝突や紛擾が、絶え間なく起きた。夫が又、諸藩に響いて、大小の違ひこそあれ、孰の藩にも、多少の活劇悲劇は、演ぜられたのである。

關東に於ては、水戸が、最も甚だしかつた。結局は、例の書生、天狗の二派に分れて、非常な衝突が、行はれた。全體、水戸は、黃門光圀以來、勤王の氣が傳へられて居る。大日本史の編纂といふ、大事業の爲めに、集めた學者が皇室に關する、諸般の事情を取調べた。夫が代々、傳へられて、水戸藩の仕事になつて居た。是れが爲めに受けた、勤王の精神は、少くなかつたのである。

嘉永安政の頃、外夷が渡來して、夫より開國、攘夷、勤王、佐幕の議が、愈々一般に稱へられるやうになつて、水戸に於ても、亦其の流派が生れた。

徳川と水戸家の、關係からいへば、無論、佐幕開國でなければならなかつたのだが、實際は、勤王攘夷であつたのだから面白い。藩主齊昭(烈公)といふ人が、攘夷開國の議論は、姑く措いて、兎に角、勤王の精神が、頗る深かつた。夫は、徳川を憎んで、皇室に盡す、といふ意味ではなく、徳川に對しての敬意は、無論あるが、併し、大日本史の編纂の上から、自然に受けて來た、黨陶が、皇室に勤める、といふ心になつて、屢々、朝廷へ、貢もすれば、下賜品等もあつて、皇室と、水戸家の間には、一種の關係が、暗々の裡に、結ばれて居たのである。武田耕雲齋が、其使者を勤めて、伊賀守に任官された、といふ事も、其の一例であつて、勤王有志の間、に於て、耕雲齋の信用は、中々深かつたものであつた。

然るに、齊昭亡き後は、自然、佐幕の勢力も強く、従つて、耕雲齋の一派との軋轢も、甚だしくなつて來た。其の押しつ押しされつ、仕て居る間に、遂に、耕雲齋の一派は、水戸家から、逐はれるやうな事になつて、茲に書生、天狗の二派の衝突は、起きたのである。夫には又、諸方から、亂を好む浪士などが、追々押掛けて來て、耕雲齋に味方をする、といふ傾きがある。旁、遂に、大勢の藩士を率ゐて、脱藩する事になつた。

徳川も、第一の親戚たる水戸家から、然ういふ者が出たのを、許して置いては、將軍の權威にも關する、といふ所から、殆んど逆賊の扱ひを以て、耕雲齋を、逐ふたのであつた。

耕雲齋は、京都へ乗込み、朝廷の御爲に盡さう、といふので、中仙道に道を取つて、非常な苦辛を忍び、諸藩の妨害を拂ひ退けて、遂に信州に入つて、例の和田峠を、越える迄になつた。

其事が、夙くも、京都へ知れて、薩藩の間に於ても、中々難かしい議論があり、今のやうに、通信機關が備はつて居ないから、果して是が、勤王の爲めに來るのであるか、他に、一種の野心を有つて、來るのであるか、それが、中判らない。議論區々の時に、中村は、小松帶刀を訪ふて、

「是非、耕雲齋に面談を仕て、其の心事を確かめ、同人の意見に依つては、薩藩が導いて、京都へ入れても、宜からう、と思ふ」

といふ意見を述べた。小松も、夫には同意したので、幸ひ中村は、水戸浪士との關係もあつた爲めに、某一人を案内者として、和田峠を望んで出發した。中津川といふ處まで來て、耕雲齋の先手の者に面會して、來意を告げたので、本陣の耕雲齋に、之を取次ぐ事になつた。然るに、九門の戦ひの一條で、毛利を脅した、といふ事が、甚く此の一派の、感情を悪くして居たものか、耕雲齋は、了得に會はうと云つたが、他の者が、拒んで、遂に、中村に面會する、といふ事をさせなかつた。夫が爲めに、中村は、空しく中津川を立つて、京都へ歸らうとした。歸途、木曾川邊に、通り掛つた時に、二度までも狙撃されて、纔に助かつた、といふやうな、危険こともあつたのである。

中村の目的は、齟齬したが、併し、此の事に依つて、中村の大いに用ゆべきものである、といふ事も、小松の脳裡に、深く印象つたのである。

一一一

年、併、維新前の中村は、未だ人にも、多く知られず、従つて、その位地も、極く輕かつたので、大局に關係の有る、謀議にも參與せず、只だ一個の薩藩士として、有志や浪人の間で、多少、知られて居たに、過ぎない。殊に、極端なる討幕論者だ、といふので、その派のものには、重くも見られたが、佐幕派のものからは、悪魔の如く、憎まれて居たのである。

山内容堂が、土州藩の隠居でこそあれ、三百諸侯の間に知られた、立派な人物で、而かも、徳川の爲めには、何時も、能く庇護の任に當つて、倒幕派に對しての反抗は、實に、小面の憎いほどであつた。されば、勤王派の諸侯が、容堂を嫌ふことは、格別なもので、中村も亦た、其一人であつた。

一日のこと、その容堂が、薩邸へ來るといふので、饗應の準備が、物々しいほどである。之れを視て、藩士のうちには、頗る不平のものが多く、就中、半次郎は、腕を扼して、憤慨して居たのだ。

「可矣ツ、御馳走なら、己どんが仕てやる」

といつて、刀の柄を叩いては、氣を吐いて居た。人を斬ることは、瓜か茄子でも斬るやうに、思ひ立つたら、必ず斬つて了つたものだ。その性質を、能く知つて居るので、弟の半左衛門が心配して、夜ひそかに、小松帶刀を訪ねた。小松は、重役でもあり、當日の接待役であるから、その人に頼んで、兄を抑へて貰はう、といふのである。

「夜中に、罷出でまして、御迷惑で御座りませう」

「イヤ、用事は皆な片付いて、既う、明日を待つばかりぢや」

「些と、御願ひの御座りまして……」

「ふふーむ、何ういふことか」

「兄、半次郎儀につきまして……」

「うむ」

「實は、土州御隠居様に對しまして、容易ならぬ覺悟を、有ち居りますやう、見受けまするに由つて、何とかして、當日の御處置を願ひ度く、ひそかに、伺ひましたる次第で御座りまする」

小松は眉をよせて、

「何うも、中村の悪戯には困つたな。直ぐに抜く、斬る、のぢやからな」

「それ故、私も心痛の餘り……」

「承知いたしました。何とか、然る可く、手をつけて置かう」

「何分ともに、願ひ上げまする」

半左衛門は、歸つた。小松は、暫らく考へて居たが、獨り首肯いた。

「これ、誰れか居るか」

「ハツ、御召で御座りましたか」

「中村半次郎を、呼んで參れ」

「ハツ」

家來は直ぐに、中村を迎ひに行つた。中村は、今ま歸つて來たばかりで、これから寢やう、といふ所であつたが小松から、直ぐに來い、とのことであるから、取敢へず、迎ひの人と共に、遣つて來た。

「やア、何ぎや御用か」

無遠慮に、はいつて來た半次郎は、斯う言ひながら席についた。

「藩命を傳へる」

この一言には、流石の中村も、手をついて、頭を下げた。小松は嚴かに、

「明日は、外出を差止める。左様、心得て可からう」

「負けぬ氣の半次郎は、
『そや、何ぎや理由の御座つて』

「その仔細、いふに及ばぬ。藩命なれば、只だそれに従つて居れば、可いのぢや」

不平ではあるが、止むを得ない。中村は、苦い顔して、黙つて居る。

さらに小松は、中村を、別室に連れて行つて、酒肴を命じた上に、大層な待遇である。何が何だか、少しも解らな
いが、中村は、無暗に飲んで、その晩は、小松の邸へ泊つて了つた。

一四

翌日は、到頭、外出を差止められて、番人が付いて居るから、怎する事も、出来なかつた。夕方になると、小松
が、歸つて來て、

「噯、窮屈ぢやつたらう。さあ、最早能いから、隨意に仕なさい」

中村は、不審の眉を蹙めて、

「全體何ぎや事情でござす」

「そりや、貴方が、知つて居る譯ぢや」

「ハハア」

「今日は、容堂侯が、御入來になつたのぢや。何ういふ間違ひが、出来るか判らぬからな」

「ハハア、其事でござしたか」

「ウム」

之には、流石の中村も、恐縮して、何の言葉も無かつた。小松は、笑ひながら、

「其意氣は、賞すべきぢやが、少しは、前後を考へて呉れんと困る。我藩邸へ來られたる、容堂公に、藩臣が、無禮を加へた、といふやうな事件があつたら、夫こそ、我藩の責任になるのぢや。夫が爲め、土州藩と、何ういふ争ひが、起きないとも言へない。無謀な事は、大概にして呉れんと、困るよ」

中村は、頭を押へて、
「いや、何うも恐れ入つた。逆も、貴方にや敵はぬ」

其事は、遂に夫で止んで了つたが、後になつて、此事が洩れると、中村の評判は、益々高くなるばかりであつた。此時分から、漸う西郷に、知られて來たのである。西郷と、往復をする様になつたのは、其前からであるが、中村の用ふるに足るべきものである、といふ事を、眞實認められたのは、此の時分であつた。

然れば、慶應四年正月三日、伏見鳥羽に於て、幕軍と薩長聯合の兵と、戦端を開いた當時、中村が、一方面を受持つ、部將となつたのも、全く、西郷の信用が、篤かつた爲めである。

大勢は、急轉直下して、征討總督軍が、關東へ向ふ、といふ事になつた。其當時、村田新八、篠原多一郎、中村半次郎、之が西郷配下の三人男として、諸藩の間に、響き渡つたのであるが、殊に、中村の驍勇無双なる事は、何人も、認めて居た。上野彰義隊を討伐する時分には、三橋口の方面を受け持つて、實に壯烈なる戦鬪を、仕たものである。其の戦ひが済んで、奥羽征伐の大軍が、繰出すまでの間に、斯ういふ物語りがある。

夫は他でもないが、神田の三河町に、中村始め部下の者が、屯集して居た。或日、河野四郎左衛門、といふ人と共に、近所の湯屋へやつて來て、入浴を終つて、中村が先に、戸外へ出た。赤い毛布を、二ツに折つて、手拭を通して、頸の所でギユツと結び、雨合羽の代りにして、短い刀を差して居た。二三歩出ると、バラ／＼と、左右から進んで來たのが、三人の武士。中村も、ハツと思つたから、一足後へ退て身構へをした。
「お手前は、薩藩士中村と、言はしやるか」

「然うでし、わす」
「中村の所對が、終るか終らざるに、

「鋭ツ」

と掛けた、氣合と共に、眞二つと斬り込んで來た。之は、幕臣の中でも有名の鈴木半人である。咄嗟中村は、眞二つと思ひの外、飛鳥の如く飛退いて、抜き討に、斬り付けた一刀は過まらず、半人の右腕を斬り落した。他の二人が、同じく斬り込んで來るのを、電光石火、眼にも止まらぬ早技で、遂に、一人を殛し、一人に傷を付けた。負傷したものは、逸足出して逃て了つた。此時に、中村は、指を一本、斬り落されて、徐に回顧ると、河野四郎左衛門が、
「斬られたか」

「ウム、指な一本落された。惜か事を仕た、長い刀を持つて居たら、一人も逃さなかつたが……」

といふたが、河野も、私かに感心をしたのは、手傳はうと思つてる中に、二人を斬り倒した、其の早技は、實に天狗魔神の性を享けて居るのではないか、と思つた位である。之が神田で、中村が幕臣を斬つた、といふ、有名な話である。

一五

中村は、奮強いばかりではなく、其の半面には、人情の深い、涙脆い人であつた、といふ事も、聞いて居る。伏見鳥羽の戦鬪から、上野の戦争が終つて、天下は夫で、泰平に成るべき筈であるのに、猶、佐幕黨の人々は、飽迄も反抗して、今一度、徳川の治政に、盛返さうといふ事に就て、苦心して居た。殊に、東北の諸侯は、多く其方の側であつた。

之は會津中將が、極端な佐幕主義であつたばかりでなく、薩長二藩の、專斷横暴を憎むの餘り、夫に反抗する、と

いふ意味から、何處までも、戰鬪を繼續けたのであつた。
會津が、音頭取になつて、東北の諸藩が、服従しないであつては、逆も、天下統一の效は、擧がらないのであるから、於是、奥羽征討といふ議が起つて、板垣退助は、征討軍の參軍として、會津に、向ふ事になつた。
併しながら、如何に東北の諸侯が、躍起となつて反抗しても、王師の向ふ所、恰も風に草の靡くが如く、殊には、板垣が、戰爭巧者と來て居るから、向ふ所の諸道は、總て連戰連勝の勢ひを以て、進んで來て、結局、會津は、孤立の姿に、成つた。

板垣の軍は、已に進んで、會津城を、遠卷に巻いて、攻め立てた。雖然、抑も黒川城の昔から、天下の名城の一つに、數へられて居る、而已ならず、會津侯の決心、金鐵の如くにして、藩士の覺悟も、亦實に立派であつたから、攻むれば攻むる程、堅くなつて、會津の孤城を守ること、殆んど三旬の永きに亘り、了得の板垣も、此時は、攻めあくんだのであつた。

尤も、詩や歌にまで、殘つて居る白虎隊は、十六歳を頭に紅顔の美少年が、健氣にも、君公と生死を俱にする、といふ覺悟から、壯烈なる勵きもし、力盡きて、遂に飯盛山に、自刃して相果てたなどは、悲惨な事であるが、併し、幕末史の一頁を飾るに足るの、壯烈なる出來事であつた。

少年ですら、斯の如くであるから、況して一人前の藩士としての決心は、實に強硬ものであつた。従つて、婦人にも、實に凄いほど、豪いものがあつて、某婦人の如きは、其良人が戰死した、といふ事を聞くと、老母と愛子を、刺し殺して、

知るや人守るに絶えて家も身も

やくやほのほの赤きこゝろを
といふ歌を遊して、自殺をした、といふやうな事もある。又某婦人の如きは、彌、若松城に、降伏の旗が、掲げられ

たのを見ると、指を切り、其の血汐を以て、城内の壁に、

君主城上建降旗
妾在深宮何得知

といふ二句を題して、自殺した。

又某婦人は、髪を剃して、此の籠城の爲めに、死んだ者の回向に、一生を送る、といふ覺悟をしたものもあり、

明日よりはいづくの人を眺むらん

なれし大城に残る月影

といふ歌を遺して、飄然として去つた、といふやうなものもあつた。兎に角、若松城の戰鬪は、悲惨な事もあつたが、亦壯烈な事もあつて、大義名分の上から、逆賊といふ名前を受けたから、褒める譯にもならないが、併し、情の上から言へば、實に感服すべき、立派な覺悟を有つて居た者が、多くあつた。夫が爲に、彼の孤城を、一月にも亘つて、保つ事が能たのであらう。

一六

大義名分の上から言へば、會津藩の行動は、甚だ宜しくない。即ち、朝敵の名は道がれないのである。併しながら、情誼の上から言へば、會津藩が、徳川の爲めに、最後の奮闘を、那れまでに續けた、といふ事は、大いに斟酌してやらねばなるまい、と思ふ。

徳川には、三家三卿があり、其の他にも、親藩が數多かつたにも拘はらず、孰れも、大勢が既に、徳川を殲す事に傾くと見るや、或は、首鼠兩端を持して、曖昧な行動を取つたり、或は、公然、徳川に背いたり、實に醜い舉動をしたものである。

其中に於て、獨り會津藩が、朝敵の汚名を甘んじて、那れまでに反抗した、といふ事は、聊か、武士の面目を、發揮したものである。と見てやるのが、至當だらう。猶、其の心事に就て言へば、敢て朝廷に背くといふやうな、不敬の考へは、無かつたのである。徳川が、これ程の窮境に陥つたのは、薩長二藩の爲で、決して、朝廷の御本意でないのである、といふ事に重きを置いて、薩長二藩の壓力に、抵抗する意であつたのだから、必ずしも、之を、純粹の朝敵として、見る事は、公平の事とは言へない。然れば、朝廷に於かせられても、其罪を宥恕せられて、後に、華族の列に加へられて居る。これは、正に王者の仁なるものであつて、難有い限りである。

備、會津城が、愈、守りを失つて、所謂糧盡き、弓折れて、茲に降伏、といふ事が決したのは、實に明治元年九月十九日の事であつた。其日の正午頃に、米澤藩の先手に、手代木直右衛門、秋月悌次郎、桃澤彦次郎の三人が、會津藩の代表として、訪ねて来た。

於是、齋藤主計が、陣中に引いて、三人に對面をした。然るに其の三人が、降伏の使者であつて、其の旨を、齋藤へ語つたから、直に齋藤は、三名を伴ふて、板垣參軍の本營へ、引いて来た。此時、板垣に代つて、高屋左兵衛といふ人が、面會する事になつた。此高屋は、後に少將になつた人である。

齋藤の通じた如く、如何にも、降伏の使者であるから、一應の應接をした後に、之を、板垣に取次だ。於是、板垣が、面會する事になつたのである。三人、代るく、姓名を名乗つた後に、先づ、手代木が進んで、

「藩主、容保に代りまして、申上げるので御座ります。徳川宗家へ對し、一片の情誼、已むなく今日まで、戰爭を繼續したるが、已に力も盡きましたし、亦朝廷へ對し奉つて、此上の抵抗は、畏れ多い事と考へまするに依つて、茲に降伏を致します。然るべく、御處置を願ひたい。且、藩主に對しましては、何卒、寛大の御處置を、願ひ上げまする。」

「貴藩が、今日まで奮闘せられて、宗家へ盡された點は、如何にも、感服の至りである。併しながら、私情を以て、朝命に反抗した、といふ事は、甚だ罪の深い事である。が、併し、今日に及んで、降伏を申込まれる、といふ事は、即ち、過まを改むるに憚るなき致力で、將に、左様なければならぬのである。夫に就て、お尋ねいたして置きたいのは、只今のお言葉の中に、藩主容保に對して、寛大の處置を取つて貰ひたい、とあるが、もし、寛大の處置を、取る事がならぬと、なつたら、何と致される、意であるか。」

此の急所を指した一言には、了得の手代木も、言葉窮して、何と答への致方もなかつた。此時、秋月は、膝を進めて、

「お言葉で御座りますが、我々の申入れました事は、藩主の、誠意を捧げての事で御座りました、寛大の御處置に預かりたい、といふ事は、我々、容保家臣といたしまして、所謂臣子の分より、此の場合に、之を願ひます、我等の衷情、偏に御推察を願ひまする。」

板垣が反問したのは、詰まり、寛大の處置を取る、といふ事を、條件にしての降伏、といふのでは、之を容れる事が出来ないから、其處に力を入れたのであつた。然るに秋月が、寛大の處置を願ふといふ事は、家臣の分として、主人の爲めに願ふのである、といふ一言で、夫は只、藩臣の希望に止まり、降伏の條件でない、といふ事になるから、それならば、差支ないのである。板垣は、笑を含んで、

「左様の心を以ての、降伏なれば宜からう。此の退助も、人情はある。其以上はお聞き申すには及ばぬ。」

情の籠もる、板垣の此の一言に、秋月は、

「其お言葉に甘へて、此上の御配慮、偏に願ひ上げます。斯く決しまする以上は、砲撃の儀は、一時、御停止を、願ひたく存じまする。」

「宜しい、夫は承知いたした。併し先づ、降伏の旗を掲げた後でなければ、發砲を、停止する事は出来ぬ。」

「然らば、早速に、其計らひを仕りまする」
之から三人は、城へ歸る。夫を見送る板垣は、三人の姿の悄然として、何となく、哀れに見えたので、徐に高屋を顧みて、
「世に、亡國の臣ほど、憐れむべきものはない」
と、言つたとの事である。

一七

手代木等三人が、今や、板垣の陣を離れんとする時に、背後の方から、バラ／＼と、駆けて来る者があつた。

「暫らくツ、會津藩の御使者、暫らく……」

三人が、足を停て、振り返つて見れば、最初應接を仕た高屋であるから、

「是は、何事に御座りまするか」

「いや、他でもない。申し遺した事が、あるに依つて、參軍の命を受けて、之まで追つて参つた」

「そりや、如何なる儀で、御座りまするか」

「餘の儀ではないが、降旗を掲げた後、二時の猶豫を與へるに依つて、兵器彈藥は、夫までに一切取揃へて、藩の重臣が、夫を引渡しの式を行ふ事。亦、藩主肥後守父子は、倘し永々の籠城にて、身體疲勞等の爲めに、病氣致して居る、といふ場合なれば、輿物は特に差許す。且從者は二十人までを、許す事にいたす、但し帶刀は、總て之を禁ずる。之だけを猶申し傳へよ、といふ、參軍からの命であるに依つて、確と、御承知ありたい」

此の沙汰を傳へられた時には、三人が思はず、大地に兩の手を仕かぬばかりにして、首を垂れたが、流石は甲陽二十四將の一人、板垣駿河守の後裔たる板垣參軍は、武士の情けを知る人である。藩主に輿物を許すのみならず、從者

二十人までを許される、といふのは、藩主の面目、此上もない。自分等は亦、使者として、如何にも面目を施こした譯であると、篤く禮を述べて、三人は、城内へ歸る。事は、茲まで運んだが、併し猶、藩士の折合を付け、潔きよく城を開くといふに就ては、夫々に又、手續きもあつて、存外に夫が手間取れ、二十二日になつてから、大手門の外に、降伏の旗を高く掲げる事になつた。

板垣は、約束の如く、其の降旗の掲げられたのを見ると、直ちに砲撃を中止した。總て大手門は、左右に開かれて、會津肥後守容保父子、跡に續いて、萱野權兵衛、梶原平馬以下、十數名の者が、徐かに城を出て来る。名にし負ふ徳川親藩の中に於て、名のある會津藩主ではあるし、板垣も、會津侯の心事には、同情して居るから、飽までも、禮を以て、之を待つとの意である。眞先に、錦の御旗を擁して、左右の者を従がへ、板垣は、門外まで進んだ。

板垣は列を離れ、容保と相對して、一應の挨拶があり、容保よりは、降伏の旨を申入れる。板垣は領づいて、更に輿物を許す、といふ事を傳へたから、容保は、之より駕に乗つて、其の左右は、薩州兵が一小隊、土州兵が一小隊、此の二小隊の兵を以て、前後を圍うて、城北の瀧澤村にある、妙國寺といふ寺へ、容保を送り込んだ。

人間は、他の弱身に乘じて、之を虐待すること丈けは、憤むのが肝要である。併し、多くの人は、忌々しさが重なつて來ると、何うも、左様はならぬものだ。その憤みを爲し得る人なら、その人は、人間として、最も貴む可き人である。

板垣といふ人は、極く情に厚い、義を重んずる人であるから、會津藩に對する取扱ひが、斯ういふ風に、公平に行はれたのである。其處が、板垣の偉い點であつた。其晩年になつて、逆境に洗んだ所以も、實は、此氣風に、胚胎して居るのである。政治家は不人情なる可し、と言ふ次第ではないが、多くのものを抑へてゆく、その間には、嘘八百も必要の場合があるのだ。天下の事を行ふに、そんなことは出来ない筈であるけれど、個人に對する、日常の出來事については、幾分の掛引は要する、それが出来ない、となれば、玉石を併呑む、といふ藝當が、出來なくなるのだ。

政治家の成功と失敗は、その場合に生じて来る。故人になつた中江兆民が、曾て言ふたことがある。
「板垣は、政治家として、缺點の多い人だが、人間として、此位の美しい情を有つた人はない」
至言、實に、板垣を評し得て妙である、と思ふ。

一八

藩主が、既に立退いた以上、直に、城の引渡しに掛らねばならぬ。夫に就て板垣が、苦心したのは、此城が、前にも言ふ如く、黒川城の昔から、歴史上、却々由緒のある城であるだけに、其の明け渡しの如きも、充分慎重の手續を、取らなければならぬ。夫に、モ一ツは、朝命を拵んで、之まで奮闘を續けた、會津藩であるから、公憤と私憤を一つにして、甚く會津藩を憎んで居る者もある。萬一、之等の事情から、既に降伏した者等へ對して、不仁の取扱ひを、するやうな事があつては、夫こそ、板垣が、後世の胡慮になるのであるから、怎かして、怒る名城の明け渡しには、然ういふ事に就て、種々古式を辨へたもので、亦緩嚴然るべき苦心を、用ひられるだけの才識のあるものを選んで、之を行はせたい、といふ考へがあつた。雖然、何分にも、其人物に乏しい。攻城野戰、兩つながら巧の者もあり、或は、一騎打、拔駆けに、天晴功名を建る勇士も、山の如くある、併しながら、怒る場合に用ふべき人は、然う多くないものである。

然るに、薩藩士中村半次郎が、自ら進んで、此の任に當りたい、と申し出た。中村は、即ち桐野で、其勇名は、夙に聞えて居るし、亦現に、板垣も、夫を認めて居るのだが、困つた事には、此人は、餘り學問の無い人である。殊に城の受渡しなど、いふやうな、面倒な事を、知つて居るやうな人でもない。併しながら、位置の上からいへば、此の中村が行く、といふことは、敢て拒む事は出来ない。殊に、自ら名乗つて、行かうといふものを、理由なく拒むといふ事が出来ないので、密かに、中村を招んで、

「城受取りの役を、引受けたい、といふが、やつて見るかな」
「左様、己どんな、引受けて見たく思ふ」
「そりや、宜らう。併し、城の受渡しといふやうな事は、種々の習慣があつて、夫に餘り離れると、胡慮を買うやうになるが、其の邊の心得はあらうな」
「いや、そりや御心配な、己どんなお引受け申す」
恚う言はれて見れば、板垣も、なに汝、夫でも知つて居るまい、とも言へず、遂に、中村を遣はす事になつた。

所が、茲に一つ、偶然の僥倖といふ事は、其副使といふ譯ではないが、先づ副使同様の役を勤める者に、山縣小太郎といふ人が、従いて行く事になつて、此人に就ては、少しく言ふて置きたい。
豊後國竹田の城主、中川侯の家臣で、此時には未だ、軍曹位の格であつたが、非常に能く漢籍に通じ、軍書なども最も廣く讀んで居つた。此人が、後に、かの旅順口の閉塞戰で戦死を遂げた、廣瀬中佐の先生になつて、廣瀬を、那れまでに仕立上げたのである。此人が、従いて行つた、といふ事は、中村の爲めにも、亦官軍全體の爲めにも、頗る宜かつたのである。

會津藩の方では、此の使者に對する、應接の役は、秋月梯次郎が、引受ける事になつた。此の秋月は、會津藩に於て、智恵の秋月、と言はれた位の男であつたから、中村のやりかたが悪ければ、随分、面倒も出来たらう、と思ふ。然るに中村は、緩嚴の處置、宜しきを得て、少しも、此の秋月をして、苦情を言はせなかつた。其點に於て、中村は、確かに豪かつた。

此時、城内には、猶五千人餘の人が居たので、夫を、處置しなければならぬ。手傷を負うて居るものは、城内の青木村に移し、婦女老幼の輩は、鹽川といふ所へ避けさせ、其の他の藩士は、總て米澤の藩へ預ける、といふ事にした。之までの事は、中村が指圖して決したが、其他の手續は、一切、秋月に任せる、といふ事にしたので、秋月は感泣

して、中村の處置の宜しきを謝した。其の後、秋月が、會津侯に見えた時分に、此事を申上げて、中村の處置に對して、激賞した、會津侯も、非常に嬉ばれて、悉皆、事が濟んでから、家寶の銘刀を贈つて、其恩を謝した、といふ事である。

中村といふ人は、一面に以て、悍猛の性は有つたが、又其の半面に於て、斯くの如き、泪のあつた人である。

一九

會津の落城に續いて、北越も治まり、亞いて、五稜廓の戰鬪も濟んだ。世は再び、以前の泰平となつて、明治政府は、茲に組織されたのである。中村は、戊辰の戰役に對する、功勞に依つて、賞典祿二百石を賜はり、引續いて、軍役に服する事になつた。

明治二年に、西郷隆盛が、一度職を辭して、薩摩へ歸つた。其後は、薩藩の壯士を率ゐて、再び上京した。之が世に稱する、御親兵の始まりで、今日の近衛兵の基礎は、之から成つたのである。

其年に中村は、桐野と姓を改め、名も利秋と、稱する事になつて、陸軍少將にまで昇り、從五位の肩書が付く事になつた。昔を思へば、鹿兒島城外吉野村の紙漉武士と、蔑まれた者が、時世の變に乗じて、其の志しが成つて此榮達をした、といふ事は、他にも其類はあるであらうが、當時、中村の得意は、實に思ふ可きである。

彼是する中に、明治六年に、征韓論が起つて、西郷は遂に、其の議論の行はれざるが爲に、職を辭して國へ歸る。桐野も共に、辭職の上、歸國したのであつた。

併し、其征韓論の紛訂中に於て、桐野が努めた事は、一通りでなかつた。別府晋介と、北村長兵衛を、朝鮮へ遣はし、池上四郎と、武市熊吉を牛莊へ送つて、他日戰端を開いた時の、用意をしたなどは、西郷の行つた事には違ひないが、併し、桐野の獻策が、原因になつたのであるから、征韓論に對して、桐野が熱心であつた事も、一通りではなかつたのである。恐らく桐野は、征韓といふ事を以て、自分が畢生の事業と、視たに違ひない。夫を岩倉が、海外から歸朝した爲めに、破られたのであるから、桐野の不平といふものは、又一段と、烈しかつたのも、無理はないのである。

征韓論で、紛紜して居る中に、岩倉の邸へ押掛けて、非常な激論を吐いて、岩倉を困らした事もある。亦、大久保利通を刺して了はなければ、此事は破れる、といふ考へから、非常な決心を以て、大久保に迫つた事もあつたのである。が、事、悉く志しと違ふて、切て、水泡に歸して了つた。故郷へ歸つてからの桐野は、再び曠昔の吉野村に、落付いて、暫らく閑散に、日を送つて居る傍、部下の壯士を以て、開墾を盛んにやらし、といふやうな事は、平生の桐野を見て、此時の、桐野を見ると、殆んど別人の如き觀があつた。

然るに、時局は、段々切迫して來て、政府と西郷との關係は、益々疎隔して來る。其の間に、離間も中傷も行はれて、現在は全く、西郷黨と政府とは、全く相容れざる間柄となつて、了つた。其の行詰りが、十年の役となつたのである。

併しながら、前回にも屢々言ふた如く西郷に於ては、素より、旗揚をする、といふ考へはなかつたのだが、配下の壯士が、事を過まつて、那いふ騷擾を、仕出掛して了つたのであつた。夫に付いての責任は、桐野も多少負はねばならぬ。殊に、開戦後の責任といふものは、桐野に於いて、全然負うべきが、至當である。

當時の役に從ふた壯士で、後年まで生き残つた老人が動もすると、『十年の戰役は、それは、桐野どんの戰争でござす』

といふて居たのに徴しても、如何に桐野が、十年の戰役に於て、責任の重かつた、といふ事を、想像するに餘りがある。

殊に、熊本城を捨て、直に東上しろ、といふ意見や、或は、熊本城を一部の兵に牽制させて、九州全體を味方とし

て、徐に事を擧る、といふ意見や、之等の議論を、總て打壞して、只一氣に、熊本城を陥れて了はう、といふ意見を、飽までも主張したのは、桐野であるから、徒らに、熊本城の爲に、此戦争の目的を過まつた。といふ責任は、桐野に於て、充分に負はねばならぬ。雖然、夫は成敗の跡に就て、論ずるのであつて、桐野といふ人物が、如何にも、堂々として、男子の風があつた、といふ事に於て、何人も、反對は出来ない、と思ふ。

某薩人の言に依れば、眞の薩摩軍人を研究しよう、と思ふならば、桐野の兩面を、熟く觀れば判る、といふのであつたが、まさに其通りである。將來に於て、薩摩人を研究する者の爲めには、無上の格言であらう、と思ふ。

薩軍幹部の苦心

一

前回に、精しく述べてあるから、茲には、略す事とするが、二月の上旬に、柳原前光が、勅使となつて、黒田清隆と、高島鞆之助を従へて、鹿兒島に入つた。其時に縣令の大山綱良を、巧みに誘ふて歸つて了つた。夫が爲めに、薩軍に不利を與へた事は、非常であつた。殊に、高島が(當時大佐)勅使と共に、博多まで、引揚て來た時に、山縣監軍に面會して、斯ういふ意見を述べた。

「薩人は、元來、勇猛果敢にして、進むを知つて、退く事を知らぬ。故に、突撃は其長所とする所だが、従つて、機變を用ゆる事は、其の短所である。されば之に對して、百姓上りの兵隊を以て、正面から向ふても、夫は到底、駄目である、と思ふ。今や、熊本城は、天下安危に繫る所、薩軍は、全力を、之に注いで居るのであるが、本來の目的は、博多、長崎、豊後の方面に出て、九州全體を扼する、といふ事が、其の目的に違ひない。夫を爲すには、熊本城を、根據とする他は、ないのであるから、今、其の全力を、注いで居るのである。然らば、我が官軍が、熊本城へ、連絡を通ずる、といふ事は、將に天下の安危を、決する所以であつて、一日も、忽にすべからざる事である。併し、薩軍は今、熊本から東の方へ、其の全力を、注いで居るから、我官軍は、努めて、薩軍の側背を、直に衝く、といふ事を主とするが、宜からう。而して、同時に、其の根據になつて居る、鹿兒島を、占領して了はば、敵

の策源地は、竟めるに由なく、第一に、軍需の供給といふものが、絶えて了ふから、是非、然ういふ方針を、採つたら宜からう、と思ふ』

と言ふやうな、意味の事を計つたので、山縣は、頗る夫を妙なり、として、高島の説に、従ふ事になつたが、併し、山縣は、九州の人でないから、地理の上にて、頗るくらしい。乃て、高島に向つて、

『然らば、何れの方面から、進んだら宜い、と思ふか』

高島は、之に答へて、

『八代は、鹿兒島より熊本へ、通ずるの咽喉であつて、天正年間に、秀吉が、鹿兒島征伐に向ふた時分に、此地を根據とした、といふ事に依つて見ても、古今の名將が、薩摩攻めとしては、此の八代を、最も主要の地とした事は明かである。依つて、此の八代から、進むのが宜からう、と思ふ』

此の高島の注意は、頗る山縣を動かして、一躍、少將に進み、別動征討旅團司令長官、といふ事に昇進して、二月廿八日に、高島が率た一團の兵が、八代口へ上陸した。之が、果して高島の所説の如く、薩軍の最も急所を、衝いたのであつた。夫れが爲めに、熊本城の連絡も、通ずる事が、出来たのである。

高島といふ人は、晩年は、甚だ失意の位置に立つて、閑散無聊に、日を送つたやうであるが、若し、榊山將軍と相携へて、内閣の一人たりし時に、今少し巧みに、政黨の操縦をやつたならば、那の時の内閣は、猶少し、保つたらうし、高島の、用ふべき人物である、といふ事も、世の中が、認めたらうに、稍功を急いだ爲めに、失敗した事は、惜むべきである。山の如き負債が、其の手足を縛つて、殆んど、身動きも、出来ないやうな有様になつて、僅かに、好きな酒に酔ふて、悶々の情を慰めてゐた、といふのは、實に同情すべき晩年であつた。

備、西郷が、鹿兒島を出發した、後の有様は何うか、といふに、此時は、婦女子の如きものに至るまでも、私憤公憤、共に發して、政府に對する反抗の念が、最も強い時であつた。

或は、其夫の從軍した跡を受けて、金策に、奔走する妻もあり、或は、其の兄の出陣した、後の家政に、踴躍として居る妹もある。杖に縋つて居る、老人までが、共に西郷の爲に、といふので、金穀の類を、募集する事に、努めて居た。夫を巧みに、操縦して居たのが、大山縣令であつた。其の大山が、勅使の爲に、拉し去られた、といふ事は、薩軍が、半身不隨症に罹つたのと、同じことで、當に、蕭荷を喪ふたる、漢の高祖の如きものであつた。

勅使が立つと、直に入違ひに、歸つて來たのが、別府晋介と、邊見十郎太の二人であつた。夫れは、軍用金と、食糧に缺乏したから、其補填をする爲に、歸つて來たのだ。

直に縣廳に來つて、第六課の四等屬、菱田長喜、鎌田政直の二人に會ふて、是非、其事に付いて、盡力して呉れと頼んだ。二人は、快よく承諾して、舊藩の士族が組織した、承惠社、撫育社といふ、二つの組合があつたので、其組合の名義を以つて證券を造り、之を富豪に賣つて、立どころに、四萬圓の大金をつくつた。今日から見れば、之が、軍事公債なるものであつた。

次には、警察費と稱して、寄附金を、全縣下の人に求めた。當時の警察は、警部二百人、巡查千五百人ほどあつて之が、鹿兒島縣全體に、行渡つて居た。總ての人が、皆、西郷黨であるから、其寄附は、頗る有效なものであつた。然るに、某方面には、頗る反抗の氣味があつて、動もすると、寄附金を拒む、といふやうな、調子が見える。於是段々探偵を放つて、様子を探ると、果して、妨害して居たものがあつた。夫れは、陸軍大尉の池田道輝といふ人で、其時は、非役になつて、歸省中であつた。之が専ら、妨げて居たのだ。其他に、春山文平、有馬莊十郎、徳永喜八、得能政高、小倉友整等の士族が、重富帖佐の方面に於いて、盛に、此の徵發には、應ずるに及ばない、といふて、人を説いてゐる事實が、判然分つたので、元來、性急な邊見は、非常に怒つて、直に部下を集め、之等の人を、逮捕し

て来い、との命令を發した。

邊見の命を受けた者は、夫々、手配をして、各方面に於いて、是等の人々を、皆捕へて来た。先づ、其の首魁とも認むべき、池田大尉の訊問に掛つた。

邊見は、怒れる眼を光らして、

「汝は、頻りに、己等のする事に就て、反對を稱へ居る、といふが、そりや、何ぎや次第でござるか」

池田は、極めて沈着な態度で、少しも騒がない。

「貴下等のしなざる事は、叛逆であるから、己どんな、朝廷の爲めに貴下等のする事に對して、反抗するのでござす」

「何ッ、己等を、叛逆でござすと」

「左様」

「政府な、罪を犯し居るから、夫を責めに行く者が、何で叛逆か……」

池田は、苦笑ひをしながら、

「政府が、何ぎや悪い事をしたから、といふて、そりや亦、他に探る道も御座る。國民が、夫に激して、直に兵を起すといふ事は、天道に於て許さぬ。貴下等の仕居る事は、當に叛逆である。之が、叛逆でなければ、古來、叛逆といふものは、無かやうに思ふ。己どんな、現時非役になり居るが、猶陸軍大尉の肩書はある。左様な事に、従ふ事は出来ぬ」

言葉の終るか、終らざる中に、邊見は、立上つた。例の朱鞘の大刀を、引提げて、

「汝、不埒なッ」

と言ひながら、今にも、一刀に斬らうとする。別府は、傍から、徐に之を制して、

「まあ、そぎや亂暴な事は、止しなはれ。池田の言ふ事にも、一通りの道理はある。追つての懇談にしよう」

邊見が、苦情を鳴らすのを、漸く別府が押へて、其の内に、池田は退出させて了ふ。別府の、此處置に對しては、邊見は、頗ぶる不平だ。

「何故、貴下は、池田を助けなさるか」

別府は、首を掉りながら、聲を潜めた。

「貴下は餘りに、性急でござすからな。此の際に於て、猥りに人を捕へて斬るは、人心を失う所以でござす。此處で斬らんでも、途中で斬れば、差支なから、誰が斬つたか、判らぬやうに斬るといふ事は、斯う言ふ時に、最も大切な事てござすよ」

邊見は、莞爾笑つて、

「そりや、大きに然うだ。こりや、俺の過まちであつた」

其の日の事は、夫で済んだが、誰が斬つたか、其晩、池田大尉は、放免された歸り途、大口街道の入口に於て、無慙にも、二つになつて、瘧れて居た。

三二

大山縣令が、勅使に拉し去られた後の縣廳は、總て、大書記官の田畑常利といふ人が、監督して居たのである。然るに、戦局は、漸々擴がつて来るし、征討軍も、下つて来る、といふのであるから、縣廳は又、縣廳としての立脚地を、明かに仕なければならぬ。大山が居る間は、無論、西郷の爲めに、味方をしたのであるから、何事も、薩軍本位に、計畫が仕であつた。夫を、此儘に繼續するか、夫ともに、全く縣廳の方針をかへて、官軍の爲めに計らうか。よし官軍の爲めに計らぬまでも、薩軍の爲めに働くといふ、事を止めるか、何とか、方針を定なければ、縣廳としての、獨立の仕事も、出来ないのである。乃で田畑は、重立た役人を、一室に集めた。

「諸君を、此處へ召集したのは、他の事でもないが、這般の事變に就て、吾々は、如何なる方針を以て進むか、といふ事を、豫め、定て置かなければならぬ。従来通り、薩軍の爲に、百事便益を計つて、飽までも、政府の命令を拒む、といふ事にするか。夫とも、全然、官軍の爲めに働くか、諸君の意見に依つて、之を決しやう、と思ふ。遠慮なく意見を吐いて、貰ひたい」

改めて、斯う言はれると、輕々しく、口を出す者もない。宛然、水を打つたやうに、寂として居る。やがて其内の一人が、

「吾々の意見を、御訊ねになるよりは、先づ以て、大書記官の意見から、承はりたい、と存じます」

於、是、田畑も、席を進んで、

「然らば、自分の考へを言はう。西郷大將の意見が、如何に立派であらうとも、亦、今回の擧兵に就て、如何に堂々たる、主張があるにしても、陛下の軍隊に、抵抗するといふ事は、既に、臣下の分を、過まつたもので、斯くの如き事には、苟くも、吾々、政府の役人たる以上は、何うしても、同意する事は出来ない。併し、今日までは、我が長官たる、大山縣令の命令に依つて、進んで来たのであるが、今後、自分が、縣令に代つて、此の縣廳を、監督して行く上から言へば、斷然、從來の方針を改めて、官軍の爲めに盡す考へである。自分も、西郷大將を、崇拜して居る一人ではあるが、朝敵逆賊の汚名まで忍んで、推戴しなければならぬ、といふ理由も、ないのであるから、自分は此際、於て、從來の方針を、全然、變へやう、と思ふ」

田畑大書記官が、此の意見を述べたので、夫から頻りに、議論が出て来て、或は、

「大山縣令の命令に依つて、之まで取り来た方針を、今日に至つて非難する、といふ事は、如何に、上官の命令に、従はなければならぬ役人なればとて、餘りに附甲斐ない話して、殊に、結果は、假し朝敵逆賊の汚名を、被るとも、男子の一分としては、飽までも、初一念を、貫徹しなければならぬ」

といふ、議論を稱へるものもある。或は、

「大山縣令が、居られる間は格別、既に、縣令が去つて、大書記官長が、之に代つて居られる以上は、大書記官の意見に従つて行く、といふのが、順當である」

とか、種々の議論が出て、殆んど、夫が爲めに、半日も費したが、大略は、田畑大書記官の意見に従ふ、といふ、事にならうとした。折柄、此席へ、飄然として、入つて来た一人がある。一同の視線は、忽ち其人に注がれた。それは誰れであるか、といふに、前にも、略歴を述べた、淵邊高昭である。曾ては、北條縣の參事も勤め、陸軍の少佐にもなつたほどの人物で、征韓論に敗れて、西郷が辭職した、といふ事を聞くと、其儘、宅へも歸らずに、鹿兒島へ歸つた、といふ位の人物である。此人は、後に、入吉の戦鬪に傷つき、五月三十日、鹿兒島に於て、死んだ。此處へ來合したのは、桐野利秋の依頼に依つて、兵士を募集する爲めに、來たのであるが、先づ取敢ず、縣廳へ行つて、大山に會ふてから、後の事、といふ考へて、大山が既に、連れて行かれた事を知らずに、やつて來ると、圖らずも、此の會合であつた。

田畑も、淵邊とは、親交のあつた間柄であるから、早速に之を迎へた。淵邊は、田畑から、段々と、今までの相談の結果を聞いて、甚太悦ばず、一同に向つて、諄々として、西郷大將を助けて、政府を倒す事の、最も大切なる所以を説いて、荐りに、從來の縣廳の方針を、改めぬやうに、といふ意見を述べた。

何しろ、淵邊は、相當に人望もあり、縣廳の役人も、九分通りは、鹿兒島縣人であるが爲めに、淵邊を信する者も多く、衆議は又一變して、田畑の説を排斥する事になつた。始終の様子を見て居た、田畑は、スツト立上ると、次の間へ入つた、一同も、格別、怪しまずに居たが、間もなく、人の呻くやうな聲が、聞えたので、先づ立上つた淵邊は、次の間へ入つて見ると、這は如何に、田畑は、腹一文字に搔切つて、苦悶の最中であつた。

「田畑。何故、切腹などしたか。確乎せい」

介抱されて、田畑は、何か言ひ度さうに、口をモグ／＼動かしたが、終に何も言ひ得ず、苦んで居る。その前を見
ると、遺書があるので、夫を披いて見ると、
不肖、任に堪へず、一死以て罪を謝す。後事、一に以て、君に囑す。

祐 永 武 雄 君
今 藤 宏 君

常 利

有繁の淵邊も、涙を流して、其死を惜んだが、今は、奈何とも致方がない。淵邊の手が離れると、田畑は、前にバ
ツタリ倒れて、遂に息を引取つた。

四

田畑といふ人は、實に、武士らしい最期を遂げたが、往昔から、能く是れに酷似つた事がある。心では、飽までも
西郷を、信じて居るが、併しながら、自分は、政府に使はれて居るので、心の儘に、進退を爲し得ぬ。さればとて、
飽までも、自分の職務の上から、とはいへ、西郷に背く、といふことは、情に於て忍びない。よし淵邊が来ないで、
一旦、縣廳の方針が、大山縣令の執つた方針と變つても、此の田畑は、生きて居なかつたに違ひない。然るに、偶々
其の事の決せんとする場合に、淵邊が来て、縣廳の方針は、以前の如く、飽までも、薩軍の爲めに盡す、といふ事に
極つたから、然うなると、自分が、大書記官といふ職務の上から、只空しく、夫に従つて居る、といふ事もならない。
於是乎、男子として、只一死あるのみ、事に當つて、窮したから死ぬ、といふ事は、冷やかに考ふれば、小さいや
うであるが、併し、人間の一番貴むべき命を捨てるといふ、其の覺悟を實行する事は、容易なるが如くして、實は容
易ならざる事であつて、世間には、随分死ななければならぬほどの、恥をも忍んで、徒らに、生を食つて居るものも

ある。此點から見ると、田畑は、容易に得難い、人である、といへるのだ。

昔、天保の饑饉があつた時分に、大鹽平八郎が、大阪に於て、叛亂を企てた。其の當時、大鹽の門下に、宇津木某
といふ者があつて、大鹽の兵を、擧げる事を知りや、侃々諤々の議を唱へ、大義名分を誤りたる、其擧兵を止めやう
としたが、その意見は遂に用ひられなかつた。で、故意と、大鹽始め、其の一味の人を罵倒して、遂に快く、其の
血祭になつた、といふ話がある。夫れと是れとは、幾分の筋道こそ違へ、其の心事の、美しい事に於ては、少しも
變りはない。淵邊は、涙を流して、一應、其の死骸に、手當を加へてから、一同に向つて、

「田畑どんな、此ぎや最期を遂げられた。實に惜か武夫を、無慘と死なしたは、己どんな、一生の誤ちでござす。併
し、西郷先生が、既に兵を進めて、熊本城を攻めて居るのぢやから、此際に於ては、先生の高德を慕ふものが、徒ら
に、傍觀する事も、出来まいと思ふ。田畑の最期は、實に男らしい、立派な最期として、こりや、厚く、諸君と共に
葬らなければならぬ。併し、田畑の此の最期を遂げた、といふ事は、之を以て、政府に謝したのはいふまでもないが
自分が生きて居つては、諸君な西郷先生の爲めに、充分盡す事も出来ぬ、と思ふて、自ら死んだものである、と思
ふ。而て見ると、こいから西郷先生に盡す事は、田畑の志に、適ふて居る事ぢや、と思ふが、諸君は、何ぎや考へ
るか

些か諱辯を、弄するには似たれども、此際に於ての、淵邊の言條は、集まつて居る者の心を動かした。斯くて、一
同は、今までの方針通り、飽迄も、薩軍の爲に盡す、といふ事に決した。

淵邊と同じ目的で、鹿兒島へ来て居た別府は、少しく邊見に、相談する事があつて、今、邊見と、何か頻りに、相
談して居る處へ、桐野から使が来た。其書面に依ると、官軍は既に、八代口へ上陸した、といふ報知であつた。性急
の邊見は、之を見ると、劍を持つて立上つた。別府は驚いて、

「邊見どん、貴下、何ぎやしなさるか」

「いや、桐野どんから、此の報知が來居つた以上、一刻も、猶豫はならんから……」
 「いや、今是れから、急いで行つたからとて、直間に合ふものぢやなか、淵邊が、來て居る事ぢやから、淵邊を、是へ招んで、其の意見も、聞いて見ようぢやないか」
 「夫いも宜からう」
 邊見を抑へた別府は、直に使を出して、淵邊を招んで、是れに就ての意見を問ふと、淵邊は、
 「事茲に及んでは、最早致方がないから、此處に集めた丈の兵士を率ゐて、八代方面へ急行し、官軍の側面から、一擧に之を破るの他はなからう」
 といふので、三人の意見は、茲に極つた。直に、準備に取掛つて、大口街道の險路を、急ぎに急いで、八代の側面へと向つた。

五

此際に於ける、熊本城の位置といふものは、官薩兩軍に取つて、最も大切なるものであつた。従つて、其戰爭も却々に猛烈を、極めたものであつた。
 之を、世界の例に求めると、普佛戰爭の際に於ける、メツツの城の如きものである。佛國のバーゼム將軍が、實に善く、此の城を保つて、七十日の長きに及んで、遂に、力屈して、陥落はしたが、此長い間、善く保つたのは、全くバーゼム將軍の、勇敢と智略が、然らしめたものである。此の城が陥ると、普佛戰爭の大局は、定まつたのであつた。
 又、露土の戰爭に於ての、プレブナの城が、丁度、之と比較が出来る。當時、オスマンバシヤが、非常なる智勇を以て、能く此の孤城を守り、三十萬の露軍に、包圍せられて、籠城能く、半年の長きを保つた、といふのは、實に、

立派なものであつた。之も遂には、力が盡きて、陥落はしたが、彼れ以上に、籠城が出来たならば、戰爭の結局は、何うなつたか、殆ど、測り知る事が、出来ない位である。
 谷將軍は、決して、バーゼム將軍の上に出る人ではない。亦、オスマンバシヤに、勝れて居るとも、斷言せぬ。が併し、堅忍持久、殆んど三ヶ月も、能く籠城を保つた、といふのは、熊本城の陥落すると否とが、戰爭の大局に、大いなる關係がある、といふ事を認めて、徒らに、勇に走らず、又、智を示すことを漫りにせず、而して、偏に官軍本隊の來援を待つたといふ、事は、後世に傳ふべき、事蹟であらう、と思ふ。
 されば、薩軍が如何に、勇士に富み、智略ある將校が、多くあつたにもせよ、熊本城を、陥し入れる事が出来なかつた、といふのは無理もない事である。殊に、官軍の本隊に於ては、高島將軍の八代上陸策、更に加ふるに、鳥尾將軍の川尻突撃策といふのが、見事に功を奏して、既に其の陥落は、且夕に迫つて居た熊本城を、九死の中より、救ひ出した、といふのは、谷將軍の、善く孤城を守つたといふ功績と共に、兩將軍の働きも、この戰史に、永く留むべき事柄である。
 併しながら、薩軍に於ても、亦之を知らないでもない。桐野利秋の如き、既に之を、豫期して居たが爲めに、別府淵邊等の人々を、鹿兒島へ急行させて、後詰の兵の募集をさせた。八代口と、川尻方面へ、官軍の主力が集まつた時分に、能く之に、對抗するだけの、實力をつくつて置かなければならぬが、夫には餘りに、兵力が下足である、といふので、此の擧に出たのである。而て見ると、桐野が、怖れて居た事は、即ち官軍が行ふた所のものであつた。其間の事は、味はつて見るほど、面白いのである。
 話頭一轉、淵邊、邊見、別別の三人は、千五百の兵を募集し、加治木、出水の二道より、揉みに揉んで、三月二十五六の兩日には、目的の地點へ達する、といふ見込で、押して來た。雖然、それは已に遅かつた。此時は既に、別動各旅團は、日奈久、八代の方面より上陸して、小川、鏡の兩驛を占領し、松橋、娑婆神の險を扼し、其の前軍は、宇

土に進んで、もう川尻に肉迫仕て居たのである。其間の官軍の、活動といふものは、迅雷、耳を掩ふの違もない位であつた。了得に、高島、鳥尾の進軍は、後日の評判にさへ、残る位であつた。

總べて、戦争といふものは、機に乗ずるのが、肝要である。進むにも、退くにも、機を失はずに爲る、といふことが、最も大切なことであつて、古人も、兵は神速を貴ぶ、といふて居る位だ。官軍が、此方面に成功したのは全くそれが爲めてあつて、之れに依つて觀れば、兩將軍の働きは、眞に、熊本城を救ひ得たものである、と斷言しても決して、不可はなからう、と思ふ。

六

八代口の薩軍が敗れた、といふのは、薩軍の幹部に於て、其防禦を怠つた、といふ次第でもなく、又、全く其點に注意が届かなかつた、といふのでもなかつた。つまり、心では、焦つて居たのだが、力が及ばなかつた、といふのが正當の觀察であらうと思ふ。於、是、熊本城へ全軍の主力を、聚めて了ふた、といふ事が、最初から、策戦法を過まつて居た、といふ結論になるのである。

此方面に於て、協同隊が、終始、薩軍と其の進退を、共にしたといふ事は、大いに、述べて置かねばならぬ。初め、協同隊の編成せられた時分、夫は、二月二十五日頃であつたが、桐野利秋は、三個小隊の兵を率ゐて、其の右翼となり、山鹿を経て、高瀬川の流に沿ひ、稻荷山を越えて、玉名山より、高瀬の左側に、向つたのであるが、其時の先鋒は、協同隊が、勤めたのである。亦、篠原國幹、別府晋介の二人は、六個小隊の兵を率ゐて、即ち、薩軍の中央隊となつて、植木の本道から、田原、木葉を経て、高瀬川の下流を渡り、岩崎原を越えて、高瀬の正面に、向つたのである。村田新八は、五個小隊を以て左翼となり、吉次峠を越えて、伊倉に進んだのであるから、即ち、高瀬方面の、左側に、向つた譯になる。

二十七日には、官軍と、高瀬の町で、一戦ひしたが、之は、ホンの小戦闘に過ぎずして、兩軍共に、要所の地を扼して、對陣して居る丈の事であつた。

斯て桐野の隊は、山鹿に、屯集する事になつて、協同隊の一部は、平川唯一が將として、此方面を、助ける事になつた。其の他の薩軍は田原、吉次の方面を扼して、官軍に備へる軍になつたが、前回にも述べた通り、三月三日に、岩間の間道に於て、大いに官軍を敗つた際、平川は、不幸にして、流丸の爲めに、倒れたので、協同隊は、平川に代るべき、指揮官を設けなければならぬ。場合になつた。

然るに、平川に代つて、協同隊を指揮すべき人物は、宮崎八郎を以て、第一に數へなければならぬ。が、茲に、一つの困難は、何分にも宮崎が、無頓着に過ぎた爲めに、例の婦人を男装させて、營中に、屢々密會した、といふ一條が礎になつて、どうも此場合に、宮崎を、平川の代りにする、といふ事は、全體の人から見ても、如何あらうか、といふ遠慮は、幹部に於て、充分に仕なければならぬ。

於是、他に人物を求めて、其の補充をしなければならぬ、必要が起きて、高田露と、有馬源内は、之に就て、非常な苦心を仕たのである。いろ／＼に、人物を選擇して見たが、どうも、隊中の人では、然るべき者を見出す事は、出来なかつた。

『どうぢや有馬どん、崎村な宜からう、と思ふが、貴下、何う思ひなざるか』

源内は、之れを聞くと、思はず膝を打つた。

『ヤア、夫は氣が付かなかつた。こりや、崎村に限る、那れなら、確かに宜からう。併し、困つたことには、目下病氣で居る、といふ事ぢや』

『そりや、差支あるまい。大病といふのでも、あるまいから、マア兎に角、行つて、話して見やうぢやないか』

『夫も、宜からう』

相談が定まつて兩人は、沼山津といふ所に静養して居た、崎村常雄を訪ねて、之を平川に代やう、とするのであつた。
依之、著者は大に考へた。宮崎の如き人物にして、猶且つ、一女子の爲めに、誤られたのだ。若し、彼のことさへなかつたら、この時に、協同隊の指揮官に、なれたのである。磊落不羈の宮崎は、そんなことは、省みなかつたかも知れないが、それについても、慎む可きは、女のことである、と思ふ。

七

崎村といふ人は、蒲柳の質、事に堪へぬ、といふやうな體格であつたが、併し、何處となく氣品の高い、長者の風があつた。體軀は、瘦せて居たが、膽は却々、太かつたのである。

最初、協同隊の連中が、相集まつて、西郷を助けるか、助けまいか、といふ議論が、激しかつた時分に、夙々、集會を催したけれども、此の人は、一度も其席に臨まず、幾度か、同志の迎ひも受けたが、程よく言ふて、近寄らなかつたのみならず、西郷が、彌々大軍を率て、熊本城に迫る、といふ急報を得ても、一向、出さうにもせず、之ほどの騒動を、殆んど知らざるが如き態度で、冷静に、時局を見て居たのであつた。

崎村が、斯くの如き態度を以て、冷眼に、此の時局を看過した、といふ事は、政府に對する不平は、勿論あつたのだが、さればとて、西郷に與して、叛徒になる、といふ心も、なかつたのである。遠く、鐵砲の音を聴き、近く、同志の出陣する態を見ながら、悠々として、沼山津に、病氣の静養を、仕て居たのであつた。

今日は、天氣も好く、氣候も暖かく、気分も、すぐれて快いので、低い垣根越に見える、田園の景氣を娛しみつゝ、廊下に一人、兀然と坐つて居た。所へ、
「ヤア、崎村どん、居つたかな」

と、籠を掛けながら、入つて來た有馬と高田。崎村は、振返つて見ながら、
「能く、やつて來居つたの、どうぢや、戰鬥の模様は」

「ウム、却々強か、事ぢや」

「然うぢやろう。戰爭といふやつ、面白か事ぢやが、軍書に書いたやうな、譯にも往かぬからな、アツハ、、、」
有馬は、膝をすゝめて、

「時に崎村どん、俺どん等が、來居つたのは、他の事でもないが、貴下に少し、頼みがあつてな」

「フ、ン、そりや何ぢや」

「實は、平川どんが、彈丸に中つてな」

崎村は、此一言に、恰も思ひ出したる如く、

「然うぢやつてな、惜か事を仕居つた。平川の奴、なか／＼良か奴ぢやつたからな」

「夫で、俺どん等が、來居つたのぢや」

「ウム、何ういふ事か」

「貴下、平川どんに代つて、協同隊を、指揮して下さる、譯には往かぬかな」

崎村は、手を振つた。

「そりや可かぬ。平川どんに代つて、俺どんな指揮する、といふ事は、そりや無理ぢや」

「何故か」

「何故か、といふて、俺どんな、初めから、關係せぬのぢや」

「さア、夫ぢやから、猶ほやれるぢやらう、と思ふのぢや、最初から、關係のない人であるから、一切の情實な、關係がないからな。却つて、最初からやつて居る者より、宜か思ふぢやよ」

之から有馬は、諄々として、崎村を説いた。是非、隊中に加はつて、平川の代りを、勤めてくれ、といふ事を、頼み込んだが、崎村は腕をくみ、眼を閉ぢて、沈と考へたぎり、更に、答へを仕ないので、高田は、ズツと膝を進めて、『オイ崎村、主は、俺どん等を、見殺しにする意か』

『ナニツ』

崎村は、クワツと、眼を開いた。

『見殺しにする、とは、そりや何か』

『俺どん等二人が、茲まで態々開戦中に足をはこんで頼む、といふのは、容易ならぬ事ぢや。此通り、見込まれたのぢやから、已むを得まい。御互ひの間に、何も遠慮は要らぬ事ぢやから、引受けたら宜か。夫ともに、此の戦争は、見込みがないから、嫌と言はしやるか』

『いや、然う理窟づめては、俺も、困るぢやないか』

『困るなら、引受けたらどうか』

高田は、殆んど喧嘩腰、理窟づめて、向つて来る。崎村も、今更に、嫌の一言を以て、答へる事もなるまい。再び沈と、考へ込む。

二人は、崎村の返答を待つて、之も、口を噤んだ儘であつた。

八

明治七年に、宮崎八郎と共に、有馬、高田、平川第が、植木學校を起し、盛んに、自由民権の空氣を、青年に鼓吹んだ時、此の崎村といふ人は、表面には、立たなかつたけれど、裏面に於ては、常に其の計畫に参加して、暗く、顧問の役を、盡して呉れたものであつた。爲に、一般の人には、然るまでに知られなかつたけれど、同志の間には、却々、

重きを爲して居たものである。

高田と有馬の二人から、膝づめて、談じ込まれた、崎村の迷惑は、素より、一通りではない。今になつて、其の郡に投ずる位なら、最初の計畫から、與つて居た方が、宜い位なものである。雖然、之れまでにして、自分を迎へてくれる、といふ事は、崎村にしても、不快な事ではなかつたらう。

源内は、ズツと進んで、

『さあ崎村どん、是非、承知して貰ひたいが』

『まあ、待つてくれ。出るならば出るで、俺どんも、考へて見んけりや、ならぬからな』

『いや、考へてるなどいふ、猶豫はないのぢや。無論、貴下に承知させて、此處から直ぐ、連れて行く覺悟ぢや』

『そんな、性急な話しは、俺も困る』

『そりや、貴下の困るのも、俺どんな知つて居るが、何うでも可かぬ、といへば、最早之までの事であるから、即答して貰ひたか思ふ』

『そりや、困つたな。貴下等二人が、指揮したら、隊中に、不平のある理由もなからう』

『いや、夫が出来んのだ』

『何故か』

『俺どん等は、戦争する方へ、廻るのぢやから、貴下を、頼むのぢやよ』

斯う言はれて見ると、崎村も、今は絶體絶命、嫌とも言へない破滅に陥つた。

『可矣、承知した』

『えツ、引受けてくれるか』

『ウム、よろしい』

『夫ぢや、之から、直行つてくれ』
『可矣』

立上つた崎村が、床の刀架けにあつた、傳家の寶刀を帶して、

『さあ、行かう』

『仕度を、爲ぬか』

『別に、仕度は要らぬさ、之さへあれば、可いのぢや』

刀の柄を、叩いて見せた。決るまでは、手間が取れたが、決つたら、實に疾いものだ。迎も見込のない戦争に、友人からせがまれて、據るなく出て行く、といふ場合に、何の準備もなく、恰て遊山にでも、行くやうに、只一本の刀を帶して、直に立上る、といふ、其處に崎村の勇氣と、餘裕はあるのだ。二人も、之を見て、心竊に感心した。

此人が、いよく戰場に、臨んだ時分には、杉本良吉といふて、崎村常雄とは、言はなかつた。従來は、參謀と稱して居たのを、此時に、幹事といふ肩書に、改めた。今日でこそ、町内の集會にも、同業者の新年宴會にも、幹事といふものがあるが、未だ其頃には、幹事といふ稱へは、無かつたのだ。夫を崎村が、參謀といふ字に代ゆるに、幹事の二字を以てした、といふのは、何でもない事のやうで、實は、崎村の用意周到の所が、判るではないか。

後に此の人が、熊本隊の池邊、其他の領袖と、相會した時分に、

『鹿兒島灣を解放して、之を自由港灣とし、其の旨を、世界の列國に通牒して、新に、通商貿易を開き、又、人を長崎に遣はして、居留地の外國人に、此の旨を通じて、鹿兒島に、新たなる政府を設けて、大に、貿易の道を開いたら、宜からう』

といふやうな、議論を出した。雖然、此の議は行はれず、只崎村の妄想の如く、聞き流されて仕舞つたのは、甚だ遺憾であつた。が、併し、崎村といふ人は、其當時に、斯ういふ考へを、有つて居た、といふ一事を、以て見ても、

九

一般の、只亂を好むのみの、強い人とは、自ら、趣を異にして居た、といふ事は、解るではないか。

前回にも、屢々言つた通り、八代口が破れると、熊本城を包圍して居る、薩軍の爲めには、此上もない不利であつて、自然、其の包圍を、解いて了はなければならぬ。然るに、各軍は、續々として、此の方面へ、其の勢力を、集めて來るので、桐野利秋の心配は、一通りてなかつた。若し、薩軍にして、八代の地を、確實に占領すれば、川尻方面は、極めて安全になるのである。

於是、桐野は、協同隊の一部を以て、此の方面へ差向け、他の一部を、入吉に赴かせて、鹿兒島から引揚げて來た兵と、一ツになつて居る、別府の隊を、助けさせやう、といふので、宮崎八郎を、迎にやつた。宮崎は、最初から、種々な計畫を立て、其の意見を述べたけれども、總て、排斥されて了つたから、心甚だ樂まず、一時は、非常に氣が鬱して、戦ひをするのも、嫌になつた位であつた。けれども、今に至つて、如何に、獨煩悶しても、夫は詮のない事である。而已ならず、茲まで進んで來て、見苦しい事をするのは、肥後人の恥辱である、といふ考へから、自分で、氣を取直して、戰場の露と、消えるの覺悟であつた。

桐野から、迎ひを受けて、早速やつて來た。之を見ると、桐野は、先づ腰掛を排して、

『ヤア、宮崎どんか』

『御迎ひを受まして、何か御用ですか』

『ウム、少し貴下に、御依頼したい事があつて、お招ぎしたのぢや』

『ハ、ア、そりや、何で御座いますか』

『さあ、他でもないが、八代の方面へ、頻りに官軍が、力を傾けて來るやうぢやから、どうも、那の方面を、破られ

るやうな事があつては、我軍の一大事ぢや、と思ふ。依つて、人吉の別府隊と、巧に連絡をつけて、其方面を、飽までも、固守して貰ひたい、と思ふ。夫に就ては、協同隊の諸君な力を、借んきやならぬ。貴下、其指導者になつて下さらぬか」

流石に、桐野も、餘程窮したものと見える。固より、空威張に威張る、といふやうな人ではないが、前には、何となく、協同隊を軽く見て居たのに引替へて、今日は、極めて謹嚴な態度で、言葉も低くしての、相談であるから、宮崎も、之には、案外な思ひを仕た。然し、即答には、鳥渡苦しんだのである。といふのは、最初、自分が桐野へ、獻策した時分に、其の説を、用ゐてくれれば宜かつたのだ。夫は畢竟、八代の士族を、巧く説き付け、之を利用して、此の方面へ上陸して来る、官軍を防ぐ、といふ策であつたが、一も二もなく、刎付られて、遂に今日に至つたのである。

目下は、八代の士族も、既に向背が決して、無論、官軍の爲めに、働いて居るに違ひない。従つて、桐野の此の依頼も、充分に、果す見込みは、付かないのである。といふて、今此の場合、無氣に斷る、といふ事も出来ない。宮崎は、今、非常な苦しい位置に、なつて居るのである。然しながら、誠に立派な、覺悟を有つて居る人であるから、

「よろしい、承知いたしました。事の成否は、豫め計る事は出来ぬが、自分の力の續く限り、盡す事に仕やう」

「イヤ、貴下がそぎや言ふて呉れば、無論届くに違ひない。早速に頼む」

「よろしい」

於是、宮崎は、桐野に別れて、自分の陣へ歸つて来たが、人には語らず、心竊に、最早仕方がないから、此の戦に於て、討死するの、覺悟であつた。

協同隊の中にも、之に就ては大分議論があつたが、併し、今更に、苦情を言ふて、味方同志で、紛糾しても、詮のない事だから、議論は大概にして、兎に角、人吉の別府隊へ赴いて、能く計らう、といふ事になつた。其處で、宮崎

等は、人吉へやつて来たのである。

「八代の士族が、今、官軍を助けて居る、といふ事も、事實には相違ないが、まだ上手に、手を入れたらば、或は、官軍との連絡が切れて、薩軍を、助ける事になるかも知れない」

といふ、見込を話した。夫は、別府が自ら、八代へ赴いて説いたならば、或は、然ういふ都合にならう、といふ意見であつた。別府も、之には多少、耳を傾けたのだが、折柄やつて来た、逸見十郎太が、此の事を聞いて、

「そんな、馬鹿な事は不可ん。今に至つて、八代の士族に、何を言ふ必要があるか。よし百萬の官軍が来ても、一蹴して破れば、差支へない事である」

と、例の大言壯語で、却々肯かぬ。之で圖らずも、議論に時を移して、其夜は、別府の陣に、止まる事になつた。其晩、俄に四方から起つた、鬨の聲と共に、押寄せて来たのが、官軍の夜襲であつた。之までに迅速に、官軍が攻め寄せて来るとは、素より、覺悟を仕て居なかつたのであるから、此の夜襲に對しての備へは、固より出来ず、薩軍は甚だ見苦しき敗北を遂げ、雪額を打つて、總退却といふ事になつた。

了得に、邊見は、驍勇の士であるから、踏み止まつたが、宮崎も亦、邊見を助けて、非常なる惡戦苦闘を、續けて居た。折柄、一發の流丸が、ピエウと鳴つて、飛んで来た。呀と叫んで、宮崎は倒れた。傍に居た邊見が、之を見て、かけ寄ると、宮崎は、徐に下腹を押へて、懷中から、一冊の手帳を出した。

「之には、大切な事が認めてあるから、どうか貴下から、我隊の者に、渡して貰ひたい」

と言ふ中に、ワーツと上げる鬨の聲、急襲の如く、撃ち来る銃丸、見る／＼内に、宮崎と隔てられて、邊見の姿は見えなくなつた。

急所の重傷に、起上る事もならず、宮崎は、暗きを幸ひに、道端の桑畑の内に入つた時は、已に、息も絶え絶えて

あつた。折柄、隊長らしい服装の人が通り掛つて、宮崎の呻きを聞いて、中へ入つて来た。
 『やツ、貴様、宮崎か……』
 『左様ぢや』
 と、まで、答へはしたが、跡は何の言葉もなく、ガツクリ前へ伏した。其隊長は、一刀を閃かすと、宮崎の首を引揚げて、何處ともなく、立去つて了つた。
 あはれ、肥後の一奇才として、知られた宮崎も、斯くの如くにして、最後を遂げたのである。

田原坂の激闘

薩軍の戦争ふりは、之を譬ると、佛蘭西人の戦争ぶりに、能く似て居る。非常に勇氣に富むて、激しい戦闘に堪へる、而已ならず、戦闘が激しくなるほど、能く奮闘を続ける、といふやうな風で、つまり、力攻めの戦ひに於ては、日本無双であるから、西南の役に、飽までも攻勢を取つて、遮二無二進んだならば、よし、最後の敗れはあらうとも一時は、九州を一掃して、随分、面白い事にあつたらう、と思ふ。

然るに、事實は、實に反し、巧に思慮をめぐらして、攻守相半する、戦ひぶりを示した、といふのは、却つて薩人の得意を、發揮する事が出来なかつた原因でもあり、夫が爲めに、却つて官軍の方から、乗ぜられる機会が、多くなつたのである。

官軍は、木葉より進んで、植木口に出て、他の一隊は、伊倉より、吉次峠を経て、小窪に出るやうに、なつて居た。主たる目的は、熊本城と連絡を通ずるにあつた。殊に、官軍の監督は、山縣有朋が、之に任じて居た。

山縣といふ人は、その晩年こそ、老實な人物に、なつては居たが、昔は却々、あばれ者の一人に、數へられて居たのだ。久坂玄瑞と、高杉晋作が相謀つて、長州の奇兵隊が出来る、と、三度目の監督になつたのが、山縣である。其の當時は、狂介と、稱して居た。其の前後の、山縣の亂暴は、一と通りでなかつた。夫が段々、明治の世に入つて、位

置も得、官位も高くなつて来るに従ひ、切ての調子が、變つて来て、極めて謹嚴な沈着いた人物になつた。けれども明治十年の當時は、昔の氣性も、殘つて居るし、戰爭も、非常に巧であつた。

前に言ふた如く、官軍が二道に別れて、熊本城へ押寄せ、といふ時分に、木葉、吉次の薩軍を、一刻も早く、打攘つて了はなければ、植木、小窪の方面を、助ける事が出来ぬ。於是、第一旅團の野津少將は、山縣監軍に逢ふて木葉、吉次の側面を、急に打破る、といふ事に付いて、種々、獻策を仕た。雖然、山縣は、遂に之を許さなかつた。といふものは、薩人は、接戦に於て、天下の雄であるといふ、事を、能く吞込んで居るし、途中に、田原坂の險路があつて、之に砲壘を假設して、巧に防がれると、最後には、之を奪取するとして、一時は非常に、味方を損ずる事になる。亦、萬一にし、大敗した時には、夫が爲めに、天下の人心が動揺するのであるから、何うしても、野津の進言を、背かなかつた。然うした事情で、官軍も、途中までは出たが、行き惱みの形であつた。

深い考もなく、只勇を以て進む、といふ、若い連中は、甚だ山縣のやりかたを、感服しなかつたものもあるが、其内に、各道の官軍が、追々に集合して来る。第二旅團の三好少將の兵も、到着する事になつて、兵力が充實し、時期が、茲に熟した、と見るや、山縣は、直に野津に命じて、進軍の準備を、申付けたのである。

一

五十年も過ぎて、今日に至るまでも、猶、人口に膾炙されて叩るのが、田原坂の戰鬪である。恐らく旅順背面の白兵戦といへども、田原坂の激鬪ほど、激しい事はなかつたらう。眞に日本人一流の接戦であつたのだから、其の壯烈な態も、今から想像する以上の事であつたに、違ひない。

抑々、田原坂の地勢は、天然の嶮岨であつて、坂が急で、左右が斷崖絶壁、或は上り、或は下り、百曲千折、よし戰爭でなくとも、衆多の人が、相並んで通るには、極めて不便な所である。殊に武装して、長い鐵砲や、刀を携さへ

て通る、といふには、此の上もない、不便な所であつた。左右の斷崖の上には、怪樹が鬱蒼として、左右から迫り、晝猶暗きの感がある。一夫之れを守れば、萬卒も猶且つ、破り難きの嶮であつた。

倘し、官軍が、此所を占領すれば、直に熊本へ、連絡を取れるが、之に反して、薩軍が、能く之を守つたならば、官軍をして、熊本へ、進む事を得せしめぬのである。

然れば、薩軍は、初めから、此嶮岨を守る、見込を立て、官軍が、既に此方面へ、續々として、押寄せて来るといふ、報知を得ると同時に、田原坂に於て、充分に喰留る、手配を仕た。殊に、此所は、私學校に於て、養なふた壯士の中から、最も腕力に秀で、劍術に長じた者ばかりを集めて、左右の崖の上には、堅固なる壘を築き、横に穴を穿つて、交代したものは、此穴の内にて休息する、といふやうな準備になつて居た。實に穴居して死守する、とは斯ういふ事を、いふたのである。

彌よ、三月四日の、午後三時過になると、野津旅團長の率ゐた、一團の官軍は、續々として、坂下に集まつて来た。野津は、薩藩の出身で、此方面の地理には精しく、田原坂が、如何に嶮岨な場所であり、如何に大切な所であるかといふ位の事は、心得て居る。従がつて、之を力攻に仕ては、奪るに難い、といふ事も、知り抜いて居るから、此の場合に於ては、眞に死を決しての力闘を、爲る意であつた。

併し、野津の心を察すれば、實に氣の毒なものであつた。現に、坂上を守つて居る、薩軍の壯士は、自分と同じ國の者であつて、自分から見れば、孰れも後輩である。夫を率ゆる者は、自分と同じに、育つた人々である、といふに至つては、如何に戰爭とは申しながら、野津の心の苦しきは、思ひやられる。

豫て、用意して来た、酒樽のかぐみを抜いて、部下の者に、之を飲ませ、先づ第一番の突撃をなすべきものを、整列させて、其前に、野津は進んだ。

「一同へ申渡すが此田原坂は、見る通り、天然の嶮岨であつて、之を守るものは、一騎當千の薩人である。無論、進

む者は、生きて還るの考が、あつてはならぬ。我が軍が、此坂を占領すると、否とは、全軍の勝敗に、關係を有つて居るから、其の心得を以て、戰鬥に従事するのぢや。つまり、汝達の戦かひ一つが、全軍の勝敗に關係するのぢやから、汝達は、此の田原坂で、戦死を仕ても、それは實に名譽の戦死である、と思ふ。只、國家の爲めに、汝達は、死力を盡くして、此の田原坂を、攻取らなければならぬのだ。其の覺悟で、進んでくれ』

此の訓示に勵まされて、一同は、田原坂の露と消えるの、覺悟であつた。

乃て、進撃の喇叭を吹奏すると、青山大尉は、自から先鋒隊を率て、一時に、田原坂の嶮路を、指して進む。かねて待設けた、薩軍は、左右の崖と、正面の坂上より、一齊に、討つて出た。

坂路は狭く、働らきは自由ならず、夫を三面から討たれるのであるから、官軍は、働らきの出来やう管がない。見る見る中に、青山の先鋒隊は、滅茶々に打破られて、退却を仕た。

野津は日本刀の柄を叩いて、必死の指揮をしたが、何うも致方がなかつた。田原坂を守る、薩軍の指揮官は、篠原國幹である。之を補佐するものは、別府晋介と、村田三介であつた。

一一一

其後、幾度か攻めたが、常に官軍の敗となつて、一步も敵壘を、侵す事が能なかつた。田原坂は、依然として、薩軍の占領する所であつた。

薩軍の陣は、山鹿より起つて、田原坂、吉次峠を経て、連絡を執り、要所々々に、砲壘を設けて、嚴重に構へが、出来て居る。つまり、天險を扼するに、勇士の死力を以てするのだから、普通の攻め方で奪らうとしたのは、全く無理である。今日の如く、兵器の進歩した、世の中で、機械攻めにしたら、格別、只尋常に、小銃を撃つて進むといふ位の事で、なか／＼落るものではない。

官軍の陣地は、何うであるか、といふに、山鹿口より鍋田、上木葉、二股、原倉、伊倉、にまたがつて、田原坂を擁して居る。官軍に取つての困難は、大兵を以て、此の要所々々に、連絡を取る、といふ事が、難かしかつた一事だ殊に、田原、二股の間の如きは、自然の地勢が、凹んで居て、小山があり、丘が連なり、其の間は、水田の多い爲めに大部隊の隊伍を以て、整々と進む事が出来ぬ。何うしても、奇兵を以て、進むより他に、方法はなかつた。勢ひ、斯くの如くであるから、幾度攻めても、只味方を損ずるばかりで、容易に抜く事が出来ない。流石の野津少將も、之には閉口仕た。暫時自重して、相當の軍略を、めぐらすの他はない、と云つた。高瀬、原倉、伊倉の方面に、守備兵を置いて、更に一軍を割いて、左り側の山の上に備へた。之は、吉次峠の方面から、來襲して来る敵を、防ぐ爲めて其の他の兵は、悉く大學して、田原から攻擯る、といふ事になつた。

折柄、第二旅團の三好少將に代つて、野津大佐は、乗込んで來た。後の元帥、道貫である。つまり、兄を弟が、助けに來た、と云ふ格であつた。

「やア、何うてごわすか、大部難かしかやうで、ごわすな」

「七次殿、此様、困つた事はなか……」

七次とは、道貫の幼名である。鎮雄は、七左衛門といふのだ。七次の道貫は、莞爾笑つて、

「敵になつても、俺どんな國の者は、皆強か奴で、ごわすからな」

「ハツハ、、、、そりや然うぢやよ。皆強か奴ばかりぢやからな」

自分等は官軍であつて、薩軍は、賊徒の汚名を受けて、攻められて居るのだ。其場合にも、野津兄弟は、自分等の故郷の人だと、思へば、斯ういふて負ながらも、自慢を仕て居る。是が日本人のお國自慢、面白い所だ。道貫は、言葉

葉をあらためて、

「何ぎや方法で、攻めて居られるのか」

『何ぎや方法、と言ふて、此の田原坂を攻めるに、方法も何もあるか、只力攻に叩き付ける他はな、』
『イヤ、其いぢやから、可かぬ。一夫之を守れば、萬卒も攻め難し、といふほどの田原坂を、正面から力攻めにしやうとしては、そりや、貴下が、鬼神でも難かしい。之れは、奇兵を用ひて、側面から、討つ他はな、』
『ウム、そいなら、何ぎやすれば、可いか』

『田原と吉次の間から、峻坂峻路を攀上つて、敵の左側に出て、一舉に討てば、必ず功を奏する、と思ふ』
『そりや、貴下の言ふやうに、行ば宜いが、併し、那の方面から進む、といふ事も、却々、難か事ぢやらう、と思ふ』
『併し、夫にしても、行つて見ん事にや判らんから、此様戦ひは、有る限りの考へを、つくして見て、始めて功を奏するのぢやから、兎に角、やつて見なされ』

地圖を出して、段々と、二人が、額を鳩めて、相談の上、遂に夫と決した。

田原坂と吉次峠の間を、うねつて居る、山の中途から、道なき處を、或ひは木の根、岩角を足掛りとした、藤壘を傳ふて、竊に攀上り、田原坂の左側より、一時に、ワツと、突き進むた。

然るに、薩軍も、流石に、地の理に精しいから、此の方面にも、相當の備へが、仕てあつた爲めに、官兵は、十メ一トルばかりの、近距離に、突撃を仕たが、遂に打破られて、此の方面の戦ひも、失敗に歸した。此の一戦に、道貫は、身に三弾まで受けたが、幸にして、重傷ではなかつた。

左側に、此の激闘が、起るのを合圖に、正面から又々野津に代つて、後走に到着した、三好少將が、攻掛つたけれども、之も、目的を達せず、三好は、之が爲めに、負傷して退き、大山少將が、代る事になつた。

所へ、三浦少將の率ゐた、第三旅團の兵が來援して、茲に各將軍が、集會の上、遂に拔刀隊を編成して、眞の力攻めに、攻め落さう、といふ事に、相談が決して、新たに到着した、各隊の内から、腕前のすぐれた者を選んで、拔刀隊の編成、といふ事に、なつた。

四

劍術と柔術は、日本の特有物で、他の國には、無いやうに思はれる。殊に、技戦を以て、戦争の方法の如く、心得て居た、日本人としては、自然、其の關係から、劍術と柔術を、盛んに學ぶ必要もあつて、旁一時は、頗る盛に、之が行はれた。

此頃のやうに、兵器の進歩と、戦争の方法が、改まつて來ては、劍術や柔術も、殆んど用を爲さない。荒木又右衛門とか、宮本武藏とか、いふやうなものが、たとへ幾人、出て來た處で、其の秘術を盡して、片端から撫て切にするといふやうな事は、絶対に能ないのである。然し、夫でも、自兵戦になつて、入亂れての戦争の時分には、猶且、之を心得て居ると、居ないひとでは、大層な違ひがある。

田原坂の戦ひに於て、拔刀隊を編成したのは、未だ今日の如き、兵器の進歩が、なかつたのみならず、地勢の上から見て、どうしても、個人の奮闘を、必要とした爲めに、官軍に於ても、拔刀隊の編成に、着手したのである。

之より先、彌薩軍の勢ひ激しく、大兵を繰出す、といふ事に、なつた時、大久保内務卿の計畫で、川路大警視に命じて、巡查隊を組織させた。其頃の巡查は、多く舊幕臣、又は諸藩の士族から拔擢したので、何うしても、一般の町人とは違つて、武術の心得は、各々深かつた。その巡查なるものを、率ゐて居るのが、權少警視重信常憲、大警部川畑雅長、同く上田良貞、中警部園田安賢、永谷常修等の人々で、總數は八百餘人と、いふ事であつた。之は、參軍川村純義の手に從いて、二股といふ所に、來て居たのである。此中から腕前の確かなものを選抜して、拔刀隊を、編成する事になつたが、三月十三日の朝、上田大警部が、監軍の本陣へ招かれた。上田は、來て見ると、其の使は、山縣監軍からの使ひであつた。

『お招きて御座いまして、罷り出てまして御座ります』

「オ、能く早くやつて来た。他の事でもないが、少し相談を、仕たい事がある」

「ハイ、何ういふ事で御座いますか」

「お前の部下にある巡查から、然るべき腕前の者を、百名ほど選抜して貰ひたい」

「ハア、そりや、何ういふ御用になるので、御座いますか」

「お前も、聞いて居るだらうが、田原坂の賊軍が、實に能く官軍を、防いで居る。到底、普通の戦ひでは、奪れさうもない。依つて、抜刀隊で切込ませやう、といふ心算ぢや」

「成程、其れも宜いてせう。百名あれば宜しいので、ございませうか」

「然うぢや、百名と限つて作らう。其代り、充分に、剣術柔術の達人を、選んで貰ひたい」

「夫は、勿論の事で、ございませう」

「今夜にも、實行するかも知れぬから、其の覺悟で、早速に編成して貰ひたい、宜しいか」

「ハイ、委細承はりました」

「他の者にも、夫々言渡してあるから、お前が主として、之を率ゐるのぢや」

「ハイ」

上田大警部は、身に餘る、光榮を帯びて、山縣監軍の前を、退つて来た。直に夫々、人を選んで、茲に抜刀隊を、編成される事になつた。

田原坂を守る、薩軍の壯士は、何れも私學校で、鍛へ上げた、腕前ものばかりだ。接戦をさせては、怒らく他に敵するものがない、といふほどに、立派なものばかりであつた。殊に、天然の險阻を擁して、砦を造り、此處を奪はれると、奪はれないとは、全體の戦争に、深い關係がある、といふ考へより、必死を極めて、守つて居るのであるから、之を襲ふとしても、容易な事で、成功するものではない。されば、薩軍に於ても、油断は少しもなかつた。夫に

は、聞者を入れて、官軍の機子や、窺はせて居たのであるから、彌、巡查の中から、抜刀隊を編成した、といふ事が、明かになると、一同、腕を扼し、刀の柄を叩いて、勇み喜んだ。

土臭い百姓兵を、對手にするよりか、苟くも武士の果たる、巡查隊を對手に、眞の戦闘をする、といふ事は、頗る面白い。一泡吹かしてくれやう、といふ息くみて、待つて居る。

五

上田大警部は、抜刀隊の編成が出来ると、一同を集めて、

「汝達に、少し申し渡して置く事がある。夫は他でもないが、既に此の隊を、編成した時分に、充分の覺悟は、あつたらうが、田原坂を守る、賊徒が、容易に退散をいたさぬに依つて、我が監軍、山縣閣下より、命を被つて、此の隊を編成したのぢや。憶ふに、賊徒とは言ひながら、田原坂を守る者は、一騎當千の勇士であつて、容易に破る事は、難かしくあらう。併し、我々が、斯の如き、命を受けて、本隊を組織した以上は、若し、之を破る事が出来なれば、即ち我々の恥辱であつて、我々は、死力を盡して、田原坂の賊徒を、破らなければならぬ。汝達にも、其の覺悟はあるだらう、と思ふが、どうか、死屍を、田原坂に曝す、といふの覺悟を以て、田原坂を、奪取せざる以上は、一人も、生て還らぬ、といふ覺悟を有つて貰ひたい。吾輩の如きも、即ち其の覺悟を以て進むのであるから、お前達も、充分に覺悟してくれ」

懇々として諭す、上田の訓示には、聞いて居る、巡查は勿論、その覺悟は、あつたのであるから、何れも非常の決心を以つて、突撃の命令の下るを、待つて居た。

三月十四日午前六時から、いよいよ、田原坂の強襲を、決行する事になつた。號砲三發を合圖に、先づ先鋒隊が、道をわかつて進む。之は普通の兵士であつて、鐵砲で撃ちすくめて置いて、其の砲煙の漲つて居る下から、抜刀隊が切

込む、といふ計畫であつた。一個中隊の兵は、敵の左壘に向ひ、猶、一個中隊の兵は、敵の右壘に、向ふ事になつた。第一聯隊第二中隊の兵が、之に續いて、鬨をつくり、力足を踏んで、坂を駆け上る。其後から、抜刀隊が、百人従いて、坂の上の壘に迫つた。

「ソレ、敵が来た」

といふので、薩軍の方に於ても、各腕を振ふて、之を防ぐ。

此時の戦争は、實に恐ろしいものであつた。先づ昔の戦争の中に、例を取つても、多く斯くの如き壯烈なる、奮闘はなかつたらう、と思ふ位で、流石に、薩軍も、秩序ある攻め方に對しては、遂に防守の力盡きて、非常な混亂を來した。

第一、第二、第三の砦は、遂に官軍の爲めに、奪取されて了つた。併し、之が爲めに、官軍の死傷者は、百八十三名といふ、多數に上つた。恐らく斯くの如き、猶の額のやうな、小さい三ヶ所の砦を、奪る爲めに、之だけの死傷者を出した、といふ事は、旅順の背面攻撃の外には、多くなからう、と思ふ。

篠原は、急を聞いて、忽ち駆け付けた。見れば、此の光景であるから、大きに憤つて、例の銀造の大刀を打揮り、逃る者を勵まし、戦ふのに、聲援し、自ら眞つ先に進んで、指揮を仕たので、敗走する者の中から、五十名餘りの壯士が、引返して来て、篠原の指揮の下に、之が奮闘を續けた。

官軍は、三壘を奪ふて、稍、安心して居た上に、幾分の勞れがある。其處へ、篠原が、自ら眞つ先に進んで、此の壯士を以て、逆襲して來た爲めに、今度は、官軍が切崩されて、見る／＼却に、雪顏を打つて、坂下へ退却する。其上、官軍を、追討に討つたから、死傷者も、亦従つて少なくなかつた。了得に、篠原は偉い、殆んど此人、一人の力を以て取戻た、といつても、宜いである。斯ういふ事が、屢續いた。或時は、一日の軍に、十三遍も、奪つたり奪られたりした、といふ事であるから、實に恐ろしい戦争で、あつ、に違ひない。

然れば、今日になつては、此邊も大に開けて、當時の佛は、遺つて居らぬが、今猶、記念碑を建て、其の激闘の始末を、後世に傳る事になつて居る。若し、旅客が、田原坂を經る時に、此の記念碑を見て、當時の事を追憶したならば、如何に感慨を、深くするであらうか。先づ明治になつてからの、眞の武力に依つての接戦、といふものは、之れが名残であらう。

併し、惜むべき事には、篠原が、此の田原坂の戦闘に、吉次峠の露と、消えたのである。聞く所に依れば篠原が、例の銀作りの、大刀を引提げて、陣頭に臨めば、必ず薩軍は振ふので、官軍は、幾度か之れに惱まされた。如何にも、篠原が、悠揚として迫らず、而して、其の勇壯なる、戦ひ振には、毎も官軍が惱まされたので、どうしても、篠原を、殲して了はなければならぬ、といふ議が起つて、終に狙撃して殲したので、といふ。昔の戦争なれば、然いふ事はない。官軍の中から、然るべき者が乗出して、一騎討の勝負を決するのであるが、世の開ける、と共に、戦争の上にも、非常な變化を來して、篠原ほどの武士を、飛道具を以て狙撃した、といふ事は、昔の武士氣質からいへば、誠に卑怯な譯であつて、實に薩軍の爲めばかりでなく、篠原の如き人を、然ういふ方法で失ふた、といふ事は、惜むべき事の限りである。この一事は、薩軍に對して、非常な打撃であつて、彼是する中に、薩軍も、遂に力盡きて、官軍の爲めに、田原坂は、その全部を、奪取されてしまつたから、夫れが爲めに、各所の守りも、追ひ／＼危ふくなつて、戦争の大局は、遂に決したのである。

西郷應援の諸傑

一

薩軍が、鹿兒島を、出る時から、熊本城へ、其全力を傾けて、一擧に、之れを陥れやう、とした策戦の根本が、悪かつたのだ。その事については、西郷小兵衛を始めとして、頻りに不可を唱へたけれど、桐野利秋が、何うしても、肯かないのみならず、西郷が、桐野の意見に賛成したので、熊本城へ、全力を注いだのである。然るに、その攻城戦は、總べて失敗に歸した上に、田原、植木の方面も破れて、八代口から、潮の如く、押寄せて来た、官軍に對して、充分の防備さへも、爲る事が出来なかつた。

事、此に至つては、もはや、熊本城の包圍を解いて、遠く退くの外はない。けれども、薩軍は、猶ほ戀々として、この地を、捨つるに忍びず、遠捲きに仕て、回復戦を、企て、居たのである。其方面と、諸隊の割付は、何うなつて居たか、といふに、大津、長嶺、保田窪、健軍、御船の五方面に分れて、其根據は、木山に設けられ、右は、白川を限りとして、大津に延び、左は、御船に、主力を集め、巧みに健軍、甘木の間に、聯絡を保ちて、之れを前軍とし、全線の延長は、約七里に渉り、遙かに熊本城の、東方を包んで、總勢八千以上であつた。その方面と、隊長の氏名は

- 大津方面 指揮官 野村 忍 介 四番大隊三番中隊 隊長 野村 忍 介 四番大隊九番中隊 隊長 伊 東 直 二

- 二番大隊四番中隊 隊長 佐藤 三 二
- 二番大隊八番中隊 隊長 山口 十 藏
- 五番大隊三番中隊 隊長 神宮司助左衛門
- 二番大隊五番中隊 隊長 鎌 田 雄 一
- 五番大隊七番中隊 隊長 平 野 正 介
- 餂 肥 隊 隊長 伊 東 直 記
- 餂 肥 隊 隊長 伊 東 直 記
- 餂 肥 隊 隊長 伊 東 直 記
- 計 七 個 中 隊 三 個 小 隊 中 津 隊 隊長 増 田 宋 太 郎

- 長嶺方面 指揮官 貴 島 清

- 一番大隊一番中隊 隊長 林 七 郎 次
- 一番大隊二番中隊 隊長 新 納 精 一
- 一番大隊四番中隊 隊長 松 岡 岩 次 郎
- 一番大隊五番中隊 隊長 相 良 五 左 衛 門
- 三番大隊六番中隊 隊長 長 崎 金 兵 衛
- 六番大隊二番中隊 隊長 鮫 島 敬 輔
- 五番大隊九番中隊 隊長 萩 原 宗 藏
- 計 七 個 中 隊

- 保田窪方面 指揮官 中 島 健 彦

- 二番大隊二番中隊 隊長 中 島 健 彦
- 三番大隊四番中隊 隊長 伊 集 院 彦 左 衛 門
- 三番大隊七番中隊 隊長 岩 切 喜 次 郎
- 一番大隊七番中隊 隊長 (姓 氏 不 名)
- 二番大隊六番中隊 隊長 宮 内 康 寧
- 福 島 隊 隊長 山 下 謙 藏
- 計 五 個 中 隊 一 箇 小 隊

- 健軍方面 指揮官 河 野 主 一 郎

- 五番大隊一番中隊 隊長 河 野 主 一 郎
- 三番大隊三番中隊 隊長 高 城 七 之 丞
- 三番大隊十番中隊 隊長 阿 多 壯 五 郎
- 六番大隊六番中隊 隊長 赤 崎 直 記

五番大隊五番中隊 隊長 園田武一

計 五個中隊

御船方面 指揮官 坂本仲平

一番大隊十番中隊 隊長 坂元仲平

三番大隊一番中隊 隊長 山本彦次郎

四番大隊五番中隊 隊長 日置吉左衛門

五番大隊二番中隊 隊長 村田經編

五番大隊六番中隊 隊長 成尾哲之丞

五番大隊十番中隊 隊長 塚田十右衛門

熊本 隊長 池邊吉十郎

協同 隊長 有馬源内

計 六個中隊 六個小隊

薩軍の隊制は、斯様に分けられたが、敗餘の兵力としては、存外に強く、士氣の如きも、更に衰へた點の見えないのは、流石に、薩南の健兒を、中堅として、これに加ふるに、肥後、日向の二州に跨つて、士族の粹を抜いたこと、單に陣形の上から視ても、堂々たるものであつた。

これに對する、官軍の兵力は、何うであつたか、といふに、本隊の四個旅團と、別働五個旅團、それに、熊本鎮臺の兵を加へて、總計一百七個中隊、其人員三萬とは、聞いた丈けでも、大層なものだ。

二

人吉方面に於ける、官薩兩軍の勢力は、前述の通りであるが、此方面の戦鬪が、薩軍の參謀連が、考へた通り、充分に防戦が出来たならば、或は、熊本の敗戦を取返して、面白い戦ひになつたかも知れないが、然し、熊本に破れて、人吉に勝つ、といふ事は、數理の上にて、既に能はざる處であつて、只、幾日、長く防戦が出来るか、といふの問題で、勝敗の争ひでは、なかつたのである。

備し、此方面の戦鬪を、詳しく述べたならば、夫だだけでも少なからぬ分量になるだらう、と思ふが、夫は無用な事である。日向方面の戦ひでさへ、長井村以外は、切て略す事に、仕て居る位であるから、人吉方面の戦鬪は、一切略す事にする。

要するに、此戦争は、熊本城を、奪るか奪らぬかに依つて、大局が決するのであつた。熊本城を、奪る事が出来なかつた、といふ事は、薩軍が、全局に於ける、敗北と見て、差支ないのであるから、既に詳しく、其顛末を演べて、篠原國幹の戦死まで、演べた以上は、更に人吉と、日向路の戦ひを、長く演べて居る必要はない。詰まり、此戦争の大眼目とすべき點は、演べ盡したのであるから、只だ、人吉方面の戦ひが破れて、遂に日向方面へ、薩軍は、居を轉じて、回復戦に掛つた、といふまでに、止めて置く。

薩軍の本隊の事は略して、別働隊の事に付いて、簡單な説明を、仕て置かう。日向方面の戦ひに於て、最も能く奮闘したものは、飢肥、佐土原、延岡、高鍋、福島、都城の各隊である。先づ飢肥の事から述やう。

飢肥は、極めて小藩であつたが、其藩士には、却々、奇抜な人が、多く出た。中にも、飢肥隊の首領、小倉處平といふ人は、立派な人物であつて、昔、神田の護持院ヶ原に、現在の帝國大學の前身たる、大學南校が、出来た時分に學監を、仕て居たのが、此人であつた。風采の堂々たる、立派な見識を、有て居た人であつた。其頃の人として、殊に、稀らしいのは、經濟とか、教育とか、いふやうな事に付いて、専門の知識を有て居た事である。早く洋行して、歸つて來てから、或は英國租税年報とか、或は英國地方條令とか、いふやうな翻譯書も、出した位で、只徒らに、頑固な頭を以て、時勢を見て居た人ではない。外務大臣に、なつて死んだ、小村壽太郎の如きは、此人に引立てられた一人で、大學南校にて、諸藩の貢進生を、募集した時分に、小村は、小倉の選抜に依て、入校したものであつた。江藤新平が、佐賀の亂に敗れて、一度、鹿兒島に落ち込み、更に轉じて、日向へ、入つた時、恰度、小倉が、飢肥へ歸つて居たので、豫て深交のあつた事として、小倉は、江藤の爲に、非常な便宜を計つて、油の津、といふ所まで送つ

て行つて、自ら船を求めて、江藤を逃がした、といふやうな、美しい話もある。夫が爲めに、小倉は、百日の禁錮に處せられた。雖然、政府は、小倉の才を惜んで、然うした前科が、あつたにも拘らず、大藏省の七等出仕に、採用したのであつた。

政府に、仕へては居たが、小倉は、仍且、不平を懐ひて居た。従つて、交際する人が、然ういふ側の者ばかりで、遂に明治九年頃、彼の陸奥宗光、大江卓、林有造等の計畫した、叛逆の仲間入を仕て、漸々、夫が進んで行く中に、大江と、意見の合はぬ事があつて、神戸に於て、衝突を仕た結果、其仲間を脱して、國へ歸つた。其時は、西郷が、既に兵を擧て居た時であつて、豫て自分が、推服して居た、西郷の事であるから、直に同志を集めて、之を援ける事になつた。

二二

小倉が、九州へ、歸る時に、面白い事があつた。何しろ、前に江藤を逃がした、といふ罪はあつたし、今度、故國へ歸るにしても、辭職して歸るのであるから、政府の注意が、如何にも嚴しい。西郷の擧兵に付いて、政府は、殆んど血眼のやうになつて、有志の行動に就いては、注意して居たのだ。殊に、小倉の如きは、最も危険と認められて居たから、容易く國へ歸る事は難かしい。恰度、其時分に、京都へ來て居た、伊藤博文を訪ねた。伊藤は、當時の參議で羽振が宜かつた時分であるから、既う此時には、政府部内に於ても、一勢力として、認められて居たのだ。

「應、小倉か、何しに來居つた」
「彌々、御承知の如く、辭職を仕ましてな」
「うむ、然ういふ話ぢやが、最早少し、辛抱仕居れば、可いに……」

「いえ、國許に、少し心配事が出來て、何うしても、認めなきやならぬので、認めたのぢやよ」

「は、あ、何ういふ事が出來たのか」
今度、西郷大將の擧兵に付いて、吾輩の生國たる、日向方面が、大分動搖して居るやうぢやから、萬一、此擧兵に與するやうな事があると、一大事ぢやに依つて、之から急行して、國へ歸つて、鎮撫をしよう、と思ふが、夫には職を辭して行かなければ、何うも萬事に、都合が悪いから、已む事を得ず、辭職したのぢや。事が了つたら、舊職に復したいと思ふから、夫だけは、含んで居て貰ひたい。

「そりや宜いとも、然し、それは、特志な譯で、政府も、非常に助かるよ」
「然し、茲に一つ困つた事は、何うも道中が、却々、警戒が嚴重で、夙く歸國する事が出來まい、と思ふ。此事は、一日後れれば、一日の不利になるのであるから、一刻も早く行きたい、と思ふが、實に弱つて居る所ぢや」

伊藤は、膝を打つて、
「よし、然ういふ事情ならば、俺が、證明を仕てやらう」
「そりや、有難い、是非一つ頼む」
乃て、相談が出來て、伊藤は、眞に小倉が、士族の鎮撫を、仕て呉れる、とのみ心得て、戰地通行の上に、非常に便利を、與へる事になつた。

伊藤の書面に依つて、小倉は、安々と、日向へ、歸る事が出來た。然し、日向の地へ入ると、同時に、伊藤へ、書面を贈つた。其書面には「折角、御厚情に依つて、歸國は仕たが、拙者の志は、西郷隆盛と共に、政府を改造せんとするにある。決して、今の政府の爲に、犬馬の勞を執るものではない」といふ事が、認めてあつたので、了得の博文も、眼の色を變へて怒つたが、既う欺かれた後で奈何ともする事が出來なかつた。

小倉は、初め、武術ばかり磨いて、書物は、讀まなかつた人であるが、江戸に出て、安井息軒の塾に入つてから、

讀書の味を覚えて、夫からは、殆んど寝る時間を節して、讀書に耽つた、といふ位であつた。

薩軍は、熊本に破れ、人吉に破れ、而して、日向方面へ、出て来た時分には、形勢、日に縮まる、といふやうな譯であつたが、小倉は、少しも之に怯まず、仍且、勢力のあつた時と同じく、平然として、能く戦ひに努めた。或人が、事、茲に至つては、最早致方がないから、官軍に降伏して、西郷或は桐野と、いふが如き、稀世の人物は助けて置きたい、といふ事を、頻りに小倉に迫つた、雖然、夫を斥けて、
「西郷大將は、義を、天下に唱へる人であつて、己れ一人の野心の爲に、叛逆を仕たのではない。故に、屍を、馬革に包む事は、始めより期して居た事であつて、今日、勢ひの非なるを見て、俄に降伏するやうな、不面目な事を、爲る人でない。又、我々の如き、西郷大將を、尊信する者は、飽までも此人をして、其名を完ふせしむる事が、大切である。」

といふて、應じなかつたといふ事である、此一事を以ても、小倉の爲人の一斑を、窺ふ事が出来る。
薩軍は、各所の戦ひに破れ、長井村へ追込まれ、官軍に包圍されて、今は、一步も進む事が出来ない。於是、可愛嶽の官軍を打破つて、一度、鹿兒島へ歸る、といふ事になつた。之が、實に稀らしい、白兵戦であつて、其時には小倉も、既に負傷して、弱つて居た。彌々、可愛嶽に迫る、といふ時に、自分の如き、敗餘の負傷者が、從て居るのは、却つて薩軍を、苦しむるに等しい。半年の間、此の寡兵を以て、天下の大兵に當つた、といふ事は、今に至つて、死するも悔む所はない、と、從容として、腹を切つて死んだ。時に年三十二歳であつた。
其他に、永倉訥、川崎新五郎、伊藤直記、石垣直樹、金田徹、佐渡原藤吾、阿滿南八郎、伊藤祐兼、石川駿等の人を初めとして、却々、多數の人であつたが、其の他は、略す事にする。

四

日向の佐土原は、島津の支藩であつて、相當に、世間にも知られて居る、土地だ。明治の始めに、廢藩置縣の事が行はれて、佐土原と、米良の二つを併せて、之を三大區と稱して、鮫島元といふ人が、區長になつた。小祿の人ではあつたが、島津家の一門であるのと、經書に精しく、書を善く仕て居た、といふので、郷黨の人からは、重んぜられて居た。西郷も、此人の爲人を愛して、平生から、能く目を掛けて居た。鮫島の方でも、西郷を慕ふて、殆んど恩師にても、仕へるやうに仕て居た。然るに、彌々、西郷が、兵を擧げた、といふ事を聞いて、舊佐土原藩主の島津忠寛の子、啓次郎といふ人を擁して、途中まで、西郷の軍を迎へた位で、恐らく薩軍の、本隊以外の各分隊として、一番最初に、來り投じたものは、土佐原隊であつたらう。
又戦ひが 酣に、なつた頃、軍費や米穀等の徴發に付いても、此人の盡力は、一と通でなかつた。自ら土地の富豪又は舊藩士を説いて、少からざる金を調達して、贈つた事もあつて、薩軍が、熊本戦ひを過まつて、日向路へ、入つて来た時分に、西郷は、此人を以て、日向方面の參軍に、宛た位である。
元來、薩軍の組織が、本式でなかつたから、切ての機關といふものが、備はつて居なかつた。殊に困つたのは、工兵であつた。今日の陸軍でも、工兵の修行が、却々難かしい。詰まり、一種の土方であるから、之ばかりは、只の兵士を以て、直に宛やうとしても、絶體に、出来ない事はあるまいが、満足な事の、出来る譯はない。殊に、普通の土方と違つて、戦争の場合、工兵は、跡はどうならうと、其戦ひの場合に、味方の都合の宜いやうに、仕事をするのであるから、幾分、戦争に付いての知識も、必要である。乃て、難かしい事に、なるのだ。日向へ来た時は、敗兵を纏めて来たのであつて、餘程、其點に就いては苦しんで居た。然るに、鮫島が、桐野と相談を仕て、佐土原に、監禁されて居た、囚人を、全部解放して、之に工兵の爲すべき事をさせたので、頗る其の効果が現はれた。又、外浦といふ

所に、政府の貯蓄米が、あつたのを、全部、薩軍に提供してしまつた。種々な働きをして、薩軍の爲めには、此人は容易ならぬ助けを、仕たものであつた。

所が、各方面の戦ひが、切て失敗に終つて、遂に薩軍は、長井村へ、逐込まれて了つた。四方八面、總て嶮山峻嶺を以て、圍はれた上に、官軍が、全力を盡して包圍したのであるから、今は、奈何ともする事が出来ない。乃て、可愛嶽の官軍を突破して、鹿兒島へ引揚げる、といふ事になつた。鮫島は、病を得て、進む事が出来ぬので、途中の山奥に潜伏して、八月中旬から、九月中旬まで、殆んど一ヶ月といふものは、食物も、碌に食はずに、匿れて居たが、其内に幾分か、元氣の回復も出来て、日も大分経つた、といふ考へから、山を出て、堤村といふ所へ、出て来た時に、見張を仕て居た、官軍の爲めに押へられて、遂に捕虜となつた。一應、調べの上、長崎の裁判所へ廻されて、十月九日に、巨魁の一人として、遂に斬罪に處せられた。時に年四十四、男盛りの人であつたが、實に惜い事を仕た。

五

佐土原隊の全部は、殆んど鮫島の、指揮の下に動いたのであるが、然し、其内に、嶋津啓次郎といふ人が、加はつて居た事に就ては、述べて置く必要がある。

此人は、佐土原の舊藩主、忠寛の三男であつて、母は、正室でなかつた。之が爲めに、日蔭の身となつて、家來の町田宗七郎と、いふ者に養はれて、其姓を、冒して居たので、世間には、町田で知られて居る場合が、多くあつたかも知れぬ。養父の町田が、極めて厳格な武士であつて、啓次郎は、藩主の侍だ、といふので、之を立派に育てなければ、自分の役が濟まぬ、といふ考へから、随分、厳しく育てたので、子供の時分から、却々、膽玉が据はつて居た。夫は天稟でも、あつたらうが、全く養父の育て法が、良かった爲めである。町田の邸の背後に、氏神を祀つた社があつて、深い山ではなかつたけれど、大樹が森々として、靈驗暗し、といふやうな趣があつた。啓次郎が、七歳にな

つた春から、此山の社へ、日の暮るのを待つて、燈明を懸けに行き、更に十二時頃になると、其燈明を消しに行く、といふ、之が啓次郎の役に、なつて居たのだ。萬事が、然ういふ工合で、養父が、自然に膽力を練らせる、といふ事を努めたので、漸々、成人するに従つて、實に立派なものになつて、十一歳の時に、東京へ、養父に伴れられて、出て来た。未だ西郷が、居つた時分、養父から西郷に、其教育上の事に就て相談すると、西郷は、膝を打つて、

「そりや、良か人がある。俺が紹介してやらう」

此一言に、養父も喜んで、

「そりや、怎ういふ人で、ごわすか」

「勝先生で、ごわすよ」

「は、ア、有名な勝安房先生で、ごわすか」

「然うぢや。ありや、俺から頼めば、必ず引受けて呉れるから、俺に任して、啓次郎どんな、置いて行かつしやい」

西郷が、引受けて呉れたから、養父は喜んで、啓次郎を、託して歸つた。其跡で、西郷から、勝に話したので、勝も、他ならぬ西郷の頼みではあるし、殊に、島津家の支藩たる、佐土原の若殿と、いふのだから、立派に仕込んで見よう、といふ氣になつて、快よく取受た。

然るに、其腕白さ加減と、いふものは一と通でなく、何うにも斯うにも、手の付けやうがない。他の門生や家人が、種々、不平を言ふと、毎も、勝は開流して、別に叱言も言はず、其行ひに付いて、差圖がましい事も仕ないで、勝手にして置いた。或朝、例の通り、勝が、早起きをして、書齋に入ると、庭の方で、エイヤツと、いふ聲と共に、何か切つて居るやうな、音が聞えるから、窓を開いて見ると、庭の端にある、杉の立木を自菟て、啓次郎が、體より大きい刀を揮つて、切付けて居るのだ。十二や三の小僧だが、如何にも其の姿勢の正しいのと、呼吸の宜いので、思はず勝が、窓格子を打つて、

「其處ぢや、其呼吸で踏込んで、ソレ、其處ぢや」と、聲を掛けるので、夫に伴れて、啓次郎は、益々、大刀を揮つて、杉へ切付ける。家の者は、之を見て、呆れ返つた。

「先生が、一緒になつて行るのだから、那の小僧、却々肯かないのも、無理はない」
遂に誰一人として、敬次郎の對手に、なるものは無なつて了つた。

夫から、二三日すると、敬次郎は、馬小屋の前へ来て、
「馬丁、馬丁……」

頻りに招んだけれども、馬丁は、悪戯小僧が、何を吐すか、といふやうな顔をして、空體を走らせて、返辭も仕なかつた。敬次郎は、焦かしく思つたか、馬小屋へ飛込んで、来て、突如、繫いてあつた馬を牽出した。おや、妙な事をする、と思ひながらも、馬丁が見て居ると、懸て、鞍もない裸馬に、ゆらりと跨つた。其動作の敏捷なものには、追の馬丁も、驚いて見て居る中に、鞭を加へると、表門から、ドン／＼と駈け出した。斯うなると、馬丁も捨置けないから、跡から續いて飛出した。早い早くないのツて、どん／＼責めて、馬を走らせる。其内に、敬次郎の影を見失つて、馬丁は、空しく歸つて来た。夕方になると、敬次郎は、歸つて来たが、馬は、ビツシヨリ汗をかいて、如何にも勞れた、といふ體が見えるが、乗つて居る、敬次郎は、平氣な顔をして、小屋の前に、馬を乗捨て入つて了つた。暫時すると、門前にワイ／＼、人の聲が聞える。門番が、出て見ると、三四十人の人が集つて、騒いで居るから、
「汝達は、何だな」

「何だぢやねえ。今、此門の中へ、入つた小僧さんが、私等の町内の者を蹴飛ばして、何の挨拶もなく、歸つて行くから、追つ駈けて来たから、此門の中へ入つたので、騒いで居るのです」
「えッ、そりや、飛んでもない事だ。然し、ありや、此のお郎の若様ぢやなし、預かり者の腕白小僧だから、懸け合

つた所で、仕様がなからうよ」

「冗談言つちや可けれえ。人一人、踏倒して置いて、懸け合つた所で仕方がない、とは、何て言草だ」

ワイ／＼言つて、騒ぎ出したから、門番も堪まらない。内玄關へ来て、用人に、此話を仕たから、用人は、早速、勝の前へ出て、始終の話をすると、

「いや、小僧、却々やり居るな。然し、面白い奴ぢや。踏まれた奴は間拔だから、然ういふ事になつたのだらうが、豈夫に、其儘にも捨置けまいな」

考へて居た、勝は、懸て、若干の金を出して、之を用人に渡した。
「貴様、之から先方の家へ行つて、能く説を言ふて、夫を薬代として、渡して来い。若、怪我が甚いやうなら、此方

から醫者を、向けてやる事にするから、能く説て来るが、宜い」
用人も驚いた。疎勿は、小僧が仕て、詫まりには、自分が行くのだ。斯様満らぬ話はない、と思つたが、今更に仕

方がない、澁い顔をして出かけた。

六

啓次郎の生立は、斯ういふ調子であつたから、勝も、實は心樂みに、其成人を、待つた位であるが、併し、昔の武家全盛の時代と異つて、今のやうな世の中に、只、豪放磊落な、昔流の豪傑肌といふばかりでは、將來の見込が立たぬ。乃て、西郷と、相談した上で、啓次郎を、洋行させる事にした。夫が、明治三年の事で、年齢僅かに、十三歳の時であつた。

斯て、啓次郎は、米國へ渡つて、學問の修行を始めた。元來が、利巧な性質であつたから、夫からといふものは、一心になつて、學問を勵んだ。歲月は、流るゝが如く、早六年の長きを、亞米利加に過ごして、明治九年に、日本へ、

歸つて来た。極端に、個人主義が發達して、寧ろ放任に近い、自由主義の行はれて居る米國で、修行を仕て来た、啓次郎が、日本へ歸つて来ると、未だ封建時代の氣風が、多く残つて居る、日本の社會であつたから、見るもの聞くもの、總て自分の心に、充たない事ばかりだ。殊に、政府が、無上の權利を握つて、人民を壓制する事の甚だしい、有様を見ては、逆も、黙つては居られない。恰度、其時分に、板垣が唱へた、國會開設の請願、夫に、自由民權の議論といふものが、彌、勃興して来た時であつて、啓次郎も、頻りに夫に相和して、人民の爲に、政府の壓制を、攻撃して居たものである。

當時の政府には、大久保利通が在つて、殆ど政治の實權は、此の人の手に、握られて居たのであるから、若、啓次郎が、洋行歸りて、澄まして居たら、重く用ひられたかも知れぬが、斯うした調子で、殆ど無遠慮の行動が、多かつた爲に、大久保のやうな、謹嚴にして、保守的の風を帯びて居た人は、甚だ喜ばなかつたのである。自然、啓次郎を、疎んずるやうになつて来た。従つて、啓次郎も、甚だ面白くなく思つて、東京を去つて、佐土原へ、歸つて来た。西郷の私學校に倣うて、廣瀬村の宇天神といふ所に、昌文、豊といふ、私塾を開いて、自ら教鞭を執つて、土地の子弟を、養ふことになつた。忽ちにして地方の青年が、集つて来て、昌文、豊は、日に繁昌を、極めるやうになつた。切て亞米利加風の自由教育で、頻りに民權論の、鼓吹に努めた。若、之が、少くも三年位経つたならば、大した勢力に、なつたであらうが、惜哉、翌十年の春には、西郷が、旗上を仕て了つたので、昌文、豊は、未成品に終つて了つた。

區長の鮫島が、訪ねて来た、彌、西郷が、兵を擧げたに就て、其味方を仕やう、といふ事を、相談を仕した時に、啓次郎は、手を拍て喜んだ。直に檄を飛ばして、二百餘名の壯士を率ゐて鮫島と共に、鹿兒島へ行く途中で、西郷に出會を仕した。佐土原の舊藩主の令息だ、といふので、薩軍の人も、疎そかな扱ひは仕なかつた。西郷は、之を聞いて、啓次郎に面會すると、既う戦争の準備を、仕て来て居るのであつた。

「ヤア、貴下は、俺どんな仲間に入れ申す譯にやならぬ」

「そりや、何故か」

「貴下は、忠寬侯の若様であつて、年齢も、未だ漸う二十一、之から大に修行して、他日、我國の爲に盡して呉れなければならぬ。お伴れ申す事は出来ぬ」

啓次郎は、甚だ不満な顔をして、

「他日、國家の爲に盡すと、今、國家の爲めに盡すと、何れだけ異うかな」

有繋の西郷も、之には直ぐに、答へられなかつた。

「啓次郎は、武士でござすから、一度志を決して来た以上は、此儘には歸らぬ。然し、貴殿が、俺どんを仲間に入れぬ、といふなら、俺どんな、俺どんの欲する所を、爲るのであるから、強て仲間に入れぬでも、可か」

斯う言はれて見ると、奈何とも仕様がなない。啓次郎の決心が、茲にある以上は、西郷は、止むを得ず、之を迎へる事になつた。

斯て、啓次郎は、各所に轉戦して、九月二十四日、城山が陥る日、潔く彈丸雨注の間に、討死して了つた。

七

地方へ旅行して、大きな宿屋へ泊ると、よく秋月種樹といふ人の書が、額に成つたり、懸軸になつたりして、居るか、此人は、日向の高鍋藩の若様であつたのが、後に明治政府に、仕へる事に、なつて元老院議員から、貴族院議員などを経て、明治三十七年に、故人となつた。旅行好きの洒落な、誠に面白い人であつた。其弟の種事と云ふのが、所謂、高鍋隊の首領なるものであつた。風采は、極めて立派な人で、天然痘を煩らうた爲めに、顔は美しくなかつたが、どこことなく、ゆつたりとした人であつた。天性た殿様風はあつたが、人に接して、誠に應接の好かつた人で、

戦争も巧みであつたから、西郷の信用も、却々深かつた。區長を勤めて居た、武藤東四郎を初め、石井卓巳、財津吉市、神代勝彦、水町實武、泥谷直養等、二百餘名の者を率ゐて、最後まで奮闘を仕て、遂に城山で、西郷と共に、戦死を仕て了まつた。

其他に、延岡隊と、いふのがあつた。之は其隊名が、示して居る如く、延岡舊藩の人を以て組織したので、藁谷英孝といふ人が、首領であつた。舊藩の时分には、僅に百五十石の知行であつたが、併し小藩の家來としては、百五十石は、多い方だ。武家時代の教育を、受けた人として、無敵流の劍術は、免許皆傳であつた。幕府が倒れて、明治政府になつた時分、延岡藩の少参事になつた。後、廢藩置縣が行なはれて、宮崎區の大屬官になつた。明治十年になつて、鹿兒島縣の二等屬になつて、宮崎支廳長を、命ぜられる事になつたが、西郷崇拜の一人であつた。彌、擧兵の事を聞くと、自分は無論、之を助ける事に、決て居た。所へ、桐野から使があつたので、延岡方面の事は、兵士の募集から、軍費の徴發まで、此人の手で、一切を受持つたのである。或は富豪を説いて、出金を爲さしめたり、或は自分が、支廳長である爲に、租税を徴集する、權利を有つて居たから、夫を名として、取上た金なども、多く軍費に提供した。其他、米穀類に至るまでを換算したならば、恐らく數萬圓の高に上つたらう、と思ふ。

薩軍は、奮闘の效もなく、熊本、人吉に破れて、日向方面へ、落込んで來て、七月下旬には、最早可けなかつた。延岡の戦争が、薩軍の大敗となるや、藁谷は、官軍の捕虜となつた。其後、十年の懲役に處せられたが、出獄の後は、鎌倉の扇ヶ谷に住居して、晩年を、樂に送つた。藁谷を助けて、延岡隊の働きをつけたのは、區長を勤めた、塚本長民と、鹿兒島裁判所宮崎支廳の、裁判官を仕て居た大島景保の二人である。其他、二百名餘りの兵士を糾合して、能く戦ふたけれども、遂に敗れて、其多くは討死をしてしつた。猶う一つ、都城隊の事に付いて、簡単に述べて置かう。都城隊は、都城の方面の人が、多く集つて、組織を仕たから、其名が出来たのである。吾妻胤正、龍岡資時、彌藤重邦の三人が相計つて、二百餘名の同勢を糾合して、之を都

城隊と稱して、薩軍に投じた。集つた人達は、立派な人物ばかりであるが、其の中に就いて、殊に満木清雄といふ、人物があつた。當時の事を書いた物には、薩軍は、只強いばかりのやうに書いてあるが、却々、さうではなかつた。此の満木の如き、慈悲深い人もあつた。序に述べて置くが、此の人の弟の、清繁といふのが、彼の思案橋事件に、關係のあつた、有名な人である。三田井といふ所の、戦ひの時に、官軍を破つて、一時、都城へ、引揚る事になつて、途中、小林といふ所を通ると、兵卒が一人、負傷を仕て倒れて居る、といふから、清雄が、近寄つて見ると、福岡の者で、官軍の人夫であつた事が分つた。清雄は、深く之を憐んで、旅費を、五圓慰んで、戸長を招び、療治の事を託して、やつた事がある。久米といふ所でも、仙臺の鐘臺兵の一人が、重傷を負ふて、或民家に、潜伏して居ると聞いて、之も、戸長に申付て、充分の手當を仕た上、五圓の旅費を與へて、放してやつた。小さい事のやうではあるが、薩軍の中には、斯ういふ美しい事を、那の烈しい戦ひの最中に、仕たものが多數にあつた。今は只、満木に就いてのみ、之を述べて置くのだが、強い裡面に、温情の溢れるやうな點も有た、といふ事を、認めてやらねばならぬ。

八

別に又、福島隊と、いふのがあつた。秋月藩の舊領に、屬して居た、小さいものであつたが、廢藩置縣の後には、鹿兒島縣第十六區として、獨立する事になつて、區長に擧げられたのが、阪田諸潔と、いふ人であつた。薩軍が、日向に破れて、城山へ、引上げる時分に、主として降伏論を唱へて、西郷を救はう、としたのは、此阪田であつた。其説は、遂に行はれなかつたが、最後まで、西郷の爲めに、何とかして、之を救はうと仕たのは、感心なものであつた。阪田が、城山陥落の當時に、飽迄も降伏を、主張した事を以て、恰も臆病武士なるかの如く、いふ人もあるが、夫は、大いなる過まりであつて、阪田が、長崎で、首を切られる時の、事を知つたなら、決して、然ういふ評は、出来ない譯である。刑場に臨んだ時、ふと見れば、自分の同志の一人、後藤純平が既に斬られて、血に染んだ、死骸が、其處

に倒れて居た。阪田は、之をジロリと見て、

「應、後藤か、貴様の方が、一足早かつたのう。俺も、今行くから、急がずと、待つて居れよ」

と、一言残して、從容、死に就いた。目隠を仕やう、とした時にも、大丈夫たるものが、死に臨んで、爲れた法ではない、といふて、之れを拒んだ。前後の態度の、落ち付いて居たのを見ても、死を恐れるやうな人ではなかつた。

城山の一事は、西郷を、生して置きたい、といふの考へから、一意、夫に努めたのである。

戊辰の當時、高鍋隊が、奥羽征討に、向つた時、阪田は、先鋒の一人であつた。然るに、米澤藩の去就が、明かでない所から、非常に疑はれた。阪田は、之を憂へて、後の貴族院議員、岩村兼善と、共に使節となつて、米澤藩を説いて、遂に降伏させた。之が爲めに、米澤藩は、事なきを得た。何故、米澤藩の爲めに、斯う努めたか、といふに、

高鍋の藩主と、米澤の藩主とは、血族の關係があつたから、夫て阪田は、盡力を仕たのであつた。

此の人は、叛逆氣のあつた人で、此の戦争の前に、もう一度、同じやうな事で、牢へ入つて居る。明治三年に、愛宕通旭卿の、叛逆に與して、牢に繋がれた。夫は、どういふ逆叛であつたか、といふに、第一が、帝都を、江戸へ移した、といふ事が、不平であつたのだ。公卿としては、此の不平を有つのは、無理もない譯であるが、愛宕は、却々武人肌の人であつたから、憤慨ばかりでは済まなかつた。第二は、薩長の二藩が、専斷に過ぎると爲し、夫に對する不平もあつたのだ。事が顯はれて、斬に處せられたが、阪田は、間もなく、出獄の恩典に、浴する事を得て、國へ歸り、秋月家の家令となり、明治九年には、前に述べたやうに、福島區長となつた。長崎へ來て、斬られた時が、年僅かに三十三歳、實に惜いものであつた。其の辭世の歌に、

皇國の御代を守りの我君は

身の私にはつるものかは

萩、在獄中に、澤山の詩を遺したが、其中で、今に傳はつて、書生の口に、屢吟せられるのは、この一首である。

英雄不問死生道。自安天命盡忠誠。節操不礙松千歲。永留秋天霜月明。君不見吳王山下范蠡志。魂留櫻花千秋清。又不見淡村夜月讀書會。遂驅豺狼安皇京。微臣雖賦聊知體。戊辰之後從東征。曾設奇策奏功績。恩賜如山臣子榮。光陰如矢十紀消。正氣漸微朝威輕。豺狼又起紫雲暗。蒼生不堪徒痛情。嗚呼男子多疾視。慨然學事事不成。空受賊名雖被誅。千歲青史待公評。

九

豊前中津の藩士で、増田宋太郎と、いふ人があつた。此人は、奇抜な腹巻を、有た人であるが、西南役には、中津隊といふのを、率ゐて居つて、昔は、中津の藩主、奥平侯の世臣であつた。渡邊重石丸と、いふ人の塾に入つて、和漢の書籍に、眼をさらして、十四五歳の時分には、最早、渡邊塾に於て、此人の上に、出るものはなかつた。然れば幼少の頃から、神童の名を得たのであるが、世間並の神童は、多く物心を、覺える頃になると、駄目になるものであるが、宋太郎は、然うでなかつた。

慶應二年、二度目の長州征伐の時分に、毛利藩が、却々の勢ひで、飽迄も、幕軍に對抗する、といふので、幕府の方でも、たつた一つの、毛利藩に、負けた日には、その威信にも、關する事であるから、非常に苦心を仕た。殊に、馬關海峡を隔て、九州と相對して居る關係から、九州の諸侯が、毛利を助けるやう、になると、由々敷大事である。小倉には、小笠原があつたけれども、毛利を押へるには、力が乏しかつた。其處で、森川主税といふ人が、軍監として、幕府から、特に派遣され、小倉藩の人を案内者として、彼の附近の、諸侯を説く、といふ事になつた。森川が、中津にも、やつて來て、奥平侯を説付けやう、といふのであつたが、其時に、宋太郎は、辛と十八歳に、なつたばかりで、既に妻帯して居て、既う一人前の武士で、どん／＼押渡つて居た。妻の兄、富永宗五郎と共に、藩の重役に會ふて、

「此度の長州征伐は、甚だ理由のないものであつて、毛利に、幕府へ對する、罪狀が有るとしても、其事は、既に最初の征長軍の時、決して居るのである。然るに、今に至つて、再び毛利を攻める、といふ事は、甚だ理由のない事であつて、之は、毛利家が、勤王攘夷の議論を唱へて、幕府に對抗した爲めに、幕府が、非常な窮境に、陥つた事がある。それを含んで、殊更に名義を拵へて、此の征長軍を、起したものと云ふ。毛利は今、孤立の有様であつて外から見れば、且夕を計り難き窮境ではあるが、併し、其藩士には却々の人物があるから、恐らく今日の窮境は、長く續くまい。近中には、必ず以前の、順境に返つて、毛利は、勤王の大義を、眞向から振翳して、幕府と争ふに違ひない。我國體より考ふるも、勤王の大義を以て起つといふのは、我藩が、將來に探るべき道である。依て考へるに、今の場合に、毛利藩を助けぬまでも、之を討つ、というやうな事は、宜しくない。森川某に對しては、明かに大義名分の、存ずる所を説いて、出兵を拒絶するが宜い。若し、藩論が茲に決して、征長軍を助ける、といふ事になれば、身不肖ながら、宋太郎は、藩命に抗して、森川某を斬り、長州に走つて毛利を援けるかも知れぬから其お覺悟で、幕府に對する、藩論を、決して貰ひたい」といふ意見を、正々堂々と唱へて、遂に重役を動かして、中津藩は、征長軍に、加盟を仕ない事になつた。斯ういふ事は、今日より考へれば、何でもないが、當時の狀態から思ふて、十八歳の青年が、容易に爲し得る事ではない。宋太郎は、確に奇傑の士であつた、と思ふ。

一〇

此増田と、福澤諭吉の間に、面白い物語がある。福澤は、既に世人の知る如く、夙に洋學の鼓吹を努めて、慶應年間に、芝の新錢座に、私塾を開いたが、夫を慶應義塾と稱し、今日では、三町の舊塾に移つて、益々、盛になつて居る。那の塾舎を、創めた人であるが、其の福澤と

此増田が、従兄弟になつて居る。福澤は、夙から、大阪に出て、緒方弘庵の塾で、蘭學を學び、夫れから洋行して、歸つて来て、今日の言葉でいふ、極端な灰殻であつた。然るに、増田の方は、和漢の學は、充分に修めて居るが、西洋の事は、少しも知らない。極端な攘夷論を、唱へた人で、殺伐な氣風でもあつた。福澤が、頻りに西洋にかぶれて異人の學問を弘め、異人の風を、日本へ移さう、として居る、と聞いて、甚だ怪しからぬ事だ、と思つて居た。折柄福澤は、慶應義塾の、基礎も立ち、自分の一身も、獨立仕て行けるやうに、なつたから、兼ての宿望であつた、母を迎へる爲に、歸國を仕た。之れを聞いて、増田は、心竊に喜んだ。此の機會に、福澤を、斬つて了はう、といふ、恐ろしい事を考へた。福澤は、然うした恐ろしい企てが、自分の従弟に依つて、起されて居る、といふ事を知らず、暢氣な顔を仕て、逢ふ人毎に、持説を吹込んで、盛んに灰殻を、振廻して居た。

増田は、今日こそ、彌、渠の宿所へ、斬り込んで呉れやう、と、夜になつてから、窃と、忍んで来て、家の様子を窺ふと、知己の服部五郎兵衛と、いふ人が来て、頻りに話込んで居るから、斬り込みやうがない。據らなく、服部が歸るのを、待受けて居たが、珍らしい西洋の話を、聞かされるので、服部は、うんと、御輿を据て、聞込んで居る。垣根の蔭に匿れて、待つて居る、増田は、頻りに焦つて居るが、今、斬り込めば、罪も科もない、服部まで、斬る事になり、而して、目的を遂げ得ない事になれば、不面目でもあるから、空しく服部の歸るを、待つて居る中に、漸次、夜は更けてゆく。到頭、服部は泊る事になつて、二人は、枕を列べて、眠て居る様子であるが、然し、話聲は、外に洩れて来るから、寢物語で、西洋の話を、仕て居るのだらう。道の増田も、遂に我を折つて、夜の明け方に、引揚げて了つた。

翌朝になつてから、服部が、福澤に向つて、
「昨夜は、話さずに居たが、垣根の外に、變な奴が、隠れて居るやうで、之は怪しい、と思つたから、態と泊つたのである。夜の明け方に、窃と覗いて見たら、仍且、刀を差した奴が、家の様子を、窺がつて居たやうである。此先

共に、随分、氣を付けなざるが、宜からう』

と、いはれて、福澤も、

『然う言はれて見れば、此間中から、何となく變な尊を、耳に仕て居た。然ういふ者を、對手に仕て争ふのは、猪武者のする事である』

と、拜金宗の御開山だけあつて、其日の内に、中津を引揚て、東京へ逃歸つた。

其後、増田は、何としても、一度は、福澤に面會して、充分に意見を、戦はして見やう、といふ考へになつて、迥と、東京へ、出て來た。福澤の方でも、固より従弟同志ではあるし、子供の時分から、評判の奇才士であるから、心を許して、自分の家に泊て、少しの隔てもなく、打解けて語つた。處が、話して居る中に、何時か、福澤の説に、増田が、服して了つて、今まで自分が、持て居た考へは、極めて時勢に後れて居た、といふ事を覺つた。話の都合に依つては刺さう、といふ位の考へは、あつたのだが、夫を捨て、暫時、福澤の許で、西洋の事を學ばう、といふ心になつた。福澤も、増田から、修行を仕て見たい、といふ事を聞いた時に、大層喜んだ。暫時、離れて居て、増田が、何ういふ人物になつたか、といふ事は、少しも判らなかつたのだ。只、中津の舊藩に於て、青年の首領として、却々勢力もあるが、惜い事には、和漢の書は、學んで居ても、世界の事には、遠ざかつて居て、守舊主義の人である、といふ事だけは、知つて居たから、此人を、巧く感化すれば、中津の青年の頭が、改まる譯にもなる、と思つて、増田の爲めに、教鞭を執つた。一度は、竊に殺さう、といふ考へて、夜明し迄仕て、尾狙つた事のある、増田としては、何となく氣が咎めてならぬので、或日、福澤に、其事を打明けて、

『何とも、那の時は濟まなかつた』

と、いふて詫ると、福澤も、額を押へて、

『いや、之れは驚いた。那の時に、垣根の外に居たのは、汝ちやつたか』

『如何にも、俺だつた』

『さては、危い事であつた』

といつて、大笑ひに笑つた、といふ事である。新舊思想が、入變る時代には、往々、斯うした珍談がある。

一一

豊前、豊後の人は、利害を知る事に敏くして、死生を賭して、名分の爲めに、其終りを潔ふする、といふ風には乏しかつたやうだ。然し、夫は大體に於ての事で、時としては、異つた人物も出て來る。現に、増田宋太郎の如きは一般の土風に、異なつた人であつた。十年の役には、幾分か、中津の青年を、誤つた點もあるが、夫に依つて、中津の土風を傷つけた、といふ事はなかつた。元來が、和漢の學に深く、其後に、英學に志し、明治の初年に、國際上の出來事に付て、何時も、日本の外交が、失敗に歸するのを見て、頻りに憤慨して居た、一人であつた。常に人に語つて言ふには、

『今日に於て、我日本國の、最も寒心に絶えぬものは、外交である。今後の我國は、夫に付て、深く心しなければならぬ。就ては國民の心を一致させて、即ち學國一致の力を以て、外國に對抗しなければならぬ。政府の状態を見るのに、獨り薩州人が、其勢力を張て、恰も徳川封建の時代と、異らぬ状態であるのは甚だ宜しくない。薩州人にのみ、國家の大事を、委ねて置くのは、頗る危険である。苟くも此の點に氣の注いたものは、宜しく進んで、薩州人を排斥しなければならぬ』

といふやうな、説を吐いて居たが、其の後、屢、中央に出て、段々、知名の人に會ふて、一般の事情に、通じて見ると、大分、自分の考へとは、異つて居る點のある事を發見して、豁然として、昨日までの説を抛つて、夫から、といふものは、薩州人を中堅として、夫に依つて、國威の發揚を計らなければならぬ、といふ説になつた。けれども、最

初の考へを、有た時分に、各地を遊説して、薩州人排斥のみならず、場合によっては、薩摩征伐と、いふやうな意氣を以て、同志を集めた事もあつて、存外、其の團結が、強く出来たので、今、自分が、此の説に變じたのだから、事が露顯して罪を問はれるよりは、自ら進んで、其の事實を、明かにした方が、宜いといふので、明治六年五月、其筋へ自首して出た。之に依つて、六ヶ月の禁錮に處せられた、といふやうな事もあつた。

此の一事から考へても、増田は、全く國家を愛ふる、眞の志士であつたに、違ひない。出獄の後も、鹿兒島に入つて、桐野利秋などに面會して、段々、説を闘はして居ると、自分の意見と、同じ點があるので、遂に薩州人と、事を共にしよう、といふ決心になつた。それから、中津へ、歸つて來ると、間もなく、臺灣征討の議が、政府の間に起つて、既に出征の準備が出来た、といふ所から、先年、征韓論を唱へて、意見が行はれなかつた、不平の連中が、一時に沸騰して、民間に於ても、嚴しい議論があつた。政府に於ても、木戸孝允は、夫が爲に、職を辭す、といふ事になつた。増田は、此際に、共愛社といふ、一の團體を造つて、國民の意見を發表する、機關に仕やうと仕た。當時は、板垣退助が、土佐に、立志社を起して、活動して居た時であるから、此事を、遙に聞いて、その社員を、中津に送つて、共愛社の發達を祈り、將來の提携を約した、といふ事である。

夫から續いて、人民に、國家の事を思はせるのは、學校を起して、國の状態を知らしめ、併せて、大義名分の存する所を覺らせるのが第一である、といふ考へから、皇學所といふものを起して、教育に、従事した事もある。進んでは、田舎新聞といふのを起して、自ら社長兼編輯長となつて、侃諤の議論を吐いて、屢、政府に刺撃を、與へた事もある。其前後の、増田の活動は、實に目覺しい者であつた。然るに、彌十年になつて、西郷が、事を擧げた、といふ事を聞いて、之に走せ加はつた。

今日の事として視れば、何でもない事であるが、その當時に於て、斯うした考へから、教育の普及に努めたり、新聞を起したり、又は、今日でいふ、政黨の如きものを造つて、輿論の喚起に努めたのは、實に感服す可きものである。時事を憤慨して、所を急いだ爲めに、可惜壯年の身を以て、空しく幽冥の客と、なつたのは悼む可きの限りである。

一一一

増田が、中津隊を、組織する時分に、相談對手となつたのが、後藤純平と、いふ人であつた。此人は、豊後の大分那の出身で、父は、馬飼を業と仕て居た。出身は、斯の如く卑しかつたが、讀書の素養が深く、辯論に、長じて居た人で、殊に智略に富んで居た、といふのが、當時、郷黨から推されて、重きを爲した所以である。明治三年三月、日田縣の農民が、納租の問題に付いて、一揆を起した事があつた。其時の檄文は、此人が起草したもので、夫が爲に、懲役十年の刑に處せられた。併し、六年になつて、親を養ふには、自分が、入獄して居ては、難かしい、といふので、收贖金を納めて、出獄を仕た。其時分の法律には、寛大な點が在つて、未だ然ういふ事が、出来たのである。出獄の後、法律を學んで、代言人となり、中津に出て、人權擁護の爲めには、頗る盡力した。増田との交際は、夫からである。身體は、極小さく、身長の如きも、五尺に満たなかつたが、風采は、極めて宜かつた人である。城山の陥落と共に捕虜となつて、長崎で、斬刑に處せられた時、年僅に二十八歳であつた。辭世の歌に、斯ういふのがある。

かゝりける浮世の雲の晴ゆきて

いまはの空にすめる月影

後藤と共に、増田を助けた人が、猶う一人ある。梅谷安良と、いふ人であつた。出生は中津で、奥平家の世臣であつた。後藤とは性質が異つて居て、極めて強い、偏狹の人であつたが、併し、意志は堅く、虚偽の言行は無かつた。眞情流露、何事も、至誠を以てした人で、實に立派な人物であつた。

咲く花の數ならぬとも香はしさ

名を立てこそ散らまほしけれ

この歌に依つて見ても、其の心の立派な事は、想像が出来る。増田が、此二人を参謀として、中津隊を組織し、各所に轉戦して、最後まで、薩軍の爲めに盡した根氣は、實に賞すべきである。彌、兵を擧げて、故郷を立つ、といふ時に、詠んだ歌がある。

しきたえの袖を露けき垂乳根の
母に別れの曉の空
櫛の實の一人の母を國の爲め

おきて出立つ我そかなしき

垂乳根の斯とは知らてみすらむ
身を紫筑路の今日の旅立

其の平生に於て、母に仕へて、孝であつた、といふ事を、今も猶ほ、中津の古老が、傳へて居るが、此三首の歌に依つても、略ぼ察せられる。

城山が、陥落する前、米倉の戦ひに於て、壯烈な最期を遂げたが、其時までも、懷を放さなかつた、短刀がある。夫は、増田の妻、しかといふのが、出陣の時に、其袖を控へて、

「貴郎は、今日まで、國家の爲に、度々死を決して、例も中途に、破れて了つたが、今度は、然ういふ事もなからうと思ひます。併し、無論、生きて再びお目にかゝる事は、出来ませぬが、只、妾の望みまする處は、最後を厩くして、増田の家名を、辱かしめぬやうに、願ひたい。母君に仕へる事は、織弱き女の手一つでも、決して所天が、お在の時に、劣るやうな事は致しませぬから、夫に付いては、御心配なさりまするな。此懐劍は、妾が、當家へ嫁きまする時に、父より授けられました、守刀で御座ります。今、之を所天に贈りますから、何卒、妾の魂と思召して、陣中へ、お携へを願ひたう存じまする。」

道の宋太郎も、鹿子が、健氣な一言には、男泣に泣いて喜んだ。此婦人は、其後宋太郎の母を見送り、晩年は神戸へ移つて、氣安く送つたと聞く。宋太郎が、討死した時は、二十八歳であつた。

一一一

日豊の方面が終つたから、筑前の方へ移つて、少しく述べやう。

流石は、黒田の舊藩地丈けあつて、筑前の方面にも、却々の傑物があり、薩軍に相應じて、政府に對抗したのは、當時に於ても、有名な話であるが、勿論、其全部を擧げて述べる、といふ譯にもならぬ。重立ちたるもの、四五人の逸話を、揚げて置くに、止めよう。

先づ、第一に擧げるのは越智彦四郎である。此の人は、那珂郡の警固村に、生れたものであるが、父は、井土佐平太といふて、黒田家譜代の家來であつた。幼少の時分に、父を喪ふて、叔父の海妻甘藏といふ、人に養はれた。父の佐平太も、藩の儒者として、令名のあつた人だが、叔父の海妻は、朱子學の大家で、具原益軒と共に、筑前方面では、評判の高かつた人だ。従つて、其の門人も少くなかつた。何れにしても、斯ういふ父と、叔父を有つた、彦四郎は、自然、其感化を受けて、普通の青年とは、異ふ所があつた。戊辰の役には、奥羽の戦ひにまで出て、政府から、賞典祿を、賜はつた位である。

明治七年に、江藤新平が、征韓論の行掛りより、佐賀の士族を率ゐて、兵を擧げたので、當時の政府は、非常に狼狽して、大久保内務卿の如きは、自ら下關へ出張して、戦争の監視をする、といふ程であつた。此は、無理もない譯で、明治になつてから、叛逆を企てた者はあるが、何れも未發の中に、納まつて了ひ、一つも、物になつたのは無かつたのに、獨り佐賀の亂は充分に警戒を加へ、鎮撫にも骨を折つて居たが、その甲斐もなく、突如として起きたものであり、之が永引くやうな事になると、九州四國を始め、各地の不平黨が、勃發するに違ひない。左様なつた日に

は、夫こそ、政府の運命も危くなるから、夫を憂ひて、大久保は、全力を注いで、征討に、着手した。序に述べて置きたいのは、江藤の事である。維新の變革に際して、藩論の如何に拘はらず、勤王討幕の意見を以て、中央へ乗出したものは、佐賀藩に於ては、江藤が、一人であつた。大隈、大木、副島等の名士もあつて、或は國許で、多少の働きも仕たらうし、長崎邊へ出て、奔走して居た事もあるが、京都へ乗出して、那の際に、公然、薩長の人達と、相結んで働いた、といふ者は、江藤の外に、なかつたのだ。此點からいへば、維新の鴻業に参畫したものは、佐賀藩に於ては、江藤のみである、斷言しても差支ない。明治の末年になつて、大隈が、維新の鴻業に、非常な働きがあつた如く、見せ掛たり、或は其黨與の人々が、爾く吹聴し、雜誌の上などでは、維新鴻業の一半は、大隈の手に依つて、成つたもの、如く、虚構の事を、言觸らして居たが、之は甚だ怪しからぬ次第で、大隈は、維新の鴻業に就いて、少しの働きも無かつた人である、斷言する居を憚らぬ。又、大隈などが、地方に來つて、少し位、奔走した事を、夫程、仰山に言ふ事が出来る、とすれば、三百諸侯の家來は、大半、維新の功臣といふ、事になる。功臣の安賣は、問屋の方で許すまい。

殊に、江藤が、皇都を、江戸へ移す事を以て、那の際に處する、唯一の政策として、意見書を、朝廷へ、奉つた事などは、長く埋もれて了つて、恰かも、大久保の發意なるが如くに、誤り傳へられ、遷都の事は、大久保の功名となつて了つた。而も、江藤が、那の峻烈な氣性を、有て居乍ら、其當時に、功名争ひを仕なかつた、といふ點に、奥床しい所があるではないか。夫に、既う一ツは、彌、江戸が東京となつて、日本帝國の都と、いふ事に、決定した時分に出した、意見書がある。夫は、變亂の後を受けた、日本を、如何に處理すべきか、といふやうな事を論じ、亦、江戸の市民に對する、或は繁昌とか、或は救済とか、いふやうな、經濟上の意見も、述べて居る、夫等に依つて見ると、江藤といふ人は、却々、經世の才も、あつた人である、といふ事が、認められる。然るに、佐賀の亂を爲した爲めに、總ての功績は、抹消されて了つて、只詰らない、叛逆人の首魁である、といふ

だけの事になつて、其遺族は、陋巷の間に、窮死せんとするの慘狀に陥つて居た。著者は、それが爲に、永い間、講壇に立つて、江藤を推重する意見を述べて居たが、一書生の議論は、天下を動かすに足らずして、只此不幸の經世家に對する、一片の同情を寄せる、といふに過なかつた。幸にも、的野半介といふ人の盡力で、此の事が、議會の問題となり、江藤に對する、追賞の議決があつた。延いては、畏れ多くも、皇太后陛下より、遺族に對して、御下賜金の恩典もあつた。著者は、自分の事のやうに念はれて、喜びに堪へなかつた。

一四

征韓論が破れて、江藤が、國へ歸つた、當時の狀況は、既に詳しく述べたから、再び繰返す必要はないが、只一言、いふて置く。江藤の歸國は、擧兵の爲の歸國でなくして、佐賀の士族が、征韓論を破れた事を怒つて、不穩の計畫を、して居る、といふ事を聞いて、鎮撫する爲に、歸つたのが、却つて反對に、擔ぎ上げられて了つたのである。今時の薄ッぺらな、教育を受けた者から見ると、鎮撫をしよう、としたものが、擔ぎ上げられたのは、江藤の力が、甚だ弱かつた證據である杯といふ、俗論を吐く馬鹿者も、世間には幾らかあるが、之は、士人の眞情を、解せざる輩の臆言である。江藤が、不平士族に、擔ぎ上げられて、心にもなき、擧兵の首魁と、なつたのは、西郷が、私學校の生徒に、擁せられて起つたのと、大小の別はあつても、其間の事情に於て、變りは少しもない。假令、議論の爲に、幾百幾千の人が死を以て起つ、といふ事、又、自分の心にない事でも、其人達の爲に犠牲となつて、死を辭せぬ、といふやうな、立派な男らしい、覺悟を有て居るものが、今の世に、果して幾人あるか、當時の社會狀態を、能く研究して見れば、決して左様な俗論は、出て來ぬ筈だ。

然れば、當時に於て、多少、見識を有て、世の中を、見て居た人などは、佐賀の擧兵が、無謀の計畫であつた、といふことには、異論のない所であるが、併し、事の茲に至りし、責任の半は、政府にある、といふ事も、一般に認め

て居るのである。越智彦四郎の如きも、佐賀の亂を以て、然ういふ風に、解釋して居たから、下關に、大久保を訪ねて、自ら進んで、此事に關する、調停の勞を執らう、といふ事を、申込んだ位であつた。政府に對して、不平があつて、兵を擧げたものと、政府との間に立つて、仲裁の勞を執らう、といふ事を、時の内務卿へ、申込むなどいふ事は、實に面白い。當時、僅に二十歳を出たばかりの、彦四郎が、其意見を齎して、大久保を訪ふた、といふ事は、以て彦四郎の爲人を、知る事も出来るし、當時の社會に、起つて居た、有志なるものが、如何に生々して居たか、といふ事が、判るではないか。

然るに、大久保は、彦四郎の意見を、一と通り聞いて、

「夫は折角の事だが、採用する譯にはならぬ。既に檄文を散布し、政府と戦ふといふ、意見を明かにして、武器を弄し、銃丸を放つた以上、今に至つて、政府が、夫等の人と、妥協するといふが如き事は、假令、如何なる道理が、其間にあらうとも、到底、不可能の事である。左様の事が行はれれば、即ち政府の威信は、地に墜ちて了ふから、夫よりは、君等が先になつて、鎮撫の任に、當つて呉る。豫め約束をする事は出来ぬが、若し、君等の力に依つて、鎮撫の功を奏する事が出来れば、夫に依つて、或は多少、君等の意見のある所が、政府の方にも、用ひられるやうにならう」

と言つて、彦四郎を説いた。勿論、言はれて見れば、夫に違ひないのであつた、今更に彦四郎も、退くに退かれず、遂に鎮撫隊を組織して、政府の爲に働く、といふ約束をした。併し、彦四郎としては心ひそかに、鎮撫を名として、佐賀に、乗込んだ上は、如何とも處置の採り方はある、といふ考へてあつた。そこで、福岡へ、歸つて来て、同志の者にも、夫等の報告をして、茲に、福岡の士族から成立つ、鎮撫隊なるものが、初て組織された。

其時分に、彦四郎と共に、手を執つて、事を共に仕たのが、武部小四郎と、いふ人であつた。之も、黒田の舊士で、祿は、七百石を食み、大組の内の一、武部武彦の子である。武彦は、維新の際に、勤王の大義を唱へて、藩論

が、動もすれば佐幕に、傾かんとする時に於て、勤王の意見を有て、衆志をして居た事が、端なくも、罪を得る事になつて、遂に同志と共に、切腹を命ぜられて了つた。併し、其志は、朝廷の知らし召す所となつた、明治になつてから、贈位の御沙汰を、受けた位である。此親にして此子あり、小四郎が、愛國愛世の志しは、全く父の武彦にも、譲らぬ程であつた。小四郎が、鎮撫隊長に於いて、重きを爲した、といふのも、無理はない。

一五

小四郎といふ人は、體格の立派な、風采は、堂々たる人であつた。殊に、不思議な事には、兩足の踵に痣があつて、左の方は圓く、右の方は、半月の形をして居た。日月の如き痣が、二個揃ふて、足にあつたといふのも、不思議な譯だ。坂本龍馬の脊中に、毛が生えて居て、鱗のやうな斑紋があつた、といふのと同じ事で、後世の物語作者が、筆を執つたならば、此痣に、何かの理由が、付く事になるだらう。

佐賀の亂に際して、彦四郎と共に、鎮撫隊を組織したが、最初は、其事に反對して、却々、應じなかつた、といふものは、小四郎の意見としては、江藤を討つより、大久保を倒す方が、日本の爲になる、といふ考へを、有て居たので、頻りに鎮撫隊に、反對をしたが、彦四郎が、諄々として、志しのある所を談じたので、遂に同意を爲る事になつた。然れば、一般の隊士は知らなかつたが、彦四郎と小四郎の間には、深い計畫があつて、鎮撫隊を、率ゐたのであつた。處が、事志しと違ふて、鎮撫隊は、鎮撫の實を擧げなければならぬ、事情に迫つて、大久保を倒す、といふ事は、遂に行はれなかつた。小四郎は、深く之を怨みとして、國へ歸ると、一切の交友と絶つて、大鳴山に入つて全く俗塵と遠ざかり、一年以上も、山住を仕て居た。

然るに、明治八年の八月になつて、板垣退助の一派が、愛國社を組織をして、政治の改革を唱へ、自由民權の議論を、頻りに鼓吹して居た。九州は、筑前の方面が、一番先に、其響きを受けて、民權論が、一時に勃興して來た。之を

見ると、小四郎は、自分の志しを爲す時が来た、といふ考へが起つた。兎に角、板垣に會ふて、意見を交換し、大に天下の爲めに、何事か爲さう、といふ覺悟で、筑前を立て、大阪へ向つた。然るに、大阪會議の結果として、板垣は、木戸孝允と相携へて、再び政府へ、入る事になり、板垣は參議となつて、内閣に列る事になつた。小四郎は、大阪へ着くと、其事を聞いて、非常に憤慨した。假令、政府が、讓つて来たにもせよ、板垣が、今までの立場を去つて、政府に入る、といふが如きは、實に怪しからぬ、と考へたのである。昨年、佐賀の亂に於て、大久保を、倒す事を過まり、今又、天下の事は、板垣と共に、と思つて来たのが、斯ういふ手違ひに、なつたのは、要するに、他人を頼みにする爲めに誤るのであるから、之よりは、自分の他に、味方はない、と決心して、國へ、歸つて来た。夫から、兩年を養ひ、同志を作つて、徐に事を爲さうと、堅い覺悟になつた。

此人が、彦四郎と、共に起つて、福岡城の攻撃に敗れ、一度、踪跡を晦まして、各所に、潜伏して居たが、博多に歸つて来てから、捕縛された。彌、裁判が確定して、斬罪に處せられる時、係りの役人から、何か遺言はないか、といはれて、小四郎は、『別に、今に至つて、言ふ事はない。只、拙者の子供に、傳言を頼みたい。夫は他でもないが、國の爲には、一身を遺れ、事に臨んでは、私を營んで、義を忘れてはならぬ。此一言を、傳へて呉れろ』實に堂々たる、丈夫の遺言である。太刀取が、背後へ廻つて、ヤツと、掛くる聲と共に、小四郎の首は、前に落たが、不思議な事には、身體は坐つた儘、少しも動かなかつた。總て斬罪に處せられたものが、昔から、首は落ちたが、身體が動かなかつた、といふやうな事は、殆んど例のない事であつて、此一事は、小四郎が、如何に英雄の魂を、有て居たか、といふ事が判る。世間には、首も落ちないのに、尻餅を搦く奴がある。然ういふ意氣地のない奴は、小四郎のやうな人の、最期の立派な事を聞いて、少しは自らを恥たら、宜からう。

話は、彦四郎の事に返る。佐賀の亂を、終りて後、鹿兒島に遊んで、桐野利秋、村田新八などに會ふて、漸々、意見を交換して、深く決心する處あつて、歸つて来た。然るに、十年の二月に致つて、西郷が、兵を擧げた、といふ事を聞いて、彦四郎も、大に覺悟する所があつた。小四郎と共に、擧兵の準備に掛り、彌、準備を整ふて、三月二十八日に、福岡城を、攻撃した。先づ此城を乗取り、筑前一圓を味方として、熊本の薩軍に應じやう、といふ計畫であつたが、其計畫は破れて、福岡城の攻撃は、遂に功を奏さなかつた。夫から、各地に轉戦して、四月には、秋月の城に入つて、大に勢力を張つたが、官軍の襲撃を、受て敗れた。茲に至つて、最早、如何とも爲す事が出来ず、薩軍の状態を探ると、是れも、熊本城を、攻略する事が出来ずに、敗北の後、日向へ出た、といふ事を聞いたから、自分も、日向に出る意で、夜須郡の椎木と、いふ所まで、出て来て、淨圓寺といふ、寺に泊つた。

然るに、此方面を、警戒して居た、警部で、宮内愛亮といふ人が、佛教信者で、其邊の寺院へ、屢々出入して坊さんには、知己があつた。其關係から、淨圓寺に、怪しい者が泊つた、といふ事を聞いたから、探偵を放つて、様子を見ると、確に暴徒の一人に違ひはない、と、見極めがついたので、四月五日の夜明方に、部下の巡查を率て、闖入した。彦四郎は、黙く眠入つて居たが、餘りに騒がしい物音に、不圖、目を覺すと、最早、座敷の中に、巡查の姿が見えた。乃で、起き上り乍ら、蒲團の下に、匿して置いた、拳銃を執つて、眞ッ先に、進んで来た。警部らしき奴に突つて、引鐵に指を掛けたが、何ういふ理由であつたか、引鐵が動かなかつた。僅かな隙に、巡查が左右から、組付いて来る。彦四郎も、腕力のあつた人だから、二三人は、取つて投たが、衆寡敵せず、四方から折重なつて、巡查の爲に、捕縛されて了つた。繩を掛た後にも、猶、彦四郎を、打つやら蹴るやらしたので、額が破れて、血は流れる、と

いふ有様であつた。宮内警部は、

「貴様は、何と言ふ者か。事、茲に及んでは、匿すも詮ない事であるから、明かに名乗つたら、宜からう」

彦四郎は、遁れぬ所と、覺悟して、

「拙者は、越智彦四郎と、いふものである」

「えッ、貴公が、越智彦四郎と、言はつしやるのか」

「左様」

「いや、夫は失禮を致した」

宮内は、つかくと、近付いて来て、掛た繩を解いて、叮嚀に、會釋を仕た後、

「先生とは知らず、御無禮を働いて、何とも相濟まぬ」

其様子が、如何にも叮嚀なのに、彦四郎は、不審を懐いた。

「拙者は、足下を知らぬが、足下は、如何なる人か」

「いや、先生の方で、御承知のないのは無理もない。お目に掛るのは、今が初めてであるが、自分は、鹿兒島縣の者

で、宮内愛亮と、いふものである。かねぐ先生の爲人は、承知して居る。先生ほどの人を捕へるに、不意に掛つ

て、亂暴を加へた、といふ段は、如何にも申譯のない事である。然し、今日の先生の身上に、既う天命盡きて居て、

假令、此場は、逃延びても、何時か一度は、此運命に陥るものと、定つて居る。依て自分の手に依つて、先生を、

御送りいたしたい、と思ふが、如何であるか」

此一言を聞いて、彦四郎は、胸のすくやうに、心地快かつた。假令、偽はりにもせよ、宮内警部が述べた、今の言

葉には、刀向ふ事は能ない。況して、自ら繩を解いて、敬意を表された以上、唇ぎよく宮内の爲に、功を立てさせて

やらう、と覺悟した。

「驚重な御挨拶にて、却て恐縮する。彦四郎は、天命を知つて、唇ぎよく縛に付まする故、宜しく願度い」

斯ういふ事情で、彌、彦四郎は、縛に就て、福岡へ護送されて來た。漸々、調べの末、死罪と決つたが、茲に一

つ面白い話がある。

秋月の士族で、篠原藤三郎と、いふものがあつた。此人は、夙に支那に志しがあつて、明治元年に、支那大陸を

跋渉して、歸つて來たほどの人だ。明治十年の正月に、或人の紹介を以て、福岡へ、彦四郎を、訪ねて來た。彦四

郎も、深く藤三郎を、信じて居たが、其内に、不圖した事から、藤三郎は、政府の間諜である、といふ事を聞いたの

で、遂には避けて、會はぬやうになつた。所が、福岡の警察の方では、藤三郎が、屢々、彦四郎の家に、出入を仕た

一條から、確に怪しい好と、見て、注意人物の一人に、加へて居たので、西郷の兵亂が起きて、彦四郎は、福岡城を

攻めて、夫が敗れたので、何處ともなく、姿を暗ました。於是、藤三郎は捕縛された。彦四郎の連類である、とい

ふので、隨分、酷い拷問に遭つて、嚴重な調べを受けたが、固より藤三郎は、關係のない事であるから、飽までも、

冤罪を唱へて、止まなかつた。

所へ、彦四郎が、捕縛されて來て、彌、五月一日には、死罪の處刑になる、といふ事になつた。其の時分の官吏

は、實に無慘な事をするもので、此藤三郎を放免して、彦四郎を、斬罪にする役を命じた。詰まり、彦四郎を、切る

事が出来なければ、藤三郎も、其の同類である、といふのだ。阿古屋の琴責とは違つて、少しも人情のない、無慘な

事を爲せやうとした。藤三郎は、自らの潔白を表する爲に、據らなく、之を承諾して、刑場に臨んだ。引出されて來

た、彦四郎が、之を見ると、

「やッ、貴様、藤三郎か」

「いや、何とも申上やうのない次第。然し、大丈夫が、己の欲する道に依て死する、之以上の樂い事は、無いでありませう」

『而て、貴公は、何の爲に、此處へ来たか』
『實は、足下の同類、といふ嫌疑を受けて、入獄の身の上に、相成つて居たが、今日許されて、足下を、斬る役を命ぜられたのである』

有繫の彦四郎も、眼を閉ぢて、暫時、考へて居たが、

『うむ、然うか。好矣、脣ぎよく切つてくれ』

藤三郎は、涙を揮つて、彦四郎を、斬つて了つた。之に依て、藤三郎は、無罪となつた上、金十圓の褒美を買つた。其後、福岡縣の有志家が集つて、彦四郎の碑を、千代の松原に建てる、といふ時に、藤三郎が、賞與に貰つた、十圓の金を持つて、石燈籠を建て、彦四郎に手向けた。其の燈籠に、鐫んだ歌に、

散る花と知れと嵐のなかりせは

春の盛りをとにもゆくらむ

一七

越智、武部の一列の事を、述べた以上は、平岡良之助の事を、言ふて置く必要があらう。

黒田藩の足輕に、平岡仁三郎と、いふ人があつた。其子に良之助、鐵太郎といふ二人があつて、鐵太郎は、後に浩太郎と改め、良之助は、後の良五郎である。良五郎は、身の丈、五尺六寸を越えて、骨格の逞しい、腕力は、非常にあつた人で、毎朝、必ず四斗の米を搗いて、夫から、武藝の修業に掛つた。劍術は、小野派一刀流の免許を得、柔術は汲心流、棒は夢想流、其他は捕手、砲術、槍術と、苟くも武藝は、切て一通りの修業を積んでゐた。子供の時分から、張情な性質で、人間は、寒暑に堪へる工夫が、第一である、といふ所から、冬などは、池に張つて居る氷を碎いて、身體を入れ、首ばかり出して、一時間でも、二時間でも、之に堪ゆる事を、屢試みて、人を驚かした。夫に、

此人の胃袋は、不思議な胃袋で、旅行などをする時に、三日分位、喰溜を仕て置いて、跡は食はずに歩く、といふやうな事もやつた。斯ういふ事は、能く筑前の人か、やるものと見えて、頭山なども、喰溜は、能くやつたやうに、聞いて居る。或時、家の普請を仕て居ると、人足が、大勢集つて、土藏の中で、ワイ／＼騒いで居るから、良五郎が、行つて見ると、濁酒が、一ぱい入つて居る大瓶を取巻いて、騒いで居るのだ。

『こりや、何を、貴様達は、騒いで居るか』

『へえ、旦那様で何座いますか。壁の土を落すので、戶外へ出さう、とするのですが、何しろ、何うも圓いもので、手掛が無もんですから、困つて居る所です』

『何だ、馬鹿な奴が、其様瓶の一個や二個……』

『常談、言つちや可けません。細でも掛け、大勢で、四ツ手にでも仕て、擔いで行かなければ、逆も動くものでは、御座いませぬ』

『莫迦を言へ、俺が、持つて行つてやらう』

『へえ、何して旦那、動かすんで御座います』

『退け、斯うして持つて行けば、何でもなし』

瓶の縁に、兩手を掛ると、軽々と引上げた。人足は、之を見て驚いた。見れば、別に顔を、赤して、力だ容子もない。夫から、良五郎の腕力が、評判になつた。

薩車が、彌、事を起す、といふ事を聞いて、筑前の有志が、動搖を初めた。政府も、頗る之を怖れて、舊藩主の黒出侯に、旨を含めて、鎮撫の爲に、歸國を爲せた。先づ第一に、越智、武部の兩人を初め、其他の者を、邸へ呼寄せやう、とすると、誰一人として、之に應ずるものはなかつた。之を聞いて、良五郎は、弟を便として、事に託して、自分の邸へ、一同を集めて、さて辭を改めて、言ふのに、

「此度、舊藩主が、態々歸國せられて、一同に面會を仕たい、といふ。其心は、此度の事變に付いて、鎮撫の爲に、何か諭される所がある、といふのは、固より判つて居る。諸君が、之を避けて會はぬ、といふ事も、一應は道理のある事であるが、然し、先祖以來、永い間、藩主として、仰いて居た、殿様が來られた、といふのに、避けて會はぬ、といふのは無禮であらう、と考へる。何ういふ事を仰になるか、一應は、敬意を以て、之を伺ふといふ事は、舊君臣の間に於て、禮儀である、と心得るから、會つて見たら何うであらう。但、お諭しに従ふと、隨はぬは、固より國家の大事に關する事であるから、各々の了簡があるに依て、夫は隨意であるが、一應は、お目に掛つて、其説を伺はぬ、といふ事は、宜しくない、と思ふ」

理義を、明かにした説には、一同も、反對が出來ないので、遂に黒田侯に、拜謁を仕した。雖然、藩公の説諭は、説諭として聞いて、各々の覺悟は、覺悟として行ふ事になつたから、折角に歸國せられた、藩公の苦心は、水の泡になつたが、此の際に於て、良五郎が、此の計ひを仕した、といふ事は、昔の君臣の情誼を、明かに仕した、立派な取計ひとして、同志の間にも、自然、重く視られるやうになつた。然し、此の時に、良五郎の邸へ、一同が、集つたのを縁として、夫から先の密會は、總て良五郎の邸を以て、それに宛る事にした。恰度、熊本協同隊が、有馬源内の邸を、本部に仕たのと、同じやうな行方であつた。此の事件で、一度捕はれたが、出獄の後は、全く天下の事に離れ、弟を助けて、炭坑の經營で、後の半生を送る、といふ覺悟になつたので、世間の人に、全く忘れられてしまふたが、その人物は、立派なものであつた。

一八

當初、佐賀に、江藤の亂が、起つた時、福岡の有士は、直に起つて、之に應じやう、として、動搖を初めた。其時に、重立つた人の意見として、兎に角、誰でも、佐賀へ出掛けて、一應、其状況を、視察した上で、應ずる事にし

たら、宜からう。經學妄動は慎まう、といふ事になつて、郡利、大庭弘の二人が、佐賀へ、事情を探りに行つた。雖然、不幸にして、江藤に、面會する事が出來なかつた。乃で、大庭は、福岡へ歸り、郡は、佐賀に止まる事になつた。何ういふ事情からか、郡が、政府の探偵と間違へられて、江藤派の爲に、一時押へられ、已に斬られやう、とまで仕た。然るに、彌、其事情が明かに、なつて見ると、政府の探偵でない、といふ事が判つたので、放たれて、福岡に歸る事が出來た。當時、橋口町の勝立寺が、事務所になつて居て、二人の報告を、聽く爲に集つたものが、殆んど五百人に近かつた。其時に、越智彦四郎が、政府と江藤との間に立て、調停をしよう、との策を、立たのであつた。一同も、夫は賛成は仕たのだが、遂に越智が、大久保に、面會するに及んで、事は敗れて、却つて鎮撫の側に、立つ事になつた。

然しながら、起智の一派にしても、心から、夫に同意を仕たのでなく、表面、大久保の説諭に従つて、佐賀に乘込んでから、機會を見て、江藤派と、聯合の上、官軍を惱まさう、の考へは、あつたのである。若、其策が成立したならば、彼の騒動は、却々、大きくなつたかも知れぬが、官軍にも、亦人があつて、早くも夫れを看破し、策の裏をかい

鎮撫隊編成の事に就ては、箱田六輔、宮川太一郎の二人が、専ら受持であつて、その人數は四百五十名、之を十一箇小隊に分けて、全く鎮撫隊の編成は出來た。夫れから、佐賀の方面へ、乘込んで行つた。

官軍が恐れたのは、江藤の一派よりは、臨時に、鎮撫を名として起つた、土族の一團が、江藤に應じて、事を起す事であつた。官軍の中に、兒玉源太郎が居つて、頻りに福岡隊の舉動に、注意を仕て居た。兒玉は、當時、未だ少佐であつたが、追は、大將にまで進んで、滿洲軍の總參謀長として、世界第一の強兵たる、露西亞の軍隊を惱ましたほどの健たかものであるから、其時代から、優れた所があつた。種々の報告を集めて、漸次、考へて見ると、何うしても、福岡の鎮撫隊が怪しい。鎮撫隊の方では、刀の準備こそしてあるが、銃器の方は、調ふて居らぬから、夫れを官

軍に謂求したので、兒玉は、之を渡す時分に、銃と彈丸と、異ふのを渡してやつた。全部、然うすれば氣付かれるから、多くを然ういふ事に仕て渡した。彌、戰場に臨んで、其銃器は、充分の用は爲さなかつた。

殊に、其一團だけには、左りの腕に、白い布を附させて、之が福岡の鎮撫隊である、といふ事を、明確に誰にでも分るやうにして置いた。其内の或小队をして、一夜、俄に命を傳へて、江藤の陣へ、斬り込ませた。夜中の戦闘であつたが、腕章のある爲に、之が福岡の連中だ、といふ事を、江藤の方で知つたから、此一事から、江藤派が、福岡黨を、絶對に信しない事になつて、仕舞つて、兩者の意志は、全く疎隔する事になつた。元來、福岡と佐賀の兩藩は、舊幕時代から、互ひに軋轢して居たのである。然なきだに、疑ふて居たのが、茲に於て、益々感情を悪くして、福岡黨は、俱に事を爲すに足らぬ、といふ事を思ふて、全然、敵視する事になつた。夫れは全く、兒玉少佐に、謀られた結果である。

斯ういふ始末であるから、福岡の有志が、計畫した事は、總て破れて仕舞つた。同時に、武部小四郎が、主張して居た。大久保暗殺の事の如きも、手違になつて仕舞つた。成敗の跡を以て、彼を評しては、氣の毒であるが、福岡の有志の失敗は、實に見苦しいものであつた。自分等に於ても、夫を思つて居たから、西郷が、兵を擧ると、聞いて、非常な意氣込を以て、再び起つたのであるが、之も亦、見込み通りにならず、計畫した事は、晝餅に歸して仕舞つた。福岡有志の、重立つた者の略傳は、述べ終つたが、尙ほ茲に一言、加へて置くべき事は、箱田と郡の事に就てである。此二人は、十年の役が済んで、青天白日の身になると、今度は、自由民權の説を唱へて、盛んに活動を仕た。現に、國會期成同盟會の起つた時代には、此二人が、最も能く中央に出て、働いて居た。殊に、箱田の名は、長く、關東や東北の、古い有志の間に、傳唱された位であり、郡は、十三年の全國有志の會合に、座長に推薦された。二人の志しが、常に國家の上になつた、といふ事は、深く敬するに足る、と思ふ。

土佐派の陰謀

西南の兵亂が治まつて、翌明治十一年になつたから、東京の大審院に於て、多數の人が、謀叛の罪に依つて、處分されて居る。之を世間から、土佐派の陰謀事件と、稱して居るが、其重立たるものゝ名を、擧げて見ると、

- | | | | | | | | | |
|----|-----|----|------|----|----|----|-----|---|
| 林 | 有造 | 大江 | 卓 | 片岡 | 健吉 | 岩 | 神 | 昂 |
| 谷 | 重城 | 山田 | 平左衛門 | 池田 | 應助 | 武内 | 綱 | |
| 岡本 | 健三郎 | 川村 | 矯一郎 | 佐田 | 家親 | 大石 | 彌太郎 | |
| 中村 | 貫一 | 村松 | 政克 | 藤 | 好勝 | | | |

等の數十名であつた。紀州出身の内にも、大分味方があつたけれども、罰せられたのは、陸奥宗光一人であつた。此一派の計畫が、尙、考へ通りに行はれたならば、當時の政府は、何うなつたか判らぬ、恐らく、潰れて了つたらう、と思ふ。薩軍の方でも、土佐派の起つ事は、宛に仕て事に違ひない。夫は、追々關係を述べて行くと、其推察は出来るのである。極めて興味のある事件であるから、少し詳しく、述べて置たい。

土佐國幡多郡の宿毛といふ所に、林有助といふ人があつた。其子に、名物の三人兄弟が出来た。第一が岩村通俊、第二が林有造、第三が岩村高俊といふのであつた。通俊は、始め左内と稱し、高俊は、精一郎と唱へて居た。兄弟が

三人揃つて、那までになつたのは、實に珍らしい事である。御料局長を、長く勤めて、後に、農商務大臣になつたが、腦病の爲に、長く勤まらず、間もなく、罷了つたので、世間では、三日大臣と、綽名したけれども、併し、道俊は、立派な人物であつた。有造は、憲政黨内閣と、政友會内閣の時に、前後二度の大臣を勤め、末弟の高俊は、愛知縣令をやり、錦鶏間祇候になつてから死んだ。其内に於て、有造が、殊に勝れて居たやうに、思はれる。晩年は全く退隱して、故郷の宿毛へ歸り、氣安く日を送つて居たが、一頃の有造は、實に能く、活動したものである。二十三年の頃から、三十年あたりまでの間には、有造が綱引傳で、丸の内邊を、駆け廻るのを見ると、翌日の新聞記事が賑ふた位で、毎も政變の中心人物になつて居た。演説は、餘り巧くなかつたが、座談が、實に巧な人で、如何に反對の人でも、對座して居る間に、何時か、引込まれて了つて、敬服をする、といふ程であつた。

慶應年間に、一時脱藩して、藩論の佐幕に傾きかけたのを慨し、盛に勤王討幕の議論を、唱へたものだ。其内に、藩論も、倒幕と決して、官軍に従ひ、奥羽征伐をする事になつた時、有造も亦、軍に従ふて、奥羽征伐に功名を立て歸つてから、高知藩の参事になつた。明治三年には、大山嶽、品川彌二郎等の人々と共に、洋行して、普佛戦争の實況を視察し、翌年歸つて來ると、直に、外務省の四等出仕になつた。更に清國との間に、臺灣問題から葛藤が起きて副島種臣が、全權大使として、談判に赴いた時は、其部下として、清國へ渡つて、談判を終つて、歸つて來た翌年が例の征韓論の騒ぎで、有造も亦、西郷派の一人であつたから、板垣参議の辭職と共に、職を辭して、民間へ下つた。西郷の一派が、政府を退いた爲に、朝野の形勢、何となく、山雨將に至らんとして、風樓にみつといふやうな、感じに、閉ざされて來た。政府には、三條、岩倉、木戸、大久保等の人が残つて居たけれども、辭職した方の側は、之と充分對抗するだけの人があつたから、然うなると、政府の睨みも、些利なくなつて、當時、政府者の困難は、一通りてなかつたらう。又一般の人も、何うせ、辭職した連中が、此儘に、黙つて居る氣遣ひもないから、何時か、甚い衝突が起るだらう、といふやうな事を、思つて居たのである。政府に残つた人も、確に、偉い人達であつたけれど、

一一

ども、一般の人間を、得て居た點からいふと、西郷派には、及ばなかつた。何しろ、西郷といふ人が、容易ならぬ氣を負ひ、續いて板垣、後藤、副島、江藤の四人が、亦、一航の氣受けが好かつたし、陸軍部内でも、幾らか人に知られた、薩藩出身の連中は、皆辭職したのであるから、何となく、人氣が西郷派の方へ、傾くやうになつたのも致方がない。夫を、巧に押へて、政府の基礎を堅くして置くといふ、事は、容易な事ではなかつた。

副島種臣は、佐賀の鍋島の家來で、却々の學者であつた。少し、偏狭の傾きはあつたが、其代り、剛直にして、古武士の風があつた。此人の履歴には、却々面白い逸話が多い。慶應の初年、長崎に、浪人生活をやつて居た時代、恰度、大隈八太郎も長崎に居たが、毎夜のやうに、圓山の廓へ入つて、豪遊を極めて居た。洒落者の大隈が、自分で鬚を結んで、元結の代りに、紫の細い紐を以て、根元を巻上げピカ／＼する着物を着て、引摺るやうな長い刀を、落しに打込み、狭い長崎の市街を徘徊する時分には、往來の人が、振り返つて見るほどの、立派なものであつた。然ういふ風で、廓などへ行つても、派手な遊び方を仕たので、その評判が、追々高くなつて來た。副島は、極めて堅い人であるから、噂を聞くと、甚だ苦々しい事に思ふて、或日大隈に向ひ、

「貴様は、此頃頻りに、圓山の廓へ、出入するさうぢやが、苟くも、佐賀の藩士として、左様な不品行な事を仕ては善くあるまい」といふて、懇々意見をすると、夫を聞いて居た、大隈は、微笑を洩して、

「足下は嚴しい事ばかり、いふて居るが、全體、遊女買といふ事を、仕た事があるのか」

「いや、俺は、然ういふ、穢れた事はせぬ」

「然し、覺えがあるのか」

『いや、知らぬ』

『夫を知らないで、人に意見をするといふのは、怪しからぬ。兎に角、一晚一緒に居て見ろ』

遊びに行くな、といふて、意見するものに、一緒に遊びに行けといふ。話は全く、反對であるが、大隈の才氣は、溢れるやうで、殊に、辭舌に巧な人であつたから、到頭、頑固な副島を説き付けて、圓山へ引つ張り出した。大隈は敵媚の大夫に、すつかり吹き込んで、其晩は、副島を巧くあやなして、立派な道樂者に、仕立て了はうといふのであつた。所が、副島の頑固は、何處までも頑固で、其晩、敵媚の大夫に、話を仕掛られて、尊王攘夷の大義を、説いて聞かしたが、大夫に、少しも判らないのを怒つて、横面を撲付け、夜中に大騒動を上げた。夫で、副島の女郎買もお終ひになつて了つた。明治になつてから、外務卿で参議を兼て居た時に、新橋の藝者を見染て、戀の病になつた、といふやうな珍談がある。参議の戀病などは、副島でなければ、見られない事だ。

斯ういふ風な人であるから、辭職の後も、極真面目に、世間の様子を見つて居たのである。林は、辭職の後、多く越前堀の副島の邸に、寝泊りを仕て居た。勿論、副島も、有造の爲人を信じて、厚く待遇して居たのである。

副島は、竊に心の中で、西郷が歸國した後は、何様考へを有て居るか、又將來、何ういふ事をする意であるか、といふ事を、確める必要があると考へて居た。今後の日本は、何うしても西郷を中心として、治亂共に決するの外はない、と信じたので、頻りに、西郷の心を訊たいものである、といふ考へを起したが、他の事と異ふて、斯ういふ事は、普通の者をやつた所で、役には立たない。副島は、此事に就いて、ひとり胸を痛めて居たのである。

時に、洋行から歸つて來た。山中一郎が、佐賀へ歸るといふので、夫を幸ひに、林が九州へ行く、といふ事を聞いたから、乃で林に向つて、どうせ九州へ行くならば、鹿児島へ行つて、是非、西郷に會つて來て貰ひたいといふ事を、打明けた。林も、固より其心があつたので、副島に言はれれば、猶幸ひであるから、直に承知を仕た。乃で、山中と共に、東京を立て、九州へ向つた。

有造は、非常に覇氣に富んだ、野心の多い人であつたから、毎も謀叛氣が、満々として居た。従つて、其行く所、必ず波瀾を起す、といふやうな傾きがあつて、政府からも、深い注意人物に、なつて居たのである。現に、斯ういふ話がある。愛知縣令が缺員になつて、永く其後任が、決らないで居るのを見て、或人が、大久保内務卿を訪ふて、林有造を採用したらば、何うであらうか、といふた時に、大久保は、首を振つて、

『其様、莫迦な事が出来るものか。林といふ奴に、金と位置を有たせたら、何をするか判らぬ。縣令にするなどは、危険千萬な譯ぢや』

といふて、之を拒絶した、といふ事がある。此一事を以て見ても、當時の有造が、如何に政府から、危険視されて居たか、といふ事が判るのではないか。

副島から、相談を受けないでも、自ら進んで、鹿児島へ渡り、西郷に會ふて、懇談を遂げて見やう、といふ氣はあつたのだ。處へ、副島からの話であるから、猶更の事である。山中と共に、横濱から汽船に乗つて、神戸へ着いたのが、明治七年の一月十五日であつた。適かに海岸を見ると、棧橋から海岸通り一體に、巡査が整列して、一々、上陸する旅客を調べて居る。其様子が、尋常でない。

『オイ山中、何か始まつたのぢやないか』

『然うさ、大分嚴重に、調べて居るやうぢやが、普通の事で、那ア嚴重に、調べる理由はない。こりや何か、甚い騒ぎでも、あつたかな』

話して居る中に、小蒸汽は棧橋へ着いた。二人は、揃うて上ると、ばらばらと、左右から駈け寄つた巡査が、

『オイ、鳥渡待て』

其調子が、如何にも横柄であつたので、二人は、ぐツと、癩に障つたから、聞えぬ態で、彼方へ行過ぎやうとする

「こりや、待てといふに、何故待たぬか」

「何か用か」

「用があるから、呼んで居るのぢや」

「何の用ぢや」

「君の持つて居る、其靴は君のですか」

「有造は、苦い顔を仕て、

「吾輩が持つて居るから、吾輩の所有ぢやないか。何だ唐突に、お前の靴かとは。失禮な奴だ」

「イヤ、上官の命令に依て、調べるのですから、鳥渡、お出しなさい」

「ふふーむ、上官の命令とは、何ういふ命令ぢや」

「夫は、説明する事は出来ない。何でも宜いから、見せろ」

「いや、其事情を、説明せぬうちは、見せる譯にゆかぬ」

「巡査の、最初からの訊ねやうが、横柄であつたから、有造も、少し癩に障つて、抑換半分に、拒んで居る。巡査も、

對手が普通の者でない、と見たから、迂濶、手を出す事は出来ないで、まご／＼して居ると、遙に之を見た、警部が、

「何う仕た／＼」

「何う仕た／＼」

「此者は、靴を見せろと申すのに、拒んで居るのであります」

「そりや、怪しからん。退け／＼」

「警部が代つて、有造の方を向くと、

「ヤア、林先生ですか」

「言はれて有造が、能く見れば、顔に覚えはあるが、名前は知らない。

「うむ、吾輩は有造だが、君は何だ」

「國許で、お世話になりました、弘田で御座います」

「お、然うか。いや、全然忘れて居た」

「只今は、部下の巡査が、御無禮を働いて、相済みませぬ」

「いや、別に無禮といふ事もないが、全體、何ういふ理由で、調べるのかい」

「警部は、聲を潜めて、

「之は秘密の事で御座いますが、先生ですから、お話をしますが、實は、昨晚、赤坂の喰違に於て、岩倉右大臣閣下

が、暗殺を爲れたのです」

「えッ、岩倉がやられた」

「ハイ」

「うむ、そりや大事件ぢや」

「夫に就て、其筋の命に依りまして、旅客の手荷物は、一切調べる事に、なつたので御座います」

「然うか、爾ういふ次第なら、敢て拒まぬ。さあ見給へ」

「靴を差出したから、警部は、巡査に命じて、中を調べさせる。其間に有造は警部に向つて、

「何う仕た／＼」

「何う仕た／＼」

「此者は、靴を見せろと申すのに、拒んで居るのであります」

「そりや、怪しからん。退け／＼」

「言はれて有造が、能く見れば、顔に覚えはあるが、名前は知らない。

「うむ、吾輩は有造だが、君は何だ」

「國許で、お世話になりました、弘田で御座います」

「お、然うか。いや、全然忘れて居た」

「只今は、部下の巡査が、御無禮を働いて、相済みませぬ」

「いや、別に無禮といふ事もないが、全體、何ういふ理由で、調べるのかい」

「而て岩倉公は、餘程重傷であつたか」
 「其邊は、能く判らないですが、其筋の命令が、嚴重な所から考へると、多分、御命は亡いのでせう」
 「其下手人は、捕縛されたのか」
 「夫が未だ、手掛がないものですから、従つて、斯ういふ嚴重な、調べをするので御座います」
 「然うか」
 「其内に、鞆の調べが終つて、巡查や警部は、彼方へ行つて了つた。其跡で、二人は互に、顔を見合せて、
 「何うぢや、大分、面白くなつたな」
 「うむ、今警部の言つた通りだと、愉快ぢやな」
 二人は、海岸通りの旅宿へ入つた。

四

赤坂の喰違に、岩倉を襲ふたのは、林と同じ高知縣人で、武市熊吉以下、數名の壯士であつた。岩倉は、極めて輕傷で、難を遁れ、警部がいつた様に、大仰なことはなかつた。翌日になつて、其事情が判つたから、一度は喜んだ二人も、落膽した。若岩倉が、全く倒されたものなら、鹿兒島行を延べて、東京へ引返さう、といふ心もあつたが、難を遁れたといふのでは、東京へ歸る必要はないから、始めの考へ通り、鹿兒島へ行ふ事になつた。光運丸といふ汽船が、長崎へ向つて出帆する、といふので、夫へ乗込み、長崎へ着いた。夫から、天草へ渡つて、或は海、或は陸、車や船の便をかりて、日を重ねて、鹿兒島へ入つた。
 政府を去つて、歸國した西郷は、私學校を興して、多數の青年を養ひ、篠原や桐野をして、其監督をさせ、自分は、大體遊んで暮して居た。併し、種々な人が、尋ねて來て、其考へを、聞かうとするので、遂には、西郷も、其原に堪

へずして、一切、之等の人に會はない、といふ事に決した。此頃では、吉野村の桐野の宅に居たり、或は、武村の自宅に居たりして、只閑散の中に、日を送つて居る、といふ事が判つた。乃て、林は、考へた。突然行つて、門前拂ひをされるのも、甚だ面白くないから、何とかして、必ず會へるといふ、工夫を計らしたものだ、と思つて、二三日は、宿屋に暮して居た。或日、山中と連立て、郊外散歩に出掛た歸り途に、町外れの茶店に憩ふて、有合の肴で、一杯飲つて居ると、表から飛込んで來た、年の若い書生が、大な茶碗で、冷酒を五六杯呷り付て、出て行つた其様子が、尋常の書生と、違ふ所があるから、

「オイ〜」
 茶屋の主人は、前へ出て來て、
 「何か、御用で御座いますか」
 「今、酒を飲んで行つたのは、ありや、何ういふ人ぢや」
 「那れで御座いますか。那れは、先生のお邸に居る、書生で御座いますよ」
 「はア、先生といふと、誰の事か」
 「成程、之は他の國の方には、お判りはないが、西郷様の事で御座いますよ。此土地で、先生といへば、西郷様に、極まつて居るのですから」
 「然うか、那の書生を、鳥渡呼んで貰ひたいな」
 「何か、御用で御座いますか」
 「まあ宜いから、呼んでくれ」
 茶屋の主人は、直に表へ駆け出した。間もなく、最前の書生を連れて、入つて來た。
 「やア、呼止めて、甚だ失禮をしたが、西郷先生の御門下と聞いて、可憐く思つて、呼返したのですから、どうぞお

「許し下さい」

「君方は、何處の人かな」

「吾々は、四國の者ですが、先生、昨今は、どういふ御様子ですか」

「別に、之といふ用事もないが、全體、何で然ういふ事を、訊きなされるか」

「まあ其處へ腰を下して、悠くり話して行き玉へ」

背後を、振向いて、

「オイ、此お方に、酒を注いで上げな」

茶屋の主人は、懸て大きな湯呑に、汪汪と、酒を注いで来た。

「さア榊山さん、お喫んなさいませ」

「うむ、こりや有難いな」

呻と、一呑に、飲み干て了つた。有造は、其様子を見て居て、

「君、却々嗜のやうぢやな」

「いや、別に嗜でもないが、未だ、満足するほど、呑だ事は、一度もないのぢや」

此答には、山中も驚いた。満足するほど、飲んだ事がない、とは、餘程の酒量である。

「時に君方は、何ういふ人物かな」

「いや、吾輕は、土州の林有造といふものぢや」

「は、ア、何ういふ身分の人かな」

之には、林も、少し驚いた。名前をいふたのに、何ういふ身分か、と、訊かれるやうでは、心細い譯だ。俺の名を知らぬのか、とは思つたが、先方で知らないものは、仕様がな

「イヤ、各乗る程の者ではない。詰らぬ者なんだから、君方が、知る譯もない。だが、些遊びに来玉へ」

自分の宿屋を告げて、其日は空しく、別れて歸つて来た。然るに、翌日も、亦其翌日も、その書生が訪ねて来ては、

さかんに呑倒しく行く。林には、考へがあるが、伴れの山中は、何だか詰らないやうな氣がして、其様事を仕て居ず

とも、早く西郷に會ひに行つたら、宜さうなものだと、頻に促すけれども、有造は、更に出駐けやう、といふ様子

もない。六七日すると、榊山が、例の通り、駈け込んで来た。

「やア、林さん」

「お、榊山君か」

「貴下の事をな、先生が、能く知つて居つてな」

「えッ、西郷先生が、吾輩を知つて居ると」

「うむ、征韓の一條で、一緒に、辭職を仕たんぢやさうだね」

「うむ、然うです」

「却々、君は、偉い人なんぢやさうだ。此處へ来て居つて、何故、訪ねて來ぬかと、先生が、言ふて居なすつたが、

何うぢや、吾輩と之から、一緒に居かぬか」

茲に始めて、西郷に會ふべき活路を得て、有造は喜び勇んで、榊山と連立つて、武村へ出駐けた。

五

西郷は、林が、鹿兒島へ着いた事を、他の者からも、聞いて居た。

辭職して歸つてから後も、東京に、部下の者を殘して、政府の秘密を、探らして居た。現に、評論新聞の記者であ

つた、海老原穆といふ人は、其一人であつた。政府の秘密は、言ふまでもなく、政府と有志の關係や、其他の事に就

いて、變つた事があれば、一々報告仕て居たのである。殊に、中央の有志が、何ういふ行動を、政府に向つて執るか、といふやうな事は、少しも油断なく、探偵して居たのであるから、林が、副島と相談して、鹿兒島に向つた、といふ事は、林の到着する前に、西郷の手許へ、通知があつたのである。所へ、樺山の話聞いて、何故訪ねて来ないか、と思つて居たのだ。然ればとて、林が来たからといふて、夫を直に、迎ひにやるといふやうな、輕率な事をする人ではない。夫を知らずに、林が、獨り苦んで居たのである。詰まり、一人相撲を取つて、尻餅を搦いたやうなもので、其處に、西郷と林の、輕重の相違が、現れて居るのだ。

一と通りの挨拶も済んでから、西郷に向つて、斯いふ事をいふた。

「先生が、職を辭して歸られる時分に、政府が、歸國を許すとも何とも、未だ沙汰を下さぬ中に、歸られたのであるが、苟くも、陸軍大將として、大切な軍職を有て居る先生が、政府の許可を得ずして歸る、といふ事は、甚だ宜しくない事である、と思ふ。既に、規則にも、漫りに職を離れるものは罪する、とある以上、政府は、先生を罰す可きであるのに、今以て、其事を爲さない。先生も亦、平然として居られる。斯様な事で、國家の紀綱といふものは、擧がるものではない。先生は、之を何と、考へられるか」

林の考へては、普通の議論を以て、西郷の心を惹く、といふ事は、至難であるから、側面の議論から、口を開かしたらば、或は、幾分の眞相を得る事もある、といふので、斯ういふ突飛な質問を仕たのであつた。然し西郷は、ニコ／＼笑つて居て、それには答へないで、

「木戸が、俺どんを憎む事は、非常に深いものであるから、汝が、國へ歸つて、板垣さんを煽動して、木戸に當らせると、木戸が憤勃となつて俺どんに向つて来る。其處で、天下の事は決るのである」と言ふやうな事を答へて、道の有造が、一日の談論も、要領を得ずに、終つて仕舞つた。雖然、此の簡單な、西郷の

一語に能く、政府に對する、不平の氣は、歴々として表はれて居る。木戸を煽動して、自分に向つて来るやうに仕る、と云ふ事は、詰まり西郷が、政府に對して、喧嘩を仕掛けるに就ての、正しい名義を取らうと云ふ考へである、といふ事が、略判つた。林は、西郷の許を辭し、旅宿へ歸つて来て、山中にも、此事を話した。夫から鹿兒島を出發して、佐賀へ廻り、江藤新平を訪ねやう、といふのが、二人の目的であつた。尤も、山中は、江藤の味方で、佐賀人でもあるから、故郷へ歸る譯になるのである。林は夫と共に、佐賀へ乗込んで、江藤に會はう、といふ譯であつた。

米の津まで来て、船に乗らう、とすると圖らずも、山中の知つて居る、佐賀の士族に、出會つた。それに依つて、江藤は、佐賀に居らずして、長崎の側の、深堀といふ所に、来て居るといふ、事情が判つた。若茲で、其人に會はなければ、佐賀まで、無駄足をする所であつた、乃て二人は、長崎へ向ふ事に、なつたのである。

六

何故、江藤が、深堀へ行つて居たか、といふ事に就ては、一應、其事情を、述べて置かなければならぬ。前回にも、言ふた通り、江藤の歸國は、征韓黨の同志が、不穩の計畫をして居ると、いふのを聞いて、夫を鎮撫する爲であつたのだ。處が、却々此連中の勢が猛烈で、鎮撫するどころではなく、却て江藤の方が、引込まれさうな様子になつた。此儘にして居ては、危険であるが、自分さへ居なければ、一時、其勢も挫けよう、といふ考へて、家人にも告げず、獨り颯然として、深堀の知人の許へ、避けて来たのであつた。

尤も、其事態に就ては、啻に士族が、過激であつたといふばかりではない。江藤も、征韓論に負て、歸つて来たムシヤクシヤ腹で、政府攻撃の氣焰を、吐いたこともあつた。夫に力を得て、士族等は、彌、過激な行動も、取るやうになつたのであるから、其點から言ふと、江藤にも、幾分の責任は、あつたのである。

深堀に來た事は、然ういふ事情からであるから、極秘密であつて、更に、人には、知らせなかつたのである。處へ、山中一郎が、突然、訪ねて來たので之には、江藤も驚いて、

『何うして、歸つて來たか、誰に、吾輩の此處に居る事を、訊いて來たか』

と言ふて、頻りに訝るのを、山中が、

『いや、夫は横濱の港で、貴下にお別れをして、夫より副島先生の邸に、御厄介になつて居つた事は、先般、書面で申上た通りであるが、此度、歸國をするといふのに就て、高知の林有造が、是非、西郷先生に會ひたいから、鹿兒島まで案内してくれ、其歸途に佐賀へ寄つて、貴下をお訪ねしたい、といふので、實は其案内をして、鹿兒島へ行つて、それから此方へ廻つて來たのです』

『爾うか、そりや、少しも知らなかつた。夫にしても、吾輩が此處に居る、といふ事を、何うして知つたのか』

『鹿兒島を立て、米の津まで來ると、故郷の者に會ひました。夫が、貴下の此處に居る事を、知つて居つて、告げてくれたものですから、道を變へて、直に此方へ、廻つて來たのです』

猶ほ、山中は、笑ひながら、

『貴下が、如何に秘密にした意でも、貴下ほどの方が動けば、誰かしら、知つて居るものです』

『林は、全體、何處に居るのだ』

『他へ、旅宿を取つて、兎に角僕から、其話を貴下に申上て、更に迎ひにやる事に、してあります』

『イヤ、そりや何うも、甚い遠慮をしたもんぢや。可し、吾輩が之から、出掛やう』

『貴下が、お出掛になるのですか、此方へ、呼んだ方が可いでせう』

『なアに、渡れて居る者を、招ぶまでもない。吾輩も會ひたく思つて居たのぢやから、行つて會ふ事にしやう』

『然うですか、御案内致しませうか』

『却て、吾輩一人の方が宜らう。君は、之から湯にでも入つて、休息したら、宜からう』

『夫では、私は然うしませう』

之から江藤は、山中から訊いた宿屋へ、林を訪ねて、來たものである。政治の事務を執らしたら、江藤の方が、或は、西郷より、優つて居たかも知れない。然し、人物の大小を言ふたら

格段の異があつた。林は、西郷に會ふ爲に、滿らない苦心をして、無駄に幾日かを、鹿兒島城下に、過して居たのであるが、而も、其苦しんだ事は、皆徒勞な事であつて、始めから、訪ねて行けば、何でもなかつたのである。夫を

獨りて苦て居たのは、夫だけ、西郷の人物が、大きかつたのである。然るに、江藤は、林の來た事を聞いて、自ら其

旅宿を訪ねるといふのだ。人を訪ねて行つたから、訪ねた方が小さい人物だ、といふのも、可笑な理窟であるが、然

し、會はうと思ふ有造の方で、其會ふ事だけに就て、苦心を爲るしない、といふ所に、味はひがある。此點から考へ

て見ると、江藤の人物は、西郷よりは、グツと小さかつた、といふ事が、明かに判るではないか。

林は、山中が出た跡で、湯に入つて、旅の疲れが出たものか、手枕でウト／＼して居ると、誰か、人が入つて來た

やうであるから、不圖、目を覺して見ると、意外千萬にも、江藤新平であるから、思はず飛起きて、

『やア、之は能くおいで、下された。此方からお訪ねを爲る意で、山中が行つたが、お會ひにならんのか』

『うむ、山中に會ふて、それから訪ねて來たのぢや』

『然うですか、さア何卒之へ』

夫から酒肴が出る。盃の獻酬で、大分話もはずんで來た。

『先生、貴下が、佐賀に居らずに、深堀へ來て居られる、といふのは、全體、何ういふ理由のですか』

江藤は、苦い顔をして、

『イヤ、夫に就ては、甚い失策があつて、話すのも面目ない事ぢやが、實は、例の征韓論の紛訟から、故郷の士族に

逡巡されて、一時、其勢を避くる爲に、此處に忍んで居るのぢやよ」

「は、ア、勢を避ける爲とは、何ういふ理由ですか」

「まア、夫に就ては、大分長い話もあるが、先づ掻摘んで言へば、斯う云ふ次第ぢや」

「うむ」

「政府は、征韓の事を中止しても、自分等は、飽までも之を實行する、と稱して、事務所まで捲へて、士族が騒いで居る。所へ、吾輩が歸つて来て、幾分か、繕ふて話せば宜かつたのを、有の儘に、打明け話をした爲に、却て、一層、激昂を増して、動もすれば、我輩が擔ぎ上られさうになつて来たから、夫では、副島や板垣と、約束した、鎮撫といふ事も、無になるから、兎に角、一時、其鋭鋒を避けて、幾日かを送つたらば、一同の氣も、鎮まらうと考へて、此處に来て居る譯なのぢや」

七

「江藤先生とも、言はれるお方が、然ういふ事情で、此處に避けて居る、といふ事は、實に意外千萬ぢや。能く馬に乗る者は、馬を押へる事が、出来なければならぬ筈で、多くの部下を有して、決死の覺悟を爲さしめるものは、又其部下の氣を押えて、其覺悟を止まらせるだけの、力がなければならぬ。夫が即ち、人の頭領たる價値であらう、と思ふ。然るに先生は、能く人の心を激せしめる事は出来、今夫を、押える事が出来ない、といふのは、先生の爲に、甚だ惜むべき事である。且、夫が爲に、此地へ避けて居る、と云ふのは、甚だ心細い譯ではないか。何故ならば、先生が此處に居る事を、若其士族の中で、知るものがあつて、一同揃つて、此處へ押掛けて来たら、先生は何うなさる。又此處を逃出すか。其逃出した先へ、又訪ねて行く、といふやうな事になつたならば、結局、先生は、

何うなさる意であるか」
無遠慮に、林が、一本突込んで来た。勿論、其言ふ所は、急所を刺して居るので、這の江藤も、此時は黙つて、林の説を聞いて居た。

「僕の考へる處では、先生が、此處に避けて居る、といふ事が、頗る危険な事であらう、と思ふ。早速、佐賀へ立歸つて、先生自ら、鎮撫の衝に當られるのが、至當であらう。又た、夫でなければ、不測の災禍が起きて、救ふ事が出来ないやうになるだらう。僕は偏へに、先生の佐賀へ歸られる事を、希望するのである」

「君の言ふ所は、一々道理である。此地へ避けた、といふ事は、吾輩一生の不覺であつた。宜しい、明日にも、佐賀へ歸る事に仕やう」
「無論、夫が宜からう、と思ひます」

話は、それ一段納まつて、更に、政界の事情や、岩倉一派の其後の様子などに就て、大分、面白い話も續いた。最早十時が過ぎたといふので、翌日を期して、江藤は歸つた。其跡で、林が執ら考へて見るのに、江藤ほどの偉い人物でも、世に時めいて、顯職に就て居た時と、今日の如き不遇に陥た時と、斯うも人物の上に、輕重の差が出来るものか、夫につけても、境遇にも制せられず、世間の壓迫をも受けず、超然として、其の大を成すものは、這に西郷先生である。然し、江藤が、故郷に歸る、といふ氣になつたのも宜いが、那の様子では、故郷へ歸つても、士族を鎮撫する事が出来ずに、却て擔ぎ上られは爲まいか。夫れにしても、話の行き掛から、自分も、江藤と、佐賀へ行くやうになつた日には、夫こそ自分も亦、其渦中に、投ずる事になるから、こりや一刻も早く、此地を立て、其難を避ける事に仕なければならぬ。と、早くも有造は、考へ付いたから、直に手を鳴らして、下婢を招だ。下婢は、怪訝な顔を

「へえ、之から、お立て御座いますか」

「うむ」

「夫ぢや、お泊りにならぬので御座いますか」

「然うぢや」

客が左様いふものを、無理に、引止むる事も出来ないから、妙なお客だ、と思ひながら、立て行つた。其跡で有造は、自分で行李の始末などを、仕て居る所へ、バタ／＼といふ寢音と共に、障子が開いた。半身ヌツと入つたのを見ると、夫は江藤であつた。

「やア林君、君、何を仕て居るのか」

林は、心の中で、失敗だと思つたが、今更仕様がな。

「いや、荷物の整理を、仕て居るのぢや」

「今、此處の番頭の話では、出立するといふが、何處へ立つのか」

「實は、東京を立つ時から、故郷許の母親が病氣であつて、是非、故郷へ寄つて九州へ廻れ、といふ書面が来て居たのを、先を急ぐ爲に、此方へ廻つて来たものであるが、今急に、夫を想ひ出したので、此方には、別に最早、用事も無いしするから、一晩も早く、歸らうと思つて、急に、準備を始めた譯さ」

「然うか、實は相談があつて、来たのぢや」

「うむ、そりや、何ういふ事ぢや」

「他ぢやないが、岩村高俊が、今度佐賀の權令になつて、乗込んで来た、といふ報知があつたのぢや。岩村は、君の實弟ぢやが、夫に就て、君の意見を聴きたい、と思ふ」
之は、有造も意外であつて、高俊が、佐賀の權令になる事は、少しも知らなかつた。勿論、政府の方でも、不意に

然う仕たのであらうが、江藤としては、随分、迷惑な事だらう、と察して、

「何ういふ御相談か」

「他ではないが、岩村の来た事は、差支ないが、今故郷から、使が来ての話には、鎮臺兵を率ゐて来たといふ。夫が甚だ宜くない事だと思ふ。權令は固より、文官であつて、兵馬を動かす權は、無い筈ぢや。佐賀に、叛亂が起きて居る譯でもなし、太平無事の場合に、文官が、兵を率ゐて来る、といふ事は、佐賀の士族を侮つた仕方だと、思ふが、君は、何と考へるか」

「そりや、怪しからん事だ。充分に、政府を賣る價値はあらう。然し高俊は、僕と異つて、戊辰の當時も、相當に武功があつて、今日になつたもので、戦争は、却々巧手な奴ぢやから、油斷はならぬ。充分、覺悟を仕て掛らぬと、甚い失策をするかも知れない。僕と、兄弟の關係ではあるが、今日では、議論が異ひ、立場も違ふのであるから、渠の生死は、僕の興かり知る所ではない。貴下が、僕の弟だといふやうな重て、幾分の斟酌をする、といふやうな事は、却て能くならう、と思ふ、無遠慮に、やつた方が宜いでせう」
此男らしい答へを聞いて、江藤は、

「いや、夫までの覺悟を聞けば、最早満足である。道は、君の答へである」

といふて、非常に、江藤は喜んだ。夫から更に話は、有造に、佐賀へ同道を仕る。といふ事に移つて来た。原來と、有造は思つたが、色にも出さずして、頻りに、故郷許の母の病氣を口實に、到頭、佐賀へ行く事は、斷つて了つた。

八

林の忠告に基いて、江藤は、佐賀へ歸つたが、遂に、士族の不平を、押える事が出来ないで、却て、其首領に、押上げられ、叛逆人の名を得る事になつてしまつた。併し、さうした事態に、陥る前まで、江藤の苦心は、容易なもの

ではなかつたらう、と思はれる。力及ばずして、此に至つたのは、如何にも、同情すべき點がある。殊に、政府が此連中に對する、前後の仕向けが、甚だ穩かてなかつた。事の起きない中に、既に、叛徒の取扱を、仕て居たのであるから、然なきだに、不平滿々て居た士族が、彌憤慨の度を昂めて、遂に、血を以て争ふ覺悟になつたのも、一概に無謀な事とばかりは、言へないのである。併し、事情は孰れにしても、朝廷の兵に、抵抗仕たのであるから、叛逆人の名は遁れない。江藤の末路は、甚だ悲惨であつた事は、自然の結果で、之も已む事を得ないのである。

佐賀の士族が、如何に、必死の働きを仕たとて、多寡が、千か二千の小人數ではあるし、又、事の決したのが、だら／＼であつたから、兵器彈藥は言ふまでもなく、兵糧の用意さへ、充分でなかつた。勝敗の數は、事の起きた時、已に決して居る。加ふるに、政府は、此兵亂を、永く續かせる事は、最も危険である、といふ見込から、一刻も早く叩き潰して了はう、と、非常な決心を以て掛つたから、僅か十幾日、全く鎮定されて了つた。

江藤は、敗軍の中にも、既に、自分の執るべき方針を決めた。夫は、自分が此度の事を、起したのは、全く、朝廷に背く心からではなく、征韓論の行掛りから、不平士族に擁されたものであつて、其鎮撫に、力を致して居る最中に政府が頻りに、鎮臺兵を差向けて、戦ひを挑むが如き、調子があつたので、遂に衝突を仕たのであつて、所謂叛逆なるものとは、大分事情が異ふから、切て其事情を明かにすれば、此事件で如何なる處刑に、行はれやうとも、それは覺悟して居るが、只朝敵の名に依つて、亂臣賊子の取扱を受ける、といふ事は、心外であるから、一度上京仕て此事情を訴へ、然る後に、政府の處分を甘んじやう、といふ覺悟をした。遂に、官軍の包圍を遁れ、非常な辛苦を忍んで、一度、鹿兒島へ入つたのである。

鹿兒島には、無論、西郷が居るから、此事情を打明けて、暫く身を隠し、官軍の警戒が、幾分か弛んだ時分に、中央に乗出さう、との考へてあつた。雖然、然ういふ都合にならぬ、事情もあつて、又も、鹿兒島を跡に、日向へ向つた。當時、江藤に従つて行つたのは、江口十作と、船田次郎といふ、二人の書生であつたが、之は、無論、途中に於て、江藤の身に、萬一の事があつた場合には、討死を仕ても、江藤を救はう、と云ふ決心で、従つて行つたのである。飢肥隊の事を語つた時分に、鳥渡、其一端を述べて置いたが、飢肥の小倉處平に會つて、此人の盡力で、江藤は、油の津から、四國へ渡つたのである。

此時の江藤としては、何う仕ても、四國へ出て、更に中國に渡るより、他に執るべき道は、なかつたのである。然し、高知へ入つて、林有造、片岡健吉の二人を、訪ねやうといふ、考へになつたのが、抑事の誤りであつた。其頃の林、片岡は、既に政府から、危険の人物と見られて、嚴重に警戒されて居た人々であるから、之を、佐賀叛徒の首領たる江藤が、訪ねるといふ事は、薪を懷いて、火に飛込むやうなものであつた。果哉、高知へ入り込んだら、最早、其筋の者に知られて、逐廻された末に、遂に甲の浦に於て、捕縛されてしまつた。

林と片岡の二人が、其時に、死を以て、江藤を救はなかつたのは、輕薄な仕方であつた、といふやうな議論も、世間には、あつたやうだが、夫は、當時の事情を、精しく知らないで、皮相的に見ての議論で、林、片岡の爲には、誠に氣の毒である。況や、二人が其筋へ密告仕て、江藤を、押へさせたなどといふ事は、無論、取るに足らぬ臆説である。要するに、江藤を想ふの餘り、斯ういふ事も、言ふのであらうが然ういふ想像は、斯る場合に、爲すべきものではない。故に著者は、江藤が高知へ入つたのが、抑誤りである、といふ斷案を、下すの他はない、と思ふ。

九

然し乍ら、江藤の最後を遂げた、彼の處刑の事に就ては、少しく述べて置きたい。夫は他でもないが、政府の、江藤を憎む餘り、彼れまでの極刑に處した、と云ふ事は、確かに、後世の批難は、遁れないのである。

殊に、佐賀臨時裁判所に於て、江藤以下の裁判を仕たのが、高知縣出身の河野敏謙である、といふに至つては、實に、意外の感に、打たれるものが多からう。政府に於て、江藤を押へた時に、既に、極刑に處するといふ事が、内定

して居たのであつた。今日のやうに、司法權は、獨立して居たのではないから、内閣の干渉に依つては、裁判官の頭などは、何うにでも、入換へが出来るのである。此點から言ふと、今日の裁判所なるものは、誠に安全なものである。然し、時々、非常識な世間見の裁判官や、検事の爲に、良民が、苦しめられる事もあるが、夫にしても、司法權は、確かに獨立して居るのであつて、其運用の妙を誤るものは、本人の力量が、足らないからであるから、夫は何うも、致方がない。苟も、法官である以上、憲法の保障によつて、何者の干渉壓迫も受けず、心の儘に、裁判をする事が出来るのであるから、其の有難い憲法の下に於て、間違つた裁判をするやうな奴は、假し裁判官にならないで、他のものになつても、必ず、間違つた事をする奴である。何れにしても、國の爲めにはならない、人間であるから、然ういふ人は、早く死んで呉れるのが、宜いのである。

豫め、審問も仕ない中に、刑の適用が極つて居るなどは、恐れ入つた事である。江藤が、捕縛された時には、既に極刑に處する、といふ事が、内定して居た、といふ事は、當時の關係者が、如何に辯疏をしても、徒勞な事である。況して、河野敏謙が、此裁判を引受けた、といふ事は、公私の分を明かにして、職務の爲に、私情を捨てたものであるといふ、美しい辯解は、あるかも知れないが、然し、普通の人情から考へても、何も此際、河野が、此裁判を引受けなくても、宜かつたらうと、思ふ。何故、そんな事を言ふか。夫には、多少の次第がある。

河野は、初め益彌といつて、土州の藩士であつた。慶應の初年に、罪を得て、藩獄に下されて居たのが、幕府が倒れて明治政府が起り、此政體の變革に會ふて、罪を許されて、再び娑婆の風に、當る事になつたのである。雖然、夫が爲に、維新の風雲にも、際會する事が出来ないうて、天下の事の定まつてから、放免されたのであるから、一身の振方にさへ、困るやうになつて、大阪へ出て來た。其時に、大阪の知事を仕て居たのが、後藤象次郎であつた。後藤は、武市半平太の一派に暗殺されたる、吉田元吉の従弟であるから、河野とは、全く仇敵の如き關係になつて居た譯だ。然るに河野は、其後藤を訪ねて、自分の進むべき道を、求めたのである。後藤といふ人は、然ういふ點になると、

めて大きい人で、河野が、自分に倚つて來たといふ事を、頗る面白く感じて、江藤新平に、紹介した。當時の江藤は、司法卿參議といふ肩書で、内閣の一人としても、却々勢力のあつた人であるから、食客の一人や二人、拒むべき譯もなく、又河野は、普通の書生と異つて、一塵の有志を以て、任じて居たものであるから、江藤も喜んで、之を世話する事になつた。殊に、江藤は、薩長の藩閥が、如何にも我儘をするので、何日か一度は、夫と衝突を仕て、第二の維新を行はなければならぬ、といふ覺悟があつたので、努めて人材を養ふて、自分の足許を固める事に掛つて居た時であるから、河野に對しても、實に親切を極めたものであつた。後藤は、其の事情を、能く知つて居るから、江藤の處へ、世話を仕たのである。斯ういふ關係から、江藤と河野は、深い交はりがあつて、江藤の推舉に依り、司法省にも入つたのであるから、河野の爲には、江藤は恩人でもあり、長官でもあり、却々此人を、極刑に處すべき内命の下に、裁判官になる、といふやうな事は、人情の上からいふて、出来ないのが當然である。夫れを、強て拒まなかつた、といふのは、甚だ怪しからぬ事である。併し、何でも構はず、人間の忍ぶ可らざることを、忍んで爲し得る者が、眞に豪い人であるとなれば、河野は、豪い人なのである。

一〇

大久保利通といふ人は、存外、公平な人であつたが、其公平が、動ともすると、冷酷に陥つたといふのが、此人の一大缺點であつた。然ればこそ、兄弟にも等しい間柄であつた西郷を、議論の爲には、政府から逐出して、悔やまなかつた位である。況んや、江藤などに對しては、少しも、尊敬の意を有つて、見て居たのではないから、江藤の佐賀に、兵を擧げると聞かや、自分は、内務卿でありながら、態々、下關まで出張つて、征討に付いての、指揮までも仕た、といふ位である。彌江藤が、縛に就いて、佐賀に裁判を開く、といふ時分にも、少しの假借なく、極刑に處して仕舞へ、といふのが大久保の意見であつた。

然るに、江藤が能く、書生を愛して、食客なども、常に三四十人は、邸に居たといふ位に人の世話も仕て居たし、部下の官員などに對しても、温情を以て、接して居たので、多少とも、政府の内情が判つて居る者は、此裁判の役に、當る事を避けて、種々の口實の下に、關係せぬやうに仕て居た。或夜、竊に、大久保は、河野敏謙を、其邸に訪ふた。其當時の大久保の勢力は、實に大したもので、政府の大久保か大久保の政府か、其區別さへ、判らなかつた位に、甚い勢力を有て居たのである。其大久保が、河野位の役人を、其邸に訪ふた、といふのは、容易ならぬ事であつた。河野も、是には驚いたのである。其時に、大久保が、河野の手を執つて、涙を流して、

『國家の爲であるに依て、江藤を處分すべき裁判を、引受けて呉れい。汝の一身の事は、俺が引受けるから』

といふて、大久保に泣かれた。夫れが爲に、河野は、決心を仕て、

『宜しい、お引受けを仕ませう』

と答へた。之が爲に、河野は、佐賀へ出張する事になつたのである。

夫にしても、當時の法律からいへば、斬罪、絞罪、梟首と、三つあるのであるから、一番軽く済まざうとすれば絞首、或は少し重ければ斬罪に仕て、濟むのであつた。夫を極刑といふから、梟首に仕たのだ。昔て言ふ獄門であるから、之以上の慘刑はない。河野が、前に言ふたやうな關係があるにも關らず、江藤に向つて、此極刑を宣言仕たといふのは、全く、人情に外れて居なければ、出来ない事であつた。今日に至るまで、佐賀人が土州人に對して、何となく、喜ばぬ情のあるのは、斯ういふ處からである。

政府が非常に焦つて、佐賀へ兵を出したのは、一日も早く鎮定して了はないと、他の方面から同じやうに叛逆が始まるのを恐れたからで、之は無理もないとして、大久保が、江藤の死を救ふ事をせず、却て之を、極刑に處したといふ事は、恐らく大久保の一生に於ての過ちであつたらう。人は、慘刑に處せられたから、夫れで自ら悔ゆる、といふものではない。又假に、其人が悔ゆるとしても、慘刑に處せられない人までが、夫を恐れる、といふ事は、ないもの

である。之が爲に、一層激憤して、政府に敵對すべき覺悟を、強めるものがあるかも知れない。其極刑の別らない人では、なかつたらうに、裁判官に任せて置く事が出来ないで、態々、自分が乗出して、江藤に對する處分を決したといふのは、大久保としては、甚だ感心出来ない仕方であつた。

林や片岡等が、之を聞いても、必ず快くなかつたに違ひない。其他の人にしても、政府に對して、不満を懷いたものは、無論あつたらう、と思ふ。假令、政府に従ふて居た人でも、心ある者ならば、必ず、不快を感じたに違ひない。現に、斯ういふ話がある。

江藤が、獄門になつて居る寫眞を、民部省の一室に掲げた時に、民部大丞の河瀬秀治といふ人が、非常に怒つて、『江藤は、假令、叛逆の名を得て、極刑に處せられたにもせよ、既に、處分は済んで居るのである。然るに、此寫眞を掲げて、衆人に見せ付るといふのは、刑罰を、再びするも同じ事であつて、是以上無慙な事はあるまい。全體、何者が申付て、斯様な事をさせたのであるか、速かに、外して仕舞へ』

といつて遂に、之を取外させて仕舞つた。官吏を仕て居た人でも、心あるものは、此通りであつた。河瀬といふ人は、木戸孝允の妹婿に當る人で、木戸が死ぬと、政府を退いて、民間に下つた。本郷の壹岐坂に、上宮教會といふものを興して、聖徳太子を奉讚し、加藤咄堂、高島米峰、境野黄洋等の學者思想家に、新佛敎の宣揚に努めしめたのが、此人である。昭和三年、品川の妙華園に於て、世を去つた。

一一

佐賀の亂が終つて、世は一時、泰平に歸した。此際につつたのが、例の國會開設論であつた。明治六年に、征韓論で、政府を退くと同時に、板垣、後藤、副島、江藤の四人と、岡本健三郎、由利公正、古澤滋、小室信夫等の連名を以て、民選議員設立の建白を仕て置いたがそれが又、燃え出したのである。然し、此時は、最早、板垣の獨舞臺で

あつて、土州の有志は、擧て板垣の指揮の許に、働いたのである。片岡健吉は、極々眞面目な人であつたから、板垣と共に、國會開設の請願で、面もふらず、突進して行つたが、林有造は、例の調子で、片岡とは、全く性質も異つて居たし、夫れに何方かといへば、大風呂敷の方だから、國會請願といかやうな、地味な仕事は喜ばない。仍且、兵力を以て、政府を倒し、根柢から、造變へて行かう、といふ考へがあつた。之を爲すには、澤山の金が必要といふので、荐りに、種々の事業に手を出して、金を造る事に、苦心して居たのである。

政府の反對といふても、其理由は、十人十色である。政府を倒して、執つて代る、といふ事は、變りはないが、政府に對する不平の理由は、各自異つて居た。結論が、同じであつたから、様々な者が、四方から集つて来て、夫が隠然、一團になつて居たのである。陸奥宗光は、當時、元老院幹事として、相當の權勢もあつたが、夫にすら、安んずる事が出来なかつた。假令、官位は高くとも、元老院の如き、隱居所へ押込まれた、といかのが、不平であつたのだ。尤も、政府の方にしても、陸奥は恐ろしかつたのである。陸奥が、薩長藩閥を攻撃した論文を、木戸孝允に示したのが、明治元年であるから、其時分より、政府に對する不平は、甚しかつたのである。諺に言ふ、眼の寄る所へ球の譬で、集つて来るものは、仍且、不平黨が多い、林有造、大江卓を始め、孰も凄味のある人物ばかりが、集つて来て、荐りに、政府攻撃に、日を暮して居たのだ。何うしても、何か初る筋合になつて居たのだ。

其内に、西郷派と政府の間が、漸次、折合が悪くなつて来て、薩南に、穩かならぬ企てがある、といふ噂が、日に高くなつて来る、ばかりであつた。之を耳にする毎に、一同の野心は、漸次固くなるばかりであつて、逆も、自分達の方だけでは、今の政府を倒すと、いふ事は難かしいが、若、風説の如く、西郷が決心して、事を起したならば、大と相應じて、自分等も、大に働いて見やう。然うなれば、此政府を倒すのは、容易い事である、と思つて、竊に、西南の空を臨んで、待構へて居たのであつた。

大江卓も、晩年は、すつかり、世と遠ざかつてしまつたが、一時は、頗る振つたものである。古い因習の下に、懽

まされて居る、同類を数はんと、種多非人の職を斷して、平民の戸籍に編入仕たり、或は、辯論解放令を出して、人身の賣買を禁じたり、却々奇抜な事をやつて、大いに世間を、驚かしたものである。神奈川縣令をして居た時分に、英國公使のパークスと衝突して、遂に工部省へ左遷された。鐵道省で用ひる、規則の纏まつたものは、大江の手に依つて作られたものが多い。併し、工部省へ左遷されたといふのが、頗る不平で、到頭政府を退いて了つた。後藤が作つた蓬萊社の整理を引受け、之も一段落ついて、閑散の身となつた時、何事か爲さねば居られない、といふ、叛逆氣質に驅られて、屢陸奥の家にも、出入して居る中に、遂に、西郷派と相應じて、事を起さう、といふ事が、略決つたのである。

政府の方でも、注意は仕て居たが、此連中に金の無いのを見越して、彼れ等に何が出来るものか。と、幾分か、輕んじて、居た點もあつたのだ。そのうちに、同志は追々、殖えて来るし、計畫も、漸次進んで来た。既う、西南に事の起るのを、待つばかりである。

一一一

伏見鳥羽の戦ひが濟んで、幕府は全く倒れ、茲に薩長土肥の四藩が、主として天下の問題を、扱ふ事になつた。然るに、征韓論の爲に、土佐派は政府に離れて、板垣も、後藤も、全く民間の人となつて了つた。夫が爲に、土佐派の政府に對する感情は、甚だ面白くなかつた、僅かに、明治八年の大防會議の結果として、板垣は、入閣仕たが、夫も眞の束の間の事で、忽ち板垣は、退職仕て了つたから、土佐派は、頗る面白くない日を、送る事になつた。後藤、板垣の二人が、志しを得なければ、其他の人達は、無論のこと、頭を上げる事が出来ない。従つて、何かの機會を捉へて、政府へ割込むの考へは、絶えずあつたのだ。土佐派の他にも、猶、政府に留つて、薩長二藩の壓迫に堪へず、始終、不平を抱いて居たものもある。自然、此兩派が、接近して来るのは、已むを得ざる所で、即ち、林の一派と、

陸奥の一派が、西郷の擧兵を幸ひとして、結び付たのは、固より、當然の事態であつた。愈々、西郷自ら、擧兵の事に、關係して居る、といふ事が判つたので、是非、此機會を逸さず、一舉にして、政府の樞機を握らう、といふ計畫は仕たが、然し、茲に一ツ困る事は、金の問題である。政府を、現在の儘にして置いて其へ板垣、後藤を、割込ませる、といふのも、一策であるし。又政府を轉覆して、全然新なものにするといふのも一策である。何れの道を取るとしても、先立つものは金である。殊に林、大江、陸奥などの側から言ふと、兵力に訴へて、政府を、根本から改革するといふのが、目的で、是非、然う仕たい、と考へて居るが、先立ものは金であるから之に就ての苦心は、一通ではなかつた。

幸ひに、其前から、土佐國の白髮山を、林の手で、政府へ賣付けける運動を、仕て居るから、少し位の價の差に拘らず、早く賣付けて、其金を手に入れば、少くとも、十五萬圓はあり、何うか事を起すには足る、といふので、中村貫一を、専ら其係りとして、活動させる事になつた。同時に、林は、一度、國へ歸つて、同志の纏まりも、付て置かなければならぬし、それに、後藤を煽り付けて、一日も早く、征討軍を薩摩へ向はしめて、西郷と政府との關係を、全く隔離して了はなければならぬ、といふので、二月の十四日に、東京を發つ事になつた。

所へ、大江卓が訪ねて来て、兎に角、木戸を巧く説いて、此際、後藤を、政府へ割込ませる策を執らう、といふ事になつた板垣を割込ませたい、のも無論ではあるが、然し、板垣を入れるといふよりは、後藤を入れる方が、容易く行きさうであつたから、其道を取らう、といふ事になつた。何故、板垣より、後藤の方が容易いかと、いふと、斯ういふ場合には、後藤といふ人は、名分などは少しも構はないで、入りさへすれば宜い、といふ主義を取る風があつて、物事が、大掴みで、理窟の少かつた人だが、板垣は、全く是れに反して、一進一退、切て理窟が、従いて廻るから、斯ういふ時の勳人としては、甚だ不向である。其性格を、能く看破て居るから、林と大江の考へは、先づ後藤を、入關させるのを以て、提督としたのである。

横濱へ来て、東京丸といふ汽船へ乗込むと、後藤、板垣を始め、中島信行なども居て、船中は、大分賑つた。神戸へ行くまでの間に、大分相談も進んだ模様であつた。彌、神戸へ着いたから、林は、更に後藤を説いて、直に京都へ、向はせることに仕た。板垣は成可く、京都へ入らないで、直、國へ歸るやうな事に、林が取計らつて了つたのである。當時、天皇陛下に於せられては、京都の行在所に、御在遊ばされたのであるから、木戸、大久保、三條等の大官は、皆左右に従つて居た。折柄の西南の變亂であるから、京都は却々に、混雜して居た。

若、板垣を京都へ入れて、木戸に會せるとなると、頗る危険なのは、板垣といふ人が、元來、戰爭の上手な人で、維新の際にも、何方かといへば、武功の多かつた人であるから、木戸や、三條に、泣付かれて、萬一にも、西南征討軍の一部でも、引受けるやうな事になると、何しろ、對手が西郷であるだけに、板垣の名に、瑕のつくやうな場合が起る事もあらうし、若又、是を拒絶する事になると、政府と反目する事になる。何れにしても、板垣の立場は、甚だ難かしい、と考へたから、寧ろ、京都へ入らせないで、國へ歸せば、頗る妙策である、と考へて、林が、斯ういふ計らひを仕たのだ。

一一三

此際を利用して、後藤を入閣させやうとした、事は、全く手違になつて了つたが、初めから、それには、左まで重きを置かなかつた事であるから、大した失望も仕なかつた。寧ろ、兵を起して、西郷と相應じ、政府を倒すといふ事は林等の大目的であつたから、其運びさへつけば、後藤入閣の策に敗れても、敢て悔む事はないのである。

却説、林は、板垣と共に、歸國するのであつたが、途中で板垣に別れて、直に、高知へ入つて来た。是れは、立志社の重立たるものを集めて、大體の方針を、決て了ふ爲であつた。其に付けても、板垣が、一緒に居たのでは、都合が悪いから、拔駈を仕た、といふ譯になる。當時立志社の重立たる者として林の招きに應じて、集まつた人々は、片

岡健吉、谷重城、山田平左衛門、池田應助、平尾喜壽、島地正存、森脇爲樹、小谷正元、廣瀬爲興等の連中であつた。

先づ中央政界の事情も聞いて、此度の企てに就いて、漸々、相談になつたが、然までの異論もなく、議は忽ち決して、兎に角、林が銃器其他の手筈を整へたらば、立志社の壯士は、此連中が、一纏めにして乗出すといふ、事に決つて、それから、金の運動に掛つたのである。此際に於て、林が最も苦心したのは、立志社と、反對の位置に立てる古勤王黨の一派に就てであつた。此方が、壯士の人数も多いし、強い者も、却々居たのである。巧く取入れなければ、立志社が事を起した、と聞いて、足許から、此古勤王黨の爲に妨げられたら、夫て萬事休して了ふので、何うしても此一派を、押へて置かなければならぬ。

乃て島地正存を、古勤王黨の島村左傳次の所へやつて、説付けさせた。處が、島村も、立志社とは反對でこそあるが、政府に對しては、非常に不平があつたのだから、其點に於ては、共に事を爲さう、といふ事になつた。大石彌太郎、池地退藏、桑原平八、森新太郎、安岡權馬、客崎頼太郎などいふ、一騎當千の連中も、島村の説に従つて、立志社と共に、行動を執る、といふ事になつた。

乃て林が、双方の人員を調べて見ると、立志社には、五百人の壯士がある。古勤王黨が、東西二組に別れて、東組は四百人、西組は七百人ある。兩社を併せると、千六百人になる。假に、實戦に堪へるものを、其の半と見ても、八百人はある。此八百人の人数があれば、浦戸邊から、船で乗出して、泉州堺浦へ着き、那れから、一直線に、大阪へ突貫すれば、大阪城は、鎮臺兵が西南へ向つた爲めに、僅に一箇中隊の少數で、守つて居るのであるから、之を蹂躪するのは瞬く間である、といふやうに、着々、見込は付いて行くのであるが、獨り意の如くならないものは、例の金の一條である。是には林も、少からず苦心を仕たが、國に居たのでは、何うにも仕様がなない。乃て、中村貫一の音信を待つて居る

と、中村から、電報が來た。披いて見ると、山の金は、樺が居なければ、政府が下げて遣さぬ、といふ意味の文句であつたから、於是、林は旅装を整へて、東京へ上る事になつた。

茲に、一つ、面白い話があつた。船の都合で、陸路を阿波へ出てから、船に乗らうといふので、其際に徳島支廳長をして居た、平井直次郎を、徳島に訪ねる事になつた。此平井が、即ち後の西山志澄である。西山は、維新の志士、平井收次郎の養子になつて、平井家を繼いで居たので、之にも充分、今回の目的を明して、同意をさせた。然るに、金の事だけを言はなかつたのである。何故、之を言はなかつたか、といふに、別に辯解する程の、理由もない。林は迂闊して、基金の相談を仕なかつたのだ。若し此時に、金の話を仕たならば、此事件は、意外な進捗が付いたかも知れなかつたのである。それは西山が、徳島支廳長として、縣の金庫を、預かつて居たのだから、一萬や二萬の金は、何日でも、自分の意の通りに、する事が出来たので、若、林が、金の話をすれば、左まで苦しまずとも、此地で、金は調ふたのである。然し、林の身に取ると、政府へ責付た、白髮山の金が十五萬圓も、鼻の先に、ブラ下つて居るのだ。又其爲に、今度、東京へ行く所であるから、自然、金の話を仕なかつたのであらうが、今日から見れば、實に迂闊な話ではある。然し、味はふて見ると、頗る面白い。

一四

最初、林と大江の間に、學兵の相談があつて、陸奥の同意を得た時分に、葡萄牙人のロザーといふものが、上海に八百挺のスナイドル銃を、持て居るといふので、岡本健三郎の紹介を以て、ロザーと、其鐵砲を買取る、約束をして置いたのである。ロザーは、國籍の上からいふと、英吉利人であつて、却々山氣のある、面白い異人であつた。維新前から、日本へ來て居て、能く日本の事情にも、通じて居つたので、此約束は、容易く出来たのである。尤も、手附金を遣らなければならぬのであるが、それは中村貫一が、白髮山の金を、政府から受取つたら、其内で拂ふて置く積

であつた。處が、本人の林でなければ政府が、金を渡さない、といふのであるから、ロザイの方へは、手附金を拂ふ運びとならなかつた。

林が、東京へ着いて見ると、鐵砲の方は、斯ういふ手違ひになつて居て、ロザイへ漸次掛合つて見ると、其鐵砲は手附金が渡らなかつたから、上海の倉庫に、未だ收つてある。金さへ渡せば、直にでも取寄せるといふのであつたから、サア然うなつて見ると、此鐵砲を手に入れるのが、第一の仕事であるから、政府へ對して、頻りに、白髮山の代金下附の、運動を始めた。

然るに、林の連中が、何か政府に對して、計畫を仕て居るといふ事は、右から左りへ、筒抜けに知れて居たのだから面白い。金さへ持たせなければ、何も出来ないものであるから、凡そ、融通を付けやうと、思ふやうな先は、政府が手を廻して、チャンと差止めてある。白髮山の代金も、様々に口實を設けて、容易に拂渡さない。然らば他へ賣るから、買上げは取消て呉れ、といふと、容易に、之も許さない。詰り魚を吊るして、匂ひだけ嗅がして、猫を苦しめて居ると、少しも違はなかつた。

彼是して居る中に、彌、政府から、金が下るといふ事になつた。大藏省の大書記官郷純造から呼び出されて、有造が、行つて見ると、十五萬圓の金は下つた。雖然、新公債證書で、下げられたのだから、是には有造も、聊か驚いた。漸次、郷に掛合ふと、西南の事變が起きて、政府に於ても、金が逼迫して居るから、公債で渡すのだ、といふ、對手が政府だから、喧嘩にもならぬ。據らなく、其公債を擔ぎ廻つて、何處かへ擔保に入れて、正金に換へやうとすると、其頃の事として、十萬圓内外の金を、公債擔保で貸付けやう、といふ者は、然う澤山になかつた。又然ういふ事に、應じて呉れる連中には、政府から、差止めの運動が、仕てあつたから、折角の林の奔走も、水の泡となつて金の融通は、更に出来なかつた。融通が出来ないとすると、十五萬圓の公債書は、反古紙同様である。苦心修養の結果、三菱會社の岩崎彌太郎に繼つて、一時、金を融通を頼んだ。併し、岩崎の方へも、政府の手が、

避つて居たから、僅かに、一萬五千圓の金を、融通するに過ぎなかつた。其上に、非常な有利の證券を取られて、公債證書は、岩崎の手に預かれて仕舞つた。而て見ると、十五萬圓の公債證書はあつたが、實際に使ふ金は、一萬五千圓しか、出来ない結果になつたのである。兎に角、一文無しの場合であるから、一萬五千圓でも、金が出来れば、無いは優、といふ考へて、之を見せ金に仕て、國許で、跡の不足は拵へるといふ、事に覺悟して、有造は、大阪を経て、國へ歸る心算になつた。

然るに、約束の日になつて、三菱會社へ行つて見ると、社長は昨夜、神戸の支店へ、急に行つたから、彼方で受取つて呉れ、といふ妙な次第とは思つたが、何うせ、國へ歸るには、必ず足を入れる所である故、多少の疑惑は、抱いたやうなもの、止むを得ず會社を出て、横濱で船に乗つて、海路を神戸へ、廻つたのである。

神戸へ着いて、三菱の支店へ、岩崎を訪ねると、未だ社長は來ない、といふ。金のこと、聞くと、一向知らぬ、との答へだ。こりや變だな、と思つても、對手のない喧嘩は出来ない。流石の有造も、是れには、些か閉口した。

一五

十五萬圓の公債證書に對する、一萬五千圓といへば、僅に二割であるが、然し、明治十年當時の一萬五千圓は、却却大金の中であつた。社長の命令が無ければ、渡せないといふのも、決して無理ではない。夫にしても、岩崎が、何故其事を、申付けて置いて呉れなかつたのだらうか。岩崎自身の到着が、遅れるとしても、支出の事を、申付けて置いてさへ呉れば直にも、渡す事も出来るであらうが、實に不行届きな次第だ、とは思ふけれども、對手のない相撲は、取りやうもなく、如何に有造が智者でも、之には、始ど弱つた。

處へ、片岡が、國から上つて來たので、林が逢つて、其事情を聞くと、「何分にも、君の計畫が後れ勝であるし、夫に西南の戦ひも、漸次進んでは來るが、熊本城が容易に落ない。日一日

と、永引くに從つて、薩軍の不利は言ふまでもない。といふ所から、國許の同志が、大分倦て来た。此儘に仕て置いたならば、最初の約束通り、いざといふ時に、果して、人数が揃ふか何うか、其邊も判らない。乃て自分の考へては、寧ろ、國會開設の請願で、政府を攻付けるのが宜らう、と思ふ。既に同意の調印をした建白書も、此處に携へて来た。

といふ話であつた。之を聞いて有造も、意外の感を起した。假令、自分の計畫が、幾分は後れたにもせよ。夫が爲に同志の決心が動くやうな事では、今後の事が案じられる。然し乍ら、今更に、此事を抛つ、といふ事も出来ない。兎に角、歸國して、最後の策を決しやう、と早くも考へを決て、幸ひ其晩、浦戸へ向けて、出帆する汽船があるから、夫へ乗つて、歸國をする事に仕た。

果然、國へ歸つて見ると、片岡の話よりも、面白くない兆候がある。乃て、兵は拙速を貴ぶ、といふ、古人の言に基いて、一刻も早く、事を起して了ふに限ると、決心して、さて何丈けの人数が出来るか、といふ事を、調べて見ると、前の豫算通り、八百人は確かに出来る。然うして見ると、此八百人を浦戸へ集めて、自分の神戸から乗つて来た汽船、若くば、それと同じやうな汽船を奪ひ取つて、泉州堺へ乗付ければ、事は、立所に成る、といふ豫算が立つた。夫から、何れ程の銃器が手に入るか、といふ事を、漸次調べて見ると、流石に古勤王黨では、三人に一挺宛位の、鐵砲の用意はあつたが、立志社の方は、存外、鐵砲の数が少く、偶あつても、極めて舊式のもので、實際の役に立たぬ、といふやうなのが多かつた。

縣廳の官吏には、乾兒が、澤山入つて居る。尤も、其頃の高知縣廳は、殆んど役所を擧げて、立志社の社員といふても、宜い位で、立志社の勢力は、偉いものであつた。其官吏の中で、銃砲彈藥の係を、勤めて居るものを呼付けて、竊に縣廳の威力を以て、集めたならば、何れ丈の、銃砲彈藥が集まるか、といふ事も、實地調査を爲さしめる事に仕た。計畫は、斯の如くにして、漸次進んで行つたので、夫々重立つた者へも、自分の意中を明かして、疑りに、有造

は、擧兵を急いだのである。然るに、中村貫一から、電報が来て、良い鹽梅に、スナイドル銃の事が、都合よく運んで、手金を造りさへすれば、神戸で受渡しが、出来るまでの運びになつたから、直に、神戸へ向つて行け、といふ通知であつた。然うなれば、人間は既に充分であるし、機械さへ手に入れば、事が擧られるのであるから、跡の事は、同志の重立ちたるものに頼んで置いて、有造は、直、神戸へ向つて、出發したのである。最初は、金のことでまごつき、その次ぎは鐵砲のことで、彼是れ無駄な手数を、かけたから、他の事の運びが、總て齟齬つて了つた。當時の事情からいふと、無理もないことでは、あつたけれど、林を始め、一同の東奔西走も、さらに甲斐がなかつたのは、全く、最初からの準備が、誤つて居たからである。併し、是れとても、成敗の跡から視て、批評であるから、當事者となつたら、あれ以上のことは、出来なかつたかも知れない。

一六

何事に依らず、企てた事が、成功する時は、とん／＼拍子に、運びが付いて行ものであるが、失敗に終る時は、當然成らなければならぬ事でも、破れて、妙に、調子の整はぬものである。其頃の林は、自智力餘りあつて、座にして、百里の先を見るの、明はあつたけれども、幾分か、事を焦る氣味があつて、夫が毎も、計畫を傷つけて居たやうである。夫に猶一つは、餘りに、自信力が強すぎて、政府の人を見る事が、如何にも、輕かつたので、此計畫が、最初から、政府の爲に覺られて居た、といふ事を、少しも氣が付かなかつた。只何となく、自分は注意人物として、警戒をされて居るのである位に、考へて居たのであるから、折角に、智恵を絞つた考へも、始終筒ぬけに、政府の方へ知れて居た。跡になつて考へれば、迂濶のやうであつたが、元氣の横溢して、野心の満々たる、當時の林としては、どうも此弊は、遁れなかつたのであらう。

所が、茲に、意外の事が展開した。其前に一遍、國へ歸つた時に、兎に角、西郷の方へも、自分共の計畫を、告げて置く必要がある、と思つて、村松正克、藤好静の二人を、何志の代表として、戦地へ送つた。此二人が、日向の海岸へ上陸して、圖らずも、薩軍の爲に捕虜となつて、宮崎の本陣へ引かれた。其薩軍を、統轄して居た人が、桐野利秋あつたので、藤、村松の二人は、却つて危き命を助かつた上に、夫が爲に桐野に、早く會ふ事の出来たのは、甚だ好都合であつた。其時、高知縣の士族が、主として、四國から事を起す、といふ事を、細々と物語つたので、桐野は大層喜び、二人を、陣中ながら、充分に歡待をして呉れた。それから二人は、無事に高知へ歸つて來たのである。此秘密が、早くも官軍の方へ洩れた。夫が何ういふ譯で漏れたか、といふに、當時薩軍は、熊本の攻城戦に敗れて此の方面へ、退却して居た時であつた。藤、村松の二人が、高知縣人て、應援の爲の使ひだ、といふ事が、自然に洩れたので、幾分、失望を有つて、戦つて居た人達が、非常に夫が、爲に元氣付いて、父兄の許へ送る手紙の中に、其事が、想像を加へられて、誇大に書いてあつた。中には、朱が發信しないで、懷中へ入れたまゝ、討死を仕たものもある。仕死骸を、官軍が收容して、身體検査を仕たから、その手紙が出て來たので、原來、土佐の士族が、適かに應援を仕て、事を起すのである、といふ事が、一時にパツと廣まつた。無論、此事は、中央政府の方へも、報告があつたし、前から、知れて居た林の計畫と、符節を合せるやうな事であるから、最早、林一派の運命は、盡きて居る譯だ。斯した所に、人間社會の事の、面白味はあるのだ。けれども實を言へば、甚だ、迂闊な次第ではあつた。

最初の計畫から言ふと、熊本城の連絡が通じない中に、中央で兵を擧げる考へてあつた。熊本城を早く取れば、薩軍の兵力は、益々振ふるふのであるから、戦争は、無論永引く。若、熊本城を奪る事が出来ないうて、官軍に、連絡を付けられれば、夫と反對の結果になる。薩軍の運命は、熊本城の取れるか、取れないのにある、と見て、成るべく、其事の決せざる以前に、事を擧げる心算であつたのだが、人間の事、多く金に左右される。金に縁の薄かつた爲に、事は、遅々として運ばず、却つて、政府の爲に、其計畫の裏をかゝられた傾きになつた。然れば、味方だと思つて居た、執つて押へられて、敵の利する所となるのは、既う決まつて居たのである。

一七

神戸へ着いて見ると、また一つ、手違ひが出来た。待合せて居るべき筈の、ロザーは、林の到着が、一日遅れた、といふので、東京へ行つて仕舞つた、といふ。忌ましくしい、とは思ふけれども、今更に仕様がなない。三菱の支店へ、車を飛ばして、金を事を談じに行くと、其事は、社長から、既に命が下つて、大阪の支店に於て、支出する事になつて居る、といふ答へであつた。直に大阪へ廻つて、支店へ行くと、應接所へ通されて、彼是一時間も待たせられた上に、廳で、會計係が出て來て、

「さア、之を檢ためて、お持ちなさい」
 渡された、大きな包みを見て、有造も驚いた。一萬五千圓位の金が、一抱もあるやうなズツクの袋へ入つて居る。不審の眉を蹙めて、袋の口を締めてある紐を、解き乍ら、中を見ると呆れた。其頃に未だ有つた、十錢、二十錢、五十錢の、小紙幣を集めて、それに一圓二圓の紙幣を交ぜ、夫が一萬五千圓といふのだから、成程、嵩張つたに違ひない。一々、數えて居た日には、夫だけでも、二時間や三時間では六ヶ敷い。林も少し勃然として、
 「之は、小紙幣ばかりのやうだが、猶少し、携帶に便利の、大紙幣はないのですか」
 會計係は、頭を掻きながら、

ロザーの如きも、此時は、既に、政府の意を迎へて居たのであつた。又味方とまで、重く見ないにしても、多少は同情を、有て居るものと、想像して居た岩崎の如きも、全然、政府の手に歸して居たのである。夫等を宛に、金の事や、鐵砲の事を、心配して居たのだから、巧まい運びの付かなかつたのも、當然な次第である。謂はゞ、林の奔走は、空を打つて居たのだ。いくらでも、打てば打ほど、自分の腕が渡れて、何の得る所もないのみならず、その疲れた所を、執つて押へられて、敵の利する所となるのは、既う決まつて居たのである。

「何とも、お氣の毒ですが、政府の御用に、船は引上げられて仕舞つて、下渡し金は、未だ無い、といふやうな都合で、自然、諸方の店から、掻き集めて来た金でかすら、斯ういふ始末になつたのです。これでは、御不都合でせうかしら」

「同じ紙幣だから、苦情をいふ譯ではないが、切めて五圓とか、十圓とか、いふなら格別、之ぢや、數へるにも、暇が角つて、仕様がなからぬ」

「大きに、御道理です。夫ぢや、何處かで兩替でも、させる事に致しませうか。何しろ、一萬五千圓といへば、大金で御座いますから、今日の間には、合ひますまい、と心得ます」

先方は、林の謀叛に、賛成して居るのではないから、極めて暢氣な事を、言つて居る。此方は、時間の都合を見て働いて居るのであるから、紙幣の引替に、一日も二日も費るといふ、そんな馬鹿な事は、仕て居られないのだ。

「宜しい。之でも宜い」

無難作に立上つた有造は、紙幣も檢ためずに、夫を持つて、戸外へ飛出した。門口に待たせて置いた、俥に乗つて、直に、梅田の停車場へ、驅付させる。俥の轆轤が下りる途端に、神戸行の汽車は、今走り出した。又一時間を空しく待たなければならぬ。漸う次の汽車に乗つて、神戸へ着いて、宿屋の拂ひも早々に、海岸へ來ると、横濱行の汽船は、煙を上げて今出やう、といふ所だ、最早、時間が切迫して居るのだから、小舟を雇つて急がせる。二艇に仕やう、と思つたが、船頭が、一人しか居らぬ、といふので、據らなく、一人に漕がして行くと、生憎、風の甚い日で、波が高いから、舟は思ふやうに進まず、途中に、愚圖々々して居る。有造が、ガミガミ小言をいふので、船頭は、汗を流して、艫を押すけれど、小舟は、思ふやうに進まない。其内に沖合の汽船は、ソロ／＼運轉を始めた。艫に障つて、疋腹がジリ／＼起つて來るが、何うにも仕様がなぬ。

もう汽船は、沖合の方へ、小さく見えるやうになつた、船頭は、頭を掻き／＼、詭を言ふ。今更に叱り付けた所

で、仕様がなぬから、以前の濠洲へ、引返して來た。宿屋へ歸つて來て、聯合はせて見ると、此方の横濱行には、一週間の間があるといふ。さあ斯うなると、氣ばかり急ぐが、肝腎の足が動かせないのだから、仕様がなぬ。東海道線の、未だ通じて居なかつた頃であるから、其不便は、夥しい。流石の有造も、我を折つて、一週間待たうか夫とも、陸行で上京仕やうか、何方に仕たものであらうかと、右つ左いつ、思案に耽つた。何う考へて見ても、之から晝夜兼行で、俥を乗替引替して、行つた方が早い。之から驅付けて、果してロザリーに、會へるか何うか、其邊も判らないが、兎に角、然う仕た方が宜からう、といふ考へになつて、彌陸行という事に決した。

一八

未だ其頃は、神戸から京都までしか、汽車は通じて居なかつたから、陸行するとならば、京都から先は、俥の便に、據る他はないのであつた。林は、夕方五時の汽車に乗つて、京都へ向つた。七條の停車場へ着くと、自分の氣の故か、何となく、例よりは、巡查の數も多いやうで、變な目付を仕た奴が、キヨロ／＼仕ながら、汽車から降りる人を見腕んで居るやうであつたが、格別意にも留ないで、改札口へ行つて、外へ出やうとすると、一人の巡查が、ツカ／＼と進んで、丁寧に敬禮を仕た。有造は、軽く頭を下げて、直、俥に乗らうと、すると、

「え、失禮で御座りますが、貴下は、高知縣の林先生で、御座りますか」

「左様、何か用事かね」

「ナニ、別に用事といふのでは御座りませぬ。一應、伺つただけで御座ります」

何ういふ事情か、少しも判らない。何だか變だ、とは思つたが、其儘、俥を急がせて大津街道へ向つた。俥夫には、賃錢も定ないで、酒代は與から急いでやれ、といふたのだ、此様良いお客は、一年の中に幾人もない。此仕事を一杯、勤めれば、二日や三日、遊んで居ても、食べるだけの賃錢を貰へるのだと、大喜びで、駈け出した。何うせ京都の俥

夫だから、駈け出したといつた所で、然う早い譯ではない。土地の氣風でもあらうが、京都の人は、切て氣が恠暢として居る。何をすることも、手取早く運ばない。江戸ツ子の氣の短い者なんぞが、京都見物に出掛けて、宿屋へ入ると直に、翌日の勘定まで置いて置いて、夫が漸う、出立の時に間に合ふ、と云ふ位のものだ。何事に付ても、悠然仕た所がある。傳夫なんぞも、仍且其通りだ。林は、先を急ぐのだから、傳夫の上で、始終、聲を掛て急がせる。雖然、體格の立派な人であつたし、殊に、まだ年の若い、血氣の時であるから、體量も、却々多いので、傳夫の脚は、存外重かつた。

今は、隧道になつて、汽車は、其中を通るやうになつて居るが、和歌俳句などにも、類例に出されて、却々有名な、逢坂山といふのがある。昔は、關所があつて、往來の人を、誰何仕たものである。其逢坂山へ、傳は掛つた。最早夜の九時頃であらうか、道に人通は絶えて、寂として居る。背後の方から、何となく、招ふ人があるやうに、思はれてならぬ、不思議に思つて、林は、傳の上で、窮屈さうに、後を振り向いて見ると、幽かに、提灯の火が、チラ／＼見え、オイー／＼と言ひながら、傳を急がせて來るものがある。然し、此邊で、自分は呼ばれるやうな、覺えはないから、大方、他の者でも、呼んで居るのだらうと、其儘傳夫を急がせて、坂へ掛つた。其内に、追々聲が近くなつて來て、最早、ハツキリと聞える。挽いて居た傳夫の、耳に入つたものか、後押を仕て居た奴が、傳に掛た左手を放しながら、振返つて見ると、

『オイ、待たぬか傳夫』

確かに、此傳を、呼止めて居るのであるから、轆棒を擱んで居る者に聲を掛て、止まらうとした。傳の上の林は、

『コレ、何故、傳を止めるのか。ドン／＼走らせなけりや、可かぬよ』

『へエ、跡の方で、呼んで居りますから……』

『呼んで居たつて、辨やせぬから、行くが宜い』

『然うもならないので、御座いますから、少々お待ちなさい』
押問答を仕て居る中に、追駈て來た傳が、側へ來て、轆棒が降ると、傳の上から、ヒラリと飛下りたのが一人の警部である。慇懃に、敬禮を仕ながら、

『ア、先生は、高知縣の林有造君と、仰せられますか』

『然うぢや、吾輩が林ぢや』

『自分は、京都警察本部の西田と言ふ者で御座いますが、上官の命令で、お跡を慕ふて、參りました。是非、御同道を、願ひ度いのですが、如何で御座いますか』

『いや、そりや甚だ迷惑だ。少し急ぎの用事があつて、東京へ行く者である。今茲で、後へ引返すなどといふ事は出來ぬ』

『御道理で御座いますが、何しろ、長官の命令で御座いますから』

『いや、君は、何ういふ命令で受けたか、知らぬけれど、そりや、君の長官であつて、吾輩の長官でないのだから、同じやうにはならぬ』

『はい』

『夫ともに、拘引をするなら、爲るやうに、命令書を持つて來たか』

『仰せては御座いますが、拘引を致す、といふ次第では無いのです。格別、お手間は取らせぬ考へて御座りますから御同道を願ひたいので御座います』

『手間は取らせぬ、と言つて、先方へ行つてから、手間が取れても、喧嘩にはならぬからな、甚だ迷惑だ、御免被むらう』

争つて居る處へ、後から息急き切つて、駈け付けて來たものが二三人、其跡から又、傳で追付く者もあつて、制服

の巡査が二人、其他は平服の者であるが、グルリと、林の俵を取巻いた。警部は、猶も言葉を低く仕て、
「甚だ恐れ入りますが、何うぞ、御同道を願ひたい。自分の役目の上より、此事を申付かりまして、先生に拒まれた
から、と言ふて、引取る譯にはなりません。枉げても、お伴れ申さなければなりませんから」
理窟は構はず、飽までも、伴れて行かう、といふ様子である。有造も、事態甚だ穩かならずと見たが、今此處で、
如何に争ふた處で、結局、之だけの人数で来たのだから、無理にも、伴れて行くに違ひない。而て見ると、争ふのは
愚な譯であると、早くも覺悟を仕て、
「宜しい、夫ならば同行仕やう」

「左様ですか、有難う存じます。自分の役目も、夫で相済みますから」
有造は、不承々に、俵夫に申付けて、轆棒を向け直させた。警官は、其前後を取巻いて、行くのである。
俵の上で、熟考へた有造が、

「こりや可かぬ、確かに、計畫の内情が、露顯に及んだものに違ひない。兎に角、相當の覺悟は仕なければならぬ」
と思つたので、鐵砲の事に付いて、中村貫一と往復の書面が、一二本、懐中にあるのを、竊に取出して、端からビ
リ／＼引裂いては、更に夫を、細かに千切つて捨てる。細かい細切が、夜目にもヒラ／＼と、舞ふて知れる。巡査は
夫を拾はうとして、那方へマゴ／＼此方へマゴ／＼。俵の上から、有造が之れを見て、忌々しい事をする奴だと、思
つた。手紙がなくなつたから、今度は、何にも書いてない半紙を引裂いて、小さく千切つて投ると、調べて居る間が
ないから、夫を巡査が、拾ながら跡から躡て来る。林も、子供のやうな悪戯を仕たものである。

一九

警察本部に來ると、應接所へ通された。巡査に番をされて、暫らく待つて居ると、廳で、正面の硝子戸を開けて、

入つて來たのが、最前の警部と違つて、服装や態度の上から考へても、上級警部に違ひない。徐に、椅子に着いて、
「お急ぎの御旅行中、お引立を仕て、甚だ失禮した。鳥渡、お訊ねを致したい筋合の事があつて、お伴れ申したので
あるから、何卒、有體に、陳述を仕て戴きたい」

「宜しい、何でもお訊ねなさい。併し、念の爲め聞いて置くが、吾輩を、罪人として扱ふのであるか、何ういふ取扱
をするのか其邊を、確かめて置きたい」

「いゝ、決して罪人扱ひを、致す次第ではない。何うしても、お訊ねをして置かなければならぬ事があるので、強て
お入米を、願ふたのであるから、其意で、お答へを願ひたい」

「宜しい。何ういふ事を、訊ねるのか」

「貴下は 本年の二月中旬、東京から、神戸を経て、國許へ、お歸りになつた事が有りますな」

「有る」

「其節に、後藤象二郎君と、御一緒でしたか」

「左様」

「何ういふお話が、ありましたか、其點を伺ひたい」

「夫は、種々な話はあつたが、然し、何ういふ事情で、然ういふ事を訊ねるのか」

「何ういふ事情、といつて、別に、説明は能ないのですが、たゞ夫を伺ひたいのです」

「それを、説明が出来ない、といふなら、吾輩の方でも、答へをする事が出来ぬ」

「然し、お差支への無い限りは、お答へを願ひたいものですが、如何でせうか」

「吾輩の方で、差支へないと思ふことを、聞いても、何の役にも立つまい。聞かれて、差支へあるやうな事ではなけれ
ば、君の方でも、訊問の甲斐が、ない譯ではないか」

「は」
「而て見れば、吾輩に差支へのある事は、訊かれても、言ふ事が出来ぬのぢやから、寧ろ、何事も訊かず、済ますが宜いぢやないか」

切て、人を調べるといふ事は、難かしいもので、殊に、調べられる者の方で、調べる人より、人格が高く、位置も上である、といふやうな場合に、調べる係りは、例も苦しめられるのであるが、之を巧に綾なして、訊問の要領を得る。其處に、調べの上手下手といふ事が、あるのだ。然し、林と此警部とでは、餘りに、人物が違ひ過ぎるから、何方が調べて居るのか、判らない位に、有造からきめ付られて、ヘドモドして居るのだ。背後の硝子戸を、コツ／＼コツ／＼叩く者がある。警部は、其方を振返ると、急ぎ有造に會釋して、

「鳥渡、失禮をいたします」

中座して、外出へ出た。暫くすると、入つて来て、又別の事項に就て、訊問を初める。有造が、嚴しくきめ付る。背後の硝子戸を、コツ／＼叩くものがある。前のやうにして、又警部は、外へ出て行つた。暫らく経つと、又出て来て、訊問をする。硝子戸を、コツ／＼叩く、又出て来て調べる。剣突くを喰ふ。硝子戸が、コツ／＼鳴る。同じ事を繰返すこと十數遍、結局、要領を得ないで、訊問は中止となつた。何の事だか、少しも譯が分らない。併し、有造の想像は、他に誰か、室外に居て、此警部を操つて、訊問を爲せて居るに違ひない。それが誰であるかを知りたいと思ふが、何うしても、夫だけは判らなかつた。

最後に、室外へ出た警部は、大部、時刻を移して、又入つて来た。大方、何事かの協議でも、して来たのだらう。

「エ、甚だ失禮を致したが、最早、之で差支へ御座いませぬから、お引取を願ひたい」

「は、ア、夫ぢや歸つても宜いのかね」

「全體、君方は、何で吾輩を調べたのか、訊問の要旨も、不明であつて、從つて、吾輩の答へも無論明かでないに違ひない。何の爲に呼返し、何の爲に調べたのか、殆んど要領を得る事が出来ないが、斯の如き事で、急ぐ旅行をして居るものを、途中から引立て、来て、長い時間の訊問をする、などいふ事は、甚だ怪しからぬ。全體、何者が申付けて、斯の如き事を、させるのであるか。恐らく、君一人の考へではなからう。指圖をして居る者が、あるに違ひない。其者の名前を、言ひなさい。参考の爲に、訊いて置かう」

言葉烈しく、警部へ、喰つて掛つた。警部は、迷惑さうな顔色で、

「然う御立腹では、甚だ恐縮ですが、決して、然ういふ次第ではないのですから、何うか、御諒承を願ひたい」

「いや、君が如何に辯疏しても、硝子戸をコツ／＼叩くと、引き込んで行つて、さらに時を移して来るのは、確かに協議をしたに違ひない。其硝子戸を叩く奴を、茲へ引き出さない。今度は、吾輩の方で、訊問の次第がある」

「彼れは、他の用事で、同僚が呼び出したので御座いますから、何卒、御見遁しを願ひたい」

「いや、然うは認めない。同僚が呼んだ、といふならば、其同僚を、茲へ引張り出せ。急ぎの用事で、旅行する者を途中から引立て、来て、その調べ中に、他の用事があるから、といふて、係りの者を呼出して益時間を費させるなどいふ、不親切な事をするなら、將來の爲にならぬ。吾輩が、其奴を叱り置かう、と思ふから、此處へ引出せ。有造も、大人氣ないとは思つたけれども、餘りに、癪に障つたやうかたであるから、益言葉を荒く、責付ける。警部は、マゴ／＼して、平謝りに謝まるので、殆んど、要領を得られない。左右して居る中に、大分時刻も経つて、最早、十二時過ぎだらう。無論、之から立つて行く、といふ事も難かしい。夫に此様調子で、チヨイ／＼途中で、押えられ、根も葉もない事を調べられて、手間を取るやうな事があれば、東京へ歸るまでに、何れ程の日數が、費るか分らない。空しく宿屋に、五六日を過ごすといふのも、莫迦々々しい譯だが、途中で、此様目に遭ふ位なら、神戶へ歸つて、次の船の出帆を、待つ方が優してであると、胸の中で、スツカリ考へ直した。夫にしても、癪に障るのは、此事

であるから、猶一息、苛め付けてやらうと、面白半分で、有造は、警部の方を、睨と見る。

一一〇

警部は、變な目付で、ジロ／＼見られるから、何となく、調子が悪い。

「最早、用事は済みましたから、お歸りになつても、差支へありませんね」

「イヤ、其方は、差支へはななくとも、此方に、差支へがある。些、申入たい事があるのぢや」

「は、ア、何ういふ事でせうか」

「殆んど、何の意味とも判らず、斯ういふ工合に、伴つて來られて、更に、要領を得ない調べをされて、最早宜いか

ら歸れ、などは、甚だ怪しからぬことだ。これから先、東海道筋の、要所々々の警察で、之をやられては、甚だ迷惑を感じる。乃で、請求したい事があるのだ。それは他でもないが、吾輩に對して、取調をした處が、何等の不審

もない。此以上疑ふべき點がないから、滞りなく、通過させて宜しい、といふ意味の書面を、貰ひたい」

之には、警部も聊か呆れて、林の顔を、凝乎と見た。凡そ如何なる場合には、此様、莫迦々々しい書面を、警察が

個人に出す、といふ事は、未だ聞いた事がない。

「夫は、折角のお望みですが、チト取計ひ兼ねます」

「之は怪しからぬ。出さなければ、出さぬで宜い。然らば、何故に、吾輩を此處まで伴つて來たのか。其次第を、説明

しない」

「さあ、夫は」

「君に、其説明が出来なければ、君以上の官吏が、まだ居るだらう。君の一存で、之を計つたのでは無からうから、

其申付けた官吏を、伴つて來なさい。吾輩から、談判しやう」

故意と拗れて、突掛つて來るのだから、何うにも仕様がなない。殊に、對手が、一介の壯士といふてはなし、此時既に、社會に於ても、相當の位置を有て居る、林の事であるから、殆ど、警部も、持餘した様子である。

背後の硝子戸を、又コツ／＼と、叩くものがある。警部は、臆て立つて行つた。直に出て來て、

「御請求の書面は、承知致しました。何ういふ態に、書きますか。お望みがあるなれば、其文案をして頂きたい」

「別に、文案はするに及ばない。今いふだけの意味の、通じるやうに、書さへすれば宜い。だから、其方で、然る

べくやつて呉れ」

「宜しい、承知致しました」

之から、警部は、書面を書いて、林に渡した。有造は、之を見て、

「之へ、警察の判を捺して呉れんけりや何の效もない」

「夫は、承知致して居ります。宜しいとなれば、直にも捺しますから」

「宜しい」

乃で、大きな判を捺して、お墨附は出來上つた。有造は、之を懷中へ入れると、又更に、

「就いては、一應お訊ねしたい。斯ういふ書面を書いて、お渡しになる所から見ると、吾輩を伴つて來たのは、殆ど

何の事か、意味が無いのだ。徒らに、無事の良民を拘引して、此迷惑を掛けた、といふ事は、甚だ、警察として、

失態であらう、と考へる。時間も既に晩いし、如何に證明書があつても、一々、夫を示して通る、といふものも、面

倒な譯であるから、吾輩は、是から神戸へ歸つて、海路を東京へ出る積りである。斯ういふ事になつたのは、詰ま

り、警察の過失からであるから、七條の停車場から、逢坂山までの傳賃と、夫から此處へ來たのを併せて、當然、

警察が、支拂をして宜からう、と思ふ。夫に、最早汽車も出ないのぢやから、一晚泊つて、明日の朝行く事にする

から、從つて宿屋も、警察の方から、相當の處へ、案内して然るべし、と思ふが、此儀は、何う考へられるか」

警部は、彌驚いた。何といふ難かしい註文をする男だらう、如何にも、吝嗇臭い事をいふ奴だ、と思ひながらも豈夫、然うも言へない。計らひ兼ねて居ると、又誰か、硝子戸をコツ／＼叩く。有造が、之れを見て、ハハア相談に行くな、と思つて居ると、案の定、警部は外へ出た。臆て出て来て、是も其通り計らう、といふ事になつた。有造はニヤ／＼笑ひながら、

「ヤ、甚いお手敷を掛けた。拙者は、是で出掛けるから、就いては、此袋は、巡査にでも、門の處まで、持たせて遣して呉れ」

「は、宜しい。何か大切な物でも、入つて居るのですか」

「ナニ、それほど大切な物でもないが、金が一萬五千兩ばかり、入つて居る」

「えッ、……は、あ、金子ですか」

「うむ」

有造は、得々として、肩を聳やかして、出て行つた。

一一一

其晩は、京都へ泊り、翌朝の一番汽車で、神戸へ歸つて来て、先づ五日餘りを、空しく待合せねばならぬ事になつて、此際に、猶一つ、述べて置かなければならぬ事は、神戸に潜伏所を設けて、上海と東京との連絡を取つて、鐵砲の方の、係りを引受けて居た、大江卓の事である。

林の奔走は、充分に力を入れてやつて、居るのであるけれども、運びが思ふやうでない。夫には、金の出来ない事や、其他の事情があつて、然うなつて居る、といふ事は、大江も、能く察して居るが、何となく、時期を失ふの恐れがあるやうに、思はれてならない。且は、熊本城の連絡が付いて、官軍の勢ひは良くなつたが、其反對に、薩軍の方

の勢力は、著しく弱くなつて来た。此勢ひを以て、押で行かれれば、此方の手順が付かない中に、薩軍の勢ひが、窮まつて仕舞ふであらう。夫に就ての聯鎖とも言ふべき、目覺しい仕事をやつて置かなければ、何うも都合が悪い、といふ考へであつた。乃て大江は、一人苦心して、其計畫に掛つたのである。

豊前中津の士族で、河村矯一郎といふものがあつた。年は若い、仲々元氣な、膽玉の、相當に坐つて居た男である。林の紹介で、大江は、此人を知つたのであるが、深く信じて、始終、相談をして居た。此河村を使つて、非常手段を行ふ、といふ考へになつた。夫は何ういふ事かと、言ふと、一人の力を以てするには、暗殺を行ふの他はない。此際に於て、要路第一の大官を倒せば、夫が爲に、政府の内部に動搖を起し、一般の者から見れば、自然、夫が爲に政府の實力を疑ふことになり、薩軍の方へ響けば、猶更、士氣を鼓舞する上に、有力な効果もあらうし、自分共の計畫の運びにも、頗る都合である、といふやうな考へから、或日、竊に、河村を招いて、懇々と、之を説いたので、河村も、遂に夫を承諾した。陸奥も、大江から相談を受けて、竊に、之を扶けたのであつた。

儲、誰を倒したものであらうか、といふ研究になつて、何うせ倒すならば、政府の現状に影響するやうな、立派な者でなければならぬ、といふ所から、内閣顧問の木戸孝允が宜からう、といふ事に決した。陸奥も、大いに同意して自分が愛蔵して居た、黄金作りの刀を、河村に與へた程である。河村は、之を携へて、竊に、木戸の出入を窺つて居た。

木戸を倒さうと、目算したのは、確かに宜つたのであるが、併し、其役廻りを引受けた河村としては、頗る困難の事であつた。爆裂弾か、短銃の力を借りて、狙撃をするなら、格別の事、近付いて切付けやう、といふのは、木戸が餘りに腕が勝れて居るのだから、十の物なれば八九までは、難かしいのである。河村も、木戸の腕前の、勝れて居る事は、豫て心得て居るが、何しろ、向ふ見ずの血氣時代、假令、木戸に、何程の腕前があらうとも、不意を襲ふて斬のに、何の難かしい事は、あるまいと、最早、木戸の首は、自分の手に入つて居る様な心持で、非常な意氣込を以て

毎日のやうに、木戸の隙を、狙つて居たのである。
然し乍ら、木戸の方では、斯ういふ恐ろしい謀計がある、といふ事は、少しも知らなかつた。或日、朝廷の御用を終つて、三四名と、種々打合せの事があつたので、歸りが、存外晩くなつた。御所を出た時は、最早日が暮れて居た。けれども、馬に乗つて、ブラリ／＼旅宿へ歸らうとして、三條通りの東洞院上る御池下る邊まで來ると、町家の左り側から、疾風の如くに、躍り出た怪しの者があつた。木戸は、少しも油斷がないから、ヘテな、と思ふ途端に、ヤツと切付けた。既に眞二ツになつたか、と思ひの他、飛鳥の如く、馬から飛下りる。初太刀を過まつて、猶踏込んで、研り掛て來るのを引外して、小手先を、鐵の鞭で叩いた。早速の早技に、曲者は外す暇もなく、小手を健か打たれたので、刀を落した。處へ乗込んで、猶鐵鞭を揚げて、打たうとする。最早叶はぬと見たか、彼の者は、何處ともなく、闇を幸ひと、逃去つて了つた。跡に残つたのは、黄金作りの銘刀一口、木戸は、夫を拾ふて、徐に宿へ歸つて來た。陸奥が、後に大審院へ引出されて、調べられた、罪條の中の一つが、此刀の關係である。

一一一

話は亦、以前の有造の事に返る。神戸の宿屋へ來てからは、別に、之といふて、變つた事もなかつた。其内に、横濱の船が出る、といふので、夫へ乗込んだ。一晚を、海上に明かして、無事に横濱へ着いた。直に上京して、木挽町の川崎屋といふ、泊り付けの宿屋へ入り、それから、中村貫一を呼んで、ロザーの方へ、鐵砲の事を掛合せると、最初、話の運びが宜かつたにも似ず、ロザーの態度が、甚だ曖昧であつた而已ならず、初め有るといふた鐵砲も、何うやら、無いやうな様子でもあり、如何にも其曖昧な行動に就いては、不快を感じた。けれども、如何とも致儀がない。岡本健三郎の紹介で、其關係が付いたのであるから、此事を岡本に通じて、猶ほ、岡本の盡力を、頼む事にしたのである。翌日の朝、夙く起きて、食事を済ませた所へ、宿の主人が、恐る／＼入つて來た。

「エ、鳥渡、申上げた事が御座います」
「御亭主か、何ぢや」

「どうも、昨晩から、恢しい事が御座いますので、お含みまでに、申上げて置きます」
「うむ、そりや何ういふ事だ」

「荐りに、警視局の方が、お出になりましたして、貴下様の事を、彼是尋ねます。何だか、様子が變だ、と思つて居りますと、今朝は、探偵らしいものが、見張りをして居るやうで、御座いますから、一寸、お含みまでに、申上げます」

「然うか、そりや、妙な譯ぢやな」

宿の主人が、親切に話して呉れたので、京都の一條と言ひ、今亦、此事と言ひ、何うも、様子が訝しい。之は政府の方で、我々に對して、警戒して居るものに違ひないが、夫にしても、俄に、斯う激しくする、といふのは、彌事が破れたかと、流石の有造、其所へ氣は注いたが、事茲に至つては、最早、奈何とも、防ぐべき道は、盡きて居たのである。陸奥に、打合せを爲すべき事があるので、之から、其支度をして、出掛やうといふのだ。俾の用意が出來て、宿を出たが、一丁ばかり來ると、左右からバラ／＼と、駆け出したものがある。其様子から、察するに、無論、其筋の者らしい。

「鳥渡、お待ちなさい」

俾夫が、轆轤を控へる。途端に、向ふの家から、現はれたのが、制服を着して居る警部であつた。

「貴下は、林有造君ですか」

「左様」

「上官の命令に依りまして、貴下を、警視局へ、お伴れ申しますから、左様、御承知なさい」

逢坂山の時は、全然、警部の態度が、違ふて居る。此時は最早、有造も、覺悟をして居たのであるから、徒らに、争ひをするやうなことはしない。併し、押すだけの事は、押して置かなければならぬから、

「何か、嫌疑の次第があつて、伴れて行くのですか」

「左様、嫌疑の次第があつて、調べをするから、連れて參れ、といふので御座いました」

「宜しい、同道致さう」

於是、有造は、遂に、警察官の爲に包圍されて、徐に、警視局へ送られて來た。

神戸を出る時に、警報があつたのだ。夫は鷲尾隆聚と、島本仲道の二人が、捕縛された、といふ事であつた。直接、事件に關係は無いけれども、政府に對する、不平黨の一人として、或點までは、二人も、林、大江の計畫を知つて居たのである。幾分は、注意を爲すべき事だと、思つては居たが、既に之までに、政府の覺悟が進んで居やうとは、思はなかつたのである。其處が、前にいふた、林の智慧倒れてあつて、餘りに政府を輕んじた爲に、斯ういふ失敗を、遂げたのである。

政府では、疾くに捕縛しやう、と思つたのであるが、その關係の範圍が、何れほどに廣いか、鳥渡、知ることが出來なかつた。迂闊に手を出して、夫が爲めに、火事を大きくしては、却つて面白くない、といふ考へもあつて、差控へて居たのである。併し、既に熊本城の聯絡も通じたし、連累も、大凡は判つたから、其處で、いよく捕縛に着手したのである。

一一二

林の拘引された後、其他の關係者も、悉く拘引されて了つた。獨り此際に、拘引を道がれたのは、元老院副幹事の陸奥宗光一人であつた。何様いふ譯で、最も深い關係のある、陸奥が、同時に拘引されなかつたか、といふに、當時

の政府に於ても、種々の懸引上から、然うしたのである。兎に角、元老院の副幹事ともあるべき者が、政府轉覆の、與黨の一人であつた、といふ事を、世間へ知らせる、といふ事が、政府の信用上、甚だ面白からぬ事であつたのだらう。併し、罪狀の明白な者を、逼して置く、といふ事は出來ないから、孰れ一度は、捕縛の運命に、沈ませるのは、固より當然の事であるけれども、力めて、世人の視聽を驚かさぬやうにして、押えやう、といふ方針であつたらしい。又、然う急いで、押えずとも、逃隠れをするやうな人ではないから、其點に、幾分の安心はあつたのだらう。既に捕縛された者に對して漸々と、調べを進めて行く中に、陸奥の罪狀も、彌明白になつた。夫と同時に、西南の役も鎮定したから、最早、何の憚る處はない。於是、明治十一年の春になつて、彌陸奥をも、捕縛する事になつた。

陸奥の捕縛に就ては、大分政府の内部に於ても、議論があつたらしいが、彼是、揉合つた末に、捕縛といふ事に、決したのである。拘引される二三日前に、有栖川宮より、お招きに預かつて、陸奥は、宮へ拜謁の爲に罷り出た。然るに、其時の御沙汰は、

「汝の身の上に就て、何か、悪い嫌疑が掛つて、早晚、縲紲の恥辱を、受ける事があらうが、現職の儘、然ういふ事になつては、能くあるまい、と思ふに依つて、一時、其職を退いたら、宜からう」

といふ、意味の御話であつた。斯ういふ説諭が有つた、といふのは、陸奥が、平生から、宮の信任を得て居るといふ證據で、此御沙汰を受けた時には、流石の陸奥も、恐れ入つて、引退つたのである。然し、例の氣性として、遂に御沙汰には服さず、依然として、其職に在つたのだから、捕縛をされた時は、官職の肩書を有た儘に、拘引されたのである。

既に、全體の被告の訊問が、殆んど結了に近付いて居た時に、伴れて來られたのであるから、一切の證據が、既に整つて居て、陸奥は、殆んど、辯疏の餘地は、無かつたのである。有名な玉乃世履が、此時の係官で、玉乃が、最も苦心をして、調べた事件といふのが、之であつた。然し、固より罪狀が、明白なのであるから、彌訊問も終つて、

裁判の申渡しの際には、陸奥は、首領の一人としての判決を受け、大正、林の二人が、十年の禁獄、陸奥は五年、其他、刑期に輕重の別はあつたけれども、何れも、有罪になつて、夫々、處置は決つて了つた。

土佐派の陰謀事件といふのは、概略、之で終つたのであるが、若し、陸奥の口が、輕かつたならば、紀州からも、相當な人物が、猶ほ十人位は、引出されなければ、ならなかつたのである。林、大江などにしても、前後權はず、白狀して了へば、此方でも、猶ほ數十人の被告は、出たのであるが、仍且、政府が目星を付けた者丈に止まつた、といふのは、全く、被告一同の口が、堅かつた爲であつた。

當時、林や大江は、無論、死罪を道がれぬ、といふ覺悟をして、死後の事まで、夫々に、考へて居たのであつたが、彌裁判所へ引出されて、申渡しを受けた時には、如何にも、其罰が輕かつたので、本人等も、互に顔を見合せて、政府の寛大なるに、驚いたといふ事である。假令、未だ事を起さなかつたにしても、其時分の政府としては、能く此位の輕い刑で、済ましたものである。之には、夫々議論もあつて、した事であらうが、其前に有つた、同じやうな事件に、比較すると、餘りに輕きに過ぎた、といふ事は、何人も、思ふ所である。

刑期が満ちて、出獄した者のうちで、大臣になつたのが、陸奥、林の二人で、大江は、初期の議會に、下院の豫算委員長になつて、それから、株式取引所の理事長にもなつた。又、朝鮮國王の顧問に、なつたこともあるが、晩年は、鎌倉に隱遁して居た。片岡は、衆議院議長になつてから死んだ。岩神昇は、井原と姓を改めて、何處かの知事を勤めて居たが、隱居生活をするやうになつてからは、世に知られなくなつた。その他の人々も、皆相應に、名は成したやうである。

長井村の突圍戰

薩人以外の、各團隊の事情も、大概は述べ盡した。又、土佐派の陰謀が、全く西郷を中心として、企てられた、といふ事情も、前回で略盡きたから、是れよりは、長井村の突圍戰と、城山に於ける大西郷の終焉を、述べることに爲る。勿論、この以外に、猶ほ幾多の事件や、特記す可き、個人の逸傳もあらうけれども、それを、一々詮索して居ては、殆んど際限もないから、大體の所で、打切つて置き、兎に角、本傳の終結に近づくことに仕やう。

長井村の突圍戰を、述べんとするには、勢ひ、延岡方面の敗戦から、始めるのが順序である。此方面の戰鬪に打負けて、チリ／＼と、逐込まれたのが、長井村であつた。袋の中に、はいつた窮鼠が、却つて、守り猫の隙に乗じて袋の一端を、噛み破つたといふやうな鹽梅に、長井村の重圍を脱して、鹿兒島へ引上げたのが、丁丑戰役の最終であつたのだ。されば、延岡方面の敗戦は、その概略だけでも、述べて置かねばならぬ。

宮崎、高鍋、佐土原の方面が、脆くも敗れて了つたので、肥後に失ふた勢力の回復は、到底見込みがないことになつて仕舞つた。けれども、猶ほ、延岡の根據地を、固守することが出来れば、或は、豊後方面に、衝いて出るの一策も、有つただのだから、兎に角、延岡方面を、飽迄も死守する、といふのが、薩軍の策戦法であつたらしい。

七山西北の谷間よりするものと、國見嶽山脈より流るゝものと、二つの川筋が、山蔭といふ土地へ来て、合して一つの大川となり、東に奔流して海に入る。其南岸に、美々津驛が在る所から、之れを名づけて美々津川と謂のである。